

国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 1 冊

東坂元秋常遺跡 I

2008.2

香川県教育委員会

序 文

東坂元秋常遺跡は香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常に所在する遺跡です。国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴い、香川県埋蔵文化財センターが平成17年度及び平成19年度に発掘調査を行いました。

その結果、古代に開削された大規模な灌漑用水路を検出し、周辺遺跡の調査成果や現在の用水路の分布から、古代の開削以降現在に至るまで、ほぼ同じ位置で埋没と改修を繰り返しながら機能していたことが明らかとなりました。これは、周辺の古代の開発の動向を考察する上で、非常に重要な資料となると思われます。

出土品の整理作業は、香川県埋蔵文化財センターにおいて平成19年4月から3か月の期間で実施し、ここに「国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東坂元秋常遺跡I」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されまるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、香川県土木部道路建設課をはじめ、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年2月

香川県埋蔵文化財センター
所長 渡部 明夫

例 言

1. 本報告書は、国道438号道路改築事業（飯山区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊で、香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常135番地ほかに所在する東坂元秋常遺跡（ひがしさかもとあきつねいせき）の第1次調査、第2次調査の一部を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部からの依頼を受けて、香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、第1次調査を平成17年11月1日から平成18年3月31日、第2次調査を平成19年4月1日から平成19年8月31日まで実施した。各調査の担当は以下のとおりである。
第1次調査 蔵本晋司・小野秀幸・中嶋将史
第2次調査 木下晴一・山元素子・木野戸直
4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部道路建設課、香川県中讃土木事務所、丸亀市教育委員会、地元自治会、地元水利組合
5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の編集は蔵本が担当し、執筆は下記のとおり分担した。
第I～III・V章 蔵本
第IV章第1節 株式会社 古環境研究所
第IV章第2・3節 株式会社 加速器分析研究所
6. 報告書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
松本和彦、藤澤良祐
7. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第IV系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。
SB 掘立柱建物跡 SD 溝状遺構 SK 土坑 SP 柱穴 SR 自然河川
SX 出水遺構・不明遺構
8. 本遺跡の報告にあたっては、下記の方々・機関等に鑑定・分析を依頼した。
14C年代測定・樹種同定 株式会社 加速器分析研究所
花粉分析 株式会社 古環境研究所
9. 挿図の一部に国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
10. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。
11. 石器実測図中、平面図中の濃いトーン部分および輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れを表す。なお、調査時の折損は黒く塗りつぶしている。
12. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1994年度版』による。

目 次

第 I 章 調査の経緯

| | |
|---------------|---|
| 第 1 節 調査に至る経緯 | 1 |
|---------------|---|

| | |
|----------------|---|
| 第 2 節 調査・整理の経過 | 1 |
|----------------|---|

第 II 章 遺跡の立地と環境

| | |
|-------------|---|
| 第 1 節 地理的環境 | 4 |
|-------------|---|

| | |
|-------------|---|
| 第 2 節 歴史的環境 | 6 |
|-------------|---|

第 III 章 発掘調査の成果

| | |
|-------------------|---|
| 第 1 節 各調査区の概要と土層序 | 8 |
|-------------------|---|

| | |
|-------------|----|
| 第 2 節 遺構と遺物 | 19 |
|-------------|----|

第 IV 章 自然科学的分析

| | |
|----------------------|----|
| 第 1 節 東坂元秋常遺跡に係る花粉分析 | 79 |
|----------------------|----|

| | |
|-------------------------------|----|
| 第 2 節 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS 測定) | 84 |
|-------------------------------|----|

| | |
|-----------------|----|
| 第 3 節 樹種同定結果報告書 | 89 |
|-----------------|----|

第 V 章 まとめ

| | |
|-------------|----|
| 第 1 節 遺構の変遷 | 91 |
|-------------|----|

| | |
|------------------|----|
| 第 2 節 古代幹線水路について | 95 |
|------------------|----|

挿図目次

| | | | | | |
|------|--------------------|----|------|-----------------------------------|----|
| 第1図 | 遺跡位置図 | 1 | 第38図 | SB03 平・断面図 | 42 |
| 第2図 | 調査区割図 | 2 | 第39図 | SB04 平・断面図 | 43 |
| 第3図 | 大東川流域の地形分類略図 | 5 | 第40図 | SB05 平・断面図 | 44 |
| 第4図 | 周辺遺跡分布図 | 7 | 第41図 | SB06 平・断面図 | 45 |
| 第5図 | 調査区周辺の地形分類概念図 | 9 | 第42図 | SD07 平・断面図 | 46 |
| 第6図 | A・B地区の土地改変図 | 10 | 第43図 | 近世独立柱建物・柱穴出土遺物実測図 | 47 |
| 第7図 | A地区土層断面図1 | 12 | 第44図 | SK04・07・08・11～18 平面・土層断面図 | 52 |
| 第8図 | A地区土層断面図2 | 14 | 第45図 | SK09・10・19～28 平面・土層断面図 | 53 |
| 第9図 | B地区土層断面図 | 16 | 第46図 | SK29～39 平面・土層断面図 | 54 |
| 第10図 | C地区土層断面図 | 18 | 第47図 | SK40～46 平面・土層断面図 | 55 |
| 第11図 | 黄褐色粘土層出土石器 | 19 | 第48図 | SK47～55 平面・土層断面図 | 56 |
| 第12図 | SD17 出土遺物実測図・土層断面図 | 19 | 第49図 | SK56～64 平面・土層断面図 | 57 |
| 第13図 | SX05・06 平面・土層断面図 | 20 | 第50図 | SK65～73 平面・土層断面図 | 58 |
| 第14図 | SD01～04 土層断面図1 | 21 | 第51図 | SK74～82 平面・土層断面図 | 59 |
| 第15図 | SD01～04 土層断面図2 | 22 | 第52図 | 近世土坑出土遺物実測図1 | 60 |
| 第16図 | SD01～04 遺物出土位置図 | 23 | 第53図 | 近世土坑出土遺物実測図2 | 61 |
| 第17図 | SD01～03 出土遺物実測図1 | 25 | 第54図 | 近世土坑出土遺物実測図3 | 62 |
| 第18図 | SD01～03 出土遺物実測図2 | 26 | 第55図 | 近世土坑出土遺物実測図4 | 63 |
| 第19図 | SD01～03 出土遺物実測図3 | 27 | 第56図 | 近世土坑出土遺物実測図5 | 64 |
| 第20図 | SD01～03 出土遺物実測図4 | 28 | 第57図 | SX02・SD05 土層断面図 | 65 |
| 第21図 | SD04 出土遺物実測図 | 29 | 第58図 | SX02・SD05 出土遺物実測図 | 66 |
| 第22図 | SB01 平・断面図 | 29 | 第59図 | SD06 土層断面図 | 69 |
| 第23図 | SB02 平・断面図 | 30 | 第60図 | SD06 出土遺物実測図 | 69 |
| 第24図 | SB01・中世柱穴出土遺物実測図 | 30 | 第61図 | SD18～23 土層断面図 | 70 |
| 第25図 | SK05・06 平・断面図 | 31 | 第62図 | SD13・22・23・26・27・29 出土遺物実測図 | 71 |
| 第26図 | SK05・06 出土遺物実測図 | 32 | 第63図 | SD26～28 土層断面図 | 72 |
| 第27図 | SD08 土層断面図 | 32 | 第64図 | SX07・09・10・11 出土遺物実測図・平面・土層断面図 | 73 |
| 第28図 | SD07 土層断面図 | 33 | 第65図 | 包含層等出土遺物実測図 | 75 |
| 第29図 | SD08 出土遺物実測図1 | 34 | 第66図 | 東坂元秋常遺跡における 花粉ダイアグラム | 82 |
| 第30図 | SD08 出土遺物実測図2 | 35 | 第67図 | 遺構変遷図1 | 92 |
| 第31図 | SD07 出土遺物実測図 | 36 | 第68図 | 遺構変遷図2 | 94 |
| 第32図 | SD24・25 土層断面図 | 37 | 第69図 | 近世陶磁器産地別組成表 | 95 |
| 第33図 | SR01 土層断面図 | 37 | 第70図 | 用水路と周辺遺跡分布 | 96 |
| 第34図 | SD25・SR01 出土遺物実測図1 | 38 | | | |
| 第35図 | SD25・SR01 出土遺物実測図2 | 39 | | | |
| 第36図 | SX03 平面・土層断面図 | 40 | | | |
| 第37図 | SX03・04 出土遺物実測図 | 41 | | | |

表目次

| | | | | | |
|-----|-----------------|----|-----|-------------------|----|
| 第1表 | 近世土坑・性格不明遺構一覽表1 | 76 | 第3表 | 近世土坑・性格不明遺構一覽表3 | 78 |
| 第2表 | 近世土坑・性格不明遺構一覽表2 | 77 | 第4表 | 東坂元秋常遺跡における花粉分析結果 | 81 |

写真図版目次

| | | | |
|-------|----------------------------|-------|---|
| 図版 1 | 東坂元秋常遺跡の花粉 | 図版 15 | A-1 区 SD01 上層遺物 (50) 出土状況 (東より) |
| 図版 2 | 柱材の顕微鏡写真 | | A-1 区 SD01 上層遺物 (50) 出土状況 (南より) |
| 図版 3 | 遺跡付近空中写真 | 図版 16 | A-3 区 SD01 遺物出土状況 (南より) |
| 図版 4 | A-1・2 区全景 (南より) | | B-1 区 SD03 上～中層出土状況 (北より) |
| | A-3 区全景 (南西より) | | B-1 区 SK05 全景 (東より) |
| 図版 5 | B-1 区全景 (南より) | | A-3 区 SD08 全景 (南より) |
| | B-1 区全景 (北より) | | B-1 区 SD01 中層遺物出土状況 (東より) |
| 図版 6 | B-2 区全景 (北西より) | | A-3 区 SP040 遺物出土状況 (西より) |
| | C-1 区全景 (西より) | | B-1 区 SK06 全景 (北より) |
| 図版 7 | C-2 区全景 (西より) | 図版 17 | A-2 区 SD08 A 土層断面 (西より) |
| | A-1 区西壁探掘トレンチ土層断面 (東より) | | A-2 区 SD08 B 土層断面 (北西より) |
| 図版 8 | A-2 区西壁土層断面 (南東より) | | A-3 区 SD08 土層断面 (南東より) |
| | B-1 区東壁土層断面 (西より) | | A-2 区 SD07 A 土層断面 (西より) |
| | B-1 区北壁土層断面 (南より) | | A-2 区 SX03 全景 (南東より) |
| | C-1 区東壁土層断面 (西より) | | A-2 区 SD08 A 土層断面 (南東より) |
| 図版 9 | C-2 区北壁土層断面 (南より) | | A-2 区 SD08 動物遺存体出土状況 (南東より) |
| | A-1 区黄褐色粘土層サマサイト出土状況 (東より) | | A-2 区 SX03 土層断面 (東より) |
| | | | A-2 区 SX03 全景 (北西より) |
| | B-1 区 SD17 全景 (南東より) | 図版 18 | C-2 区 SR01 全景 (北より) |
| 図版 10 | B-1 区 SD01・17 全景 (西より) | | C-2 区 SR01 C 土層断面 (南より) |
| | B-1 区 SD17 B 土層断面 (西より) | | C-2 区 SR01 A 土層断面 (北東より) |
| | B-1 区 SD17 A 土層断面 (北より) | | C-2 区 SR01 西隣下層遺物出土状況 (西より) |
| | A-1・2 区 SD01 全景 (北より) | | C-2 区 SR01 全景 (南より) |
| 図版 11 | A-1・2 区 SD01・04 全景 (北より) | | C-2 区 SR01 B 土層断面 (南より) |
| | A-1・2 区 SD01 と上井用水 (北より) | | C-2 区 SR01 西隣下層動物遺存体出土状況 (東より) |
| 図版 12 | A-2 区 SD01・02・04 全景 (南より) | | 調査前全景 (北東より) |
| | A-3 区 SD01 全景 (北より) | 図版 19 | 出土遺物 (16・26・29・40・20・27・30・41) |
| 図版 13 | A-1 区 SD01 F 土層断面 (北より) | 図版 20 | 出土遺物 (45・50・334・47・51・58・74) |
| | A-1 区 SD01 C 土層断面 (南より) | 図版 21 | 出土遺物 (176・175・177・178・122・180・57・174・179・178・175・177・178・164・122・179・180・174) |
| | A-1 区 SD01 A 土層断面 (西より) | | |
| | A-1 区 SD01 D 土層断面 (北より) | 図版 22 | 出土遺物 (183・63・184・198・1・185・187・186・2・125・67・336・1・124・142) |
| 図版 14 | A-2 区 SD01 E 土層断面 (北より) | 図版 23 | 出土遺物 (54・59・55・127・126・200・201・188・143・181・128・129・66・188・202) |
| | B-1 区 SD01 B 土層断面 (東より) | | |
| | B-1 区 SD03 A 土層断面 (北より) | | |
| | A-1 区 SD04 A 土層断面 (南より) | | |
| | B-1 区 SD01 A 土層断面 (西より) | | |
| | A-2 区 SD04 E 土層断面 (北より) | | |
| | B-1 区 SD03 D 土層断面 (南より) | | |
| | A-1 区 SD04 D 土層断面 (北より) | | |

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

国道438号は、坂出市と徳島県徳島市を結ぶ中讃地域の主要幹線道路である。近年の交通量の増加による慢性的な渋滞の緩和や交通事故の軽減などを目的として、香川県土木部道路建設課(以下、道路建設課と略称)では、同路線の改修工事を計画した。これをうけて香川県教育委員会では、同路線周辺には多くの埋蔵文化財包蔵地が存在していることから、平成5年度より道路建設課と協議を進め、その適切な保護に努めてきた。

今回発掘調査をおこなった東坂元秋常遺跡は、平成15年度と平成16年度の2度にわたる試掘調査の結果、新たに確認された遺跡である。試掘調査は、事前の現地踏査によって、遺物の散布状況や地形環境等を調査・観察し、必要と判断された範囲について実施した。試掘調査の詳細については、既に報告されている(香川県教育委員会編2004・2005)。

第2節 調査・整理の経過

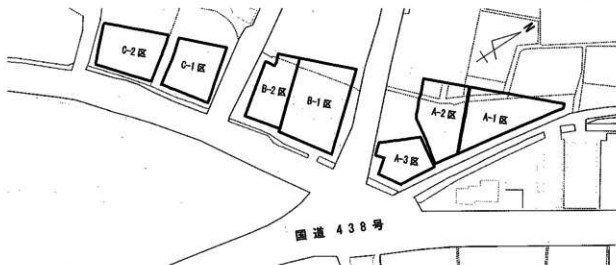
発掘調査は、平成17年度(1次調査)と平成19年度(2次調査)において実施した。1次調査は、試掘調査の結果、事前の保護処置が必要と判断された2,896㎡について、平成17年11月1日より平成18年3月31日の5ヶ月間実施した。調査は、香川県土木部から依頼をうけて、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが担当した。調査では、現場作業員をセンターが直接雇用する直営方式でおこない、また遺構の実測作業では、トータルステーションや図化ソフトを活用するなど、効率的な調査に配慮した。

調査は、現状での地割りによって調査区を北東よりA・B・C地区と呼称することとし、さらに全体の調査工程や遺構の広がり等を考慮して、各地区を1・2の小調査区に区分した。したがって調査区は、A-1～C-2区までの6小区となる(第2図)。

1次調査はまず、調査事務所や安全柵などの設置が終了した11月14日、C-2区より開始した。翌年1月にはA地区の調査に着手し、大型幹線水路SD01などが検出された。3月8日に、この水路を中心としたそれまでの調査成果について地元説明会を実施した。また調査を進めるなかで、試掘調査の結果、遺構が希薄である



第1図 遺跡位置図



第2図 調査区割図

として本調査対象から除外したA地区とB地区の間の用地（本書の調査区呼称でA-3区の部分）へ、幹線水路SD01が延長していることが明らかとなり、その扱いについて道路建設課及び文化行政課と協議をおこなった。協議の結果、遺構の重要性を考慮して、次年度以降に対象地部分を調査することで合意した。

2次調査は、上述したA地区の残地部分とC地区のより西側の計2,545㎡について、平成19年4月1日より同年8月31日の5ヶ月間実施した。2次調査の内容については、次年度以降に予定している報告書へ譲ることとし、以下では割愛する。なおA地区の残地部分は、2次調査時に1区として調査をおこなったが、本書掲載にあたりA-3区と調査区名を変更した（第2図）。

発掘調査の体制は、以下のとおりである。

平成17年度（1次調査）

香川県教育委員会事務局文化行政課

| | | |
|-------|--------|-------|
| 総括 | 課長 | 吉田 光成 |
| | 課長補佐 | 中村 禎信 |
| 総務 | 副主幹 | 河内 一裕 |
| | 主任主事 | 八木 秀憲 |
| 埋蔵文化財 | 課長補佐 | 藤好 史郎 |
| | 文化財専門員 | 山下 平重 |
| | 文化財専門員 | 信里 芳紀 |

香川県埋蔵文化財センター

| | | |
|-----|--------|--------|
| 総括 | 所長 | 波部 明夫 |
| | 次長 | 榊原 正人 |
| 総務課 | 副主幹 | 松崎 日出穂 |
| | 主査 | 塩崎 かおり |
| | 主査 | 田中 千晶 |
| 調査課 | 課長 | 廣瀬 常雄 |
| | 文化財専門員 | 蔵本 晋司 |
| | 文化財専門員 | 小野 秀幸 |
| | 嘱託 | 中嶋 将史 |

(～1.31退職)

平成19年度（2次調査）

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

| | |
|---------------|-------|
| 総括・生涯学習推進グループ | |
| 課長 | 鈴木 健司 |
| 課長補佐 | 武井 壽紀 |
| 副主幹 | 古田 泉 |
| 主任 | 林 照代 |
| 文化財グループ | |
| 課長補佐 | 藤好 史郎 |

香川県埋蔵文化財センター

| | | |
|-----|----|-----------|
| 総括 | 所長 | 波部 明夫 |
| | 次長 | 廣瀬 常雄 |
| 総務課 | 課長 | 野口 孝一 |
| | 主任 | 宮田 久美子 |
| | 主任 | 嶋田 和司 |
| | 主任 | 古市 和子 |
| 調査課 | 課長 | 廣瀬 常雄（兼務） |

副主幹 片桐 孝浩
主任 白井 洋二
文化財専門員 森 格也
文化財専門員 信里 芳紀

文化財専門員 木下 晴一
文化財専門員 山元 素子
囑託 木野戸 直

整理作業は、平成19年4月1日から6月30日の3ヶ月の期間でおこなった。遺物の洗浄や注記作業についてはそれぞれ終了していたことから、遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理などをおこない、本書にまとめた。出土遺物量は、28ℓ入りコンテナ約30箱である。整理作業期間が限られていたこともあり、遺構出土遺物の図化を最優先とし、遺構外出土遺物については特に必要と認めるもののみ図化することとした。

整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成19年度

香川県埋蔵文化財センター

| | |
|----------|--|
| 資料普及課 課長 | 廣瀬 常雄 (調査課長兼務) |
| 文化財専門員 | 蔵本 晋司 |
| 囑託整理作業員 | 榑谷 京子・佐々木 博子・谷本 麗・徳永 貴美・富岡 恵美・ 鳥谷 真希子 |

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

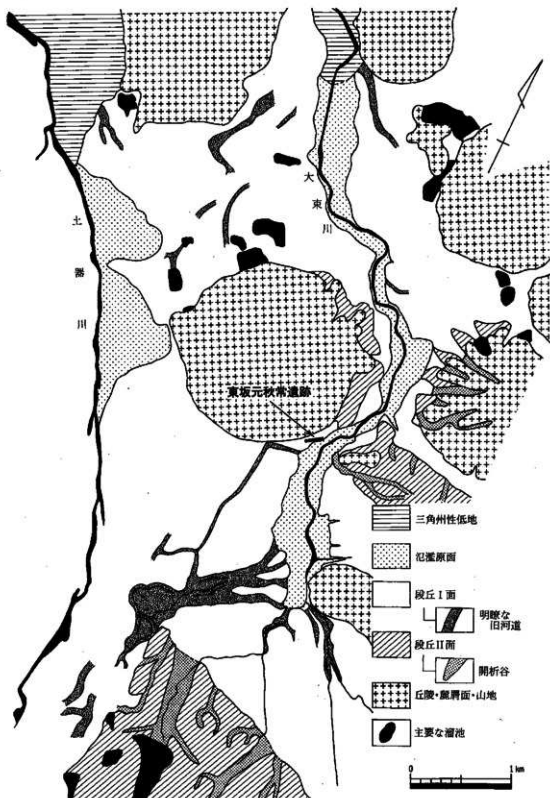
東坂元秋常遺跡は、丸亀平野東部飯野山南東裾部に位置する。丸亀平野は、東西約13km、南北約10kmの扇状地性の海岸平野で、香川県中央部に位置し、東より大東川・土器川・弘田川などの中小河川が瀬戸内海に流入する。平野部東西は、それぞれ瀬戸内海に突出した標高約400mの五色台山地と、標高381mの弥谷山丘陵等の山塊によって画され、また南縁は岡田・高屋原・仲南といった上位及び下位台地が取り巻き、北の瀬戸内海に開けた地形環境を呈する。また、平野部内には標高200～400m程度の中小独立丘陵が散在し、これらの基底部は領家花崗岩類よりなり、頂部付近には讃岐岩質の安山岩が載っている。遺跡は、大東川河口より5km程遡った、左岸の北東方向に緩やかに下る平地上に立地する。遺跡の北西には、標高421.9mの典型的なビュート状の山塊である飯野山が聳立し、東からは標高462.3mの城山より派生する丘陵が長く延び、平野部は幅を狭め、その東西長は最も狭い位置で0.6km程になる。その中央部を大東川が、東西に大きく蛇行しながら貫流している。なお、遺跡周辺の現地表面の標高は11m前後である。

大東川は、綾歌町の高針山北麓台地に源を発する。流域面積55.1km²、支流を含めた流路延長約51.4km（大東川のみでは17.2km）、縦断勾配1/1,300～1/520の河川である（香川県土木部河川課編1980）。上流部は、東大東川、中大東川、沖川、大東川の4川に分流して、段丘部を深く開析して北及び北西方向に流下し、段丘部前面に小規模な扇状地を形成する。また、飯山町上法軍寺沖から下法軍寺島田周辺で相次いで合流して、緩やかに蛇行しながら北西流し、城山南麓の丘陵部より流下する台目川や落合川といった支流を集めて、飯野山以北に沖積平野を形成しながら瀬戸内海に注ぐ。本河川の形成する平野部は極めて狭小で、また河口部東西には聖通寺山、角山、青ノ山といった小丘陵が点在し、平野部への間口は極めて狭い。瀬戸内海へ大きく開けた地形ではないが、平野部北西に位置する青ノ山によって、季節風が遮られて河口部には天然の良港が形成されたと考えられる。本地域の歴史的展開を考察する上で、こうした地形環境は重要な意味を有する。なお、上流部では、流路方向が周辺の条里型地割に概ね合致していることから、人工的に流路が固定された可能性が想定されている。

調査地を含む大東川下流域は、これまでの研究により、大きく飯野山を中心とした急傾斜地（崖斜面含む）と飯野山東麓の段丘Ⅱ面、段丘Ⅱ面と大東川両岸の高さ1mほどの小崖によって画された段丘Ⅰ面、小崖下の氾濫原面の計4つの地形面に区分されている（木下1995a）。東坂元秋常遺跡は、巨視的にはこの段丘Ⅰ面上に展開する（第3図）。

この段丘地形は、川津一又遺跡や下川津遺跡での遺構・遺物の分析から、瀬戸内海東部の臨海平野の地形分析で指摘（高橋1995）された「完新世段丘」に相当し、大東川の下刻により、古代末頃に形成された地形と考えられている。こうした段丘崖の形成は、本地域の居住環境や耕作域における灌漑システムに、大きな制約や変更を生じさせたと想像される。こうした面から遺跡の動態を論じた考察は、現状では多くはないが、今後追求していかねばならない課題であろう。

なお、段丘Ⅱ面は、大東川西岸では飯野山周縁に痕跡的に残存する地形面である。標高15～30mに分布し、地表面の平均勾配は10%程度で、緩やかに山裾部に向けて下降する。段丘上は、上位の堆積物は開墾等により大きく剥奪され、基盤の花崗岩の風化土が広範囲に露出しているが、局所的に径15



第3図 大東川流域の微地形分類略図 (木下1995aに加筆修正)

～20cm程度の安山岩等の垂円礫層の堆積がみられる。高桑は、本地形面を「下位段丘面」と称し、洪積台地の武蔵野面に相当する地形と考えているようである(高桑1974)が、その形成については明確ではない。現状では、果樹園や畑、住宅域として大きく開発されている。遅くとも縄文時代以降には、河川の氾濫を蒙らない高燥した環境にあり、集落等の遺跡が立地した可能性は高い。

さて、遺跡は段丘Ⅰ面上に位置するが、段丘面の地形もそう単調なものではない。遺跡の西側には、前記した飯野山が屹立し、標高100m以上の平均勾配は58～63%と非常に急傾斜である。そのため斜面を下る雨水は通常の流量は乏しくとも、増水時には流速を速めて山裾斜面を大きく穿ち、裾部に舌状の丘陵を発達させながら、遺跡周辺の平地部をも複雑に分断して大東川へと流下する。つまり、遺跡周辺の段丘面は、大東川の刻削によって南北に長い短冊形の地形面に隔離され、さらに飯野山からの落ち水によって南北に並列するいくつかの小池面に分断されているのである。こうした微細な地形単位を、現地表面の微起伏や溜め池の分布、1962年に旧建設省国土地理院が撮影した縮尺一万分の一の白黒空中写真(SI-62-4)、地元の方への聞き取り、そして調査成果など基に、模式的に示したのが第5図である。詳細は次章に譲るが、段丘崖と小規模な谷地形によって画された、きわめて狭小な平坦地上に遺跡が立地していることがわかるだろう。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺では、これまで発掘調査例は乏しく、詳細が明らかな遺跡はほぼ皆無といってよい。飯野山北麓では、1990年代以降大規模開発が集中し、数多くの遺跡で調査例が蓄積されていることと対照的である。

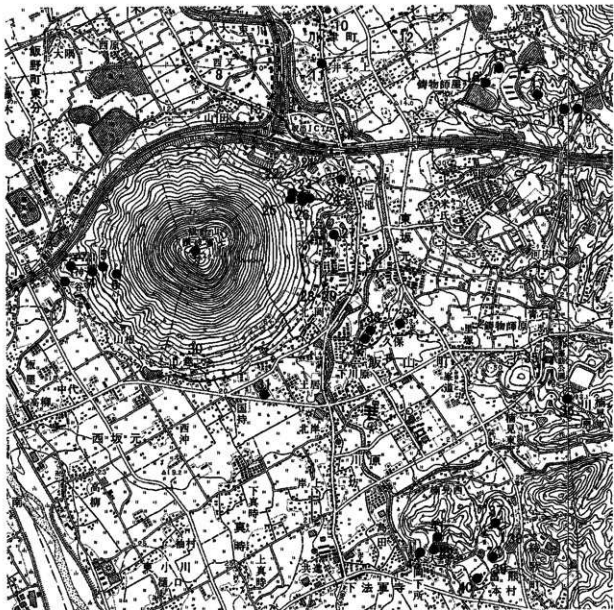
さて、飯山町域を中心に時期ごとに遺跡の分布をみていくと、旧石器時代の遺跡は、平地部縁辺の丘陵上でナイフ形石器などが採集されている。続く縄文時代も、丘陵部縁辺の池畔などより、石匙などの石器が採集されているのみである。

弥生時代になると、遺物が採集された地点数は増加するものの調査例に乏しく、居住遺構が確認された遺跡は皆無に近い。飯野山山頂で中期の遺物が採集されており、高地性集落の可能性が指摘されている。また補見山周辺では、口頸部を打ち欠いた後期の大型壺が出土しており、壺棺墓の可能性が考えられる。

古墳は、丘陵部を中心に確認されている。小規模前方後円墳の三の池古墳、発掘調査がおこなわれ堅穴式石室を埋葬施設とする城山4号墳(飯山町教育委員会編1992)、箱式石棺を埋葬施設とする次郎山古墳群や山田山古墳が前期に遡る可能性がある。中期の古墳は、円筒埴輪を伴い古式の須恵器が供献された城山1～3号墳と変形神獸鏡が出土したとされる国持塚古墳がある。後期後半には横穴式石室の導入とともに古墳数は増加する。喜田荒神古墳からは、子持高杯が出土しており注目される。

白鳳期には、本遺跡の南約2kmに法勲寺が建立される。おそらく大東川中・上流域を統括した豪族の氏寺と考えられている(高松市歴史資料館編1996)。この寺院の瓦を焼いた窯が、東坂元瓦山で見ついているが、詳細は不明である。また平地部には、西に30度振れた方位をとる条里型地割り(が)が広範に認められる。法勲寺は、主軸線が真北方向をもつと考えられており、周辺の条里型地割りとは斜交する。このことから、条里型地割りの施行が、法勲寺の建立より後出するという意見もある。

中世の遺跡も調査例は乏しい。飯山北土井遺跡は、空中写真の判読から四周を堀に囲まれた方形居館とされている(木下1995b)。川原字坊からは、果道抜幅工事に際して、大量の宋銭を中心とした埋蔵銭が見つかっている。寺院では、法勲寺が中世に存続していたことが、出土資料や文献から確認されており、また三谷寺や島田寺も文献上にその名がみえる。このほか五輪塔を中心とする中世の石造物は各地に点在し、塚などもみられる。中世段階には、開発が進んでいたとみられるが、考古学的な検証はまだ先のことであろう。



| 遺跡番号 | 種別 | 遺跡名 | 時代 |
|------|-----|-----------|--------|
| 1 | 集落 | 飯野東二互礎遺跡 | 古代～中世 |
| 2 | 古墳 | (仮)飯野1号墳 | 古墳 |
| 3 | 古墳 | (仮)稲式石棺2号 | 古墳 |
| 4 | 古墳 | (仮)飯野2号墳 | 古墳 |
| 5 | 古墳 | (仮)稲式石棺3号 | 古墳 |
| 6 | 古墳 | (仮)稲式石棺1号 | 古墳 |
| 7 | 包舎地 | 飯野山田遺跡 | 弥生 |
| 8 | 包舎地 | 西又遺跡 | 弥生 |
| 9 | 集落 | 川津一ノ又遺跡 | 弥生～中世 |
| 10 | 集落 | 川津大反地遺跡 | 弥生～中世 |
| 11 | 集落跡 | 川津井出の上遺跡 | 古墳～古代 |
| 12 | 包舎地 | 井手ノ上遺跡 | 弥生 |
| 13 | 集落 | 川津東山田遺跡 | 弥生～中世 |
| 14 | 集落 | 川津川西遺跡 | 弥生～中世 |
| 15 | 古墳 | 西田2号墳 | 古墳 |
| 16 | 古墳 | 西田1号墳 | 古墳 |
| 17 | 古墳 | 向山古墳 | 古墳 |
| 18 | 古墳 | 新古2号墳 | 古墳 |
| 19 | 古墳 | 新古1号墳 | 古墳 |
| 20 | 古墳 | 喜田堂神古墳 | 古墳 |
| 21 | 集落跡 | 川津東山田遺跡 | 旧石器～中世 |

| | | | |
|----|----|------------|----|
| 22 | 古墳 | お四圍池西2号墳 | 古墳 |
| 23 | 古墳 | 七かじ古墳 | 古墳 |
| 24 | 古墳 | 三の池古墳 | 古墳 |
| 25 | 古墳 | お四圍池西1号墳 | 古墳 |
| 26 | 古墳 | 三の池西古墳 | 古墳 |
| 27 | 古墳 | 西の宮古墳 | 古墳 |
| 28 | 古墳 | 秋常古墳群 | 古墳 |
| 29 | 古墳 | 国持塚古墳 | 古墳 |
| 30 | 古墳 | 坂元神社西1～3号墳 | 古墳 |
| 31 | 集落 | 飯山北土層遺跡 | 中世 |
| 32 | 古墳 | 久保大塚 | 古墳 |
| 33 | 古墳 | 久保大塚北古墳 | 古墳 |
| 34 | 古墳 | 穂葉寺古墳 | 古墳 |
| 35 | 古墳 | 城山1～3号墳 | 古墳 |
| 36 | 古墳 | 城山4号墳 | 古墳 |
| 37 | 古墳 | 山田山古墳 | 古墳 |
| 38 | 古墳 | 富熊4～6号墳 | 古墳 |
| 39 | 古墳 | 富熊神社古墳 | 古墳 |
| 40 | 古墳 | 富熊神社神塚古墳 | 古墳 |
| 41 | 古墳 | 次郎山3号墳 | 古墳 |
| 42 | 古墳 | 次郎山2号墳 | 古墳 |
| 43 | 古墳 | 次郎山1号墳 | 古墳 |

第4図 周辺遺跡分布図

第三章 発掘調査の成果

第1節 各調査区の概要と土層序

A地区

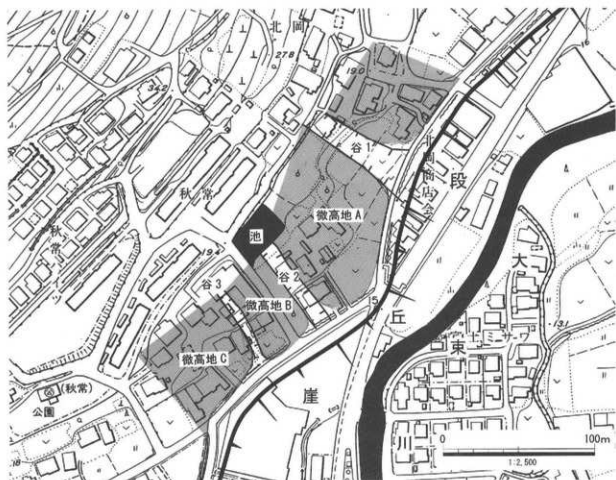
東端部に位置する調査区で、3小区に区分して調査を進めた。A地区は、調査前より調査区南西部の飯野山より北東に派生した尾根端部とその東の平坦地に、地形的には大きく二分されることが観察され、尾根上には民家が所在した。現地表面の標高は、尾根端部で16.5m前後、平地部で15.2m前後である。さらにこの尾根端部は、B地区北西部に連続すること、尾根側面は高さ1m以上の石垣に覆われた崖面となっており、平地部の一定範囲が尾根筋を削平して形成された可能性のあることが予想された。調査の結果、尾根上面は、宅地化によりほぼ平坦に造成され、表土下の浅い位置で花崗岩の風化土壌とみられる褐色～灰色系粘土層（第7図①46層・第8図③18層）が露出することが判明した。最終的に今日みられる地形に改変されたのは近世末頃以降と想像されるが、SX03の検出によりその開発の着手が、中世に遡ることが明らかとなったのは大きな成果であった。またこの尾根筋はさらに北東方向の平地部へ延伸していたと思われ、後述する旧耕作土層直下の比較的浅い位置でベース層が露出する。なお、この尾根上の平坦地を削平面Ⅰとして以下記述する（第6図）。

また、尾根両端は飯野山方向へ弓なりに挟りこみ、現状では周辺の宅地化などにより判読しづらくなっているが、浅い谷地形へ連続するとみられる。北側の谷Ⅰ（第6図）は、A地区北側を東へ流下するとみられ、後述する段丘Ⅰ面のベース層上面の標高は北にむけて緩やかに傾斜する。南側の谷Ⅱは、B地区中央部に想定する。B地区背後の民有地部分では、近年まで小規模な谷部を利用した谷頭溜池（名称不明）が所在していたこと、B地区西半部では近世以前の遺構が確認されていないこと、SD17や古代の灌漑水路SD01に合流するSD03は、断面形状などから自然流路やそれを利用した水路の可能性が想定されることなどを根拠とする。つまり、A地区及びB地区東半部は、両端を浅い谷地形に区切られたひとつの地形単位（微高地A）として把握でき、後述する本調査区の微高地群の中では最も安定した位置にある。

平坦地は、前章で既述したように段丘Ⅰ面に相当する。調査前まで近隣店舗の駐車場として利用され（空中写真では、いずれも耕作地としてみえるので、駐車場や宅地への造成はその撮影後である）、ほぼ平坦に整地されている。A地区では、現地表下にはまず駐車場整地に伴う盛土層（第7図①2層・第8図②1層）がある。盛土層は北に厚く盛られ、層厚は最大で約0.5mである。この層厚の相違は、盛土層下の旧耕作面の形状を反映し、整地以前は南北に比高差のある2筆の耕作面に区画されていたことが空中写真にみえ、上述した谷Ⅰへ緩やかに下る旧地形を反映する。調査によって確認された耕作土層上面の標高は、北部で約14.7m、南部で約15.0mである。より高い南部を中心とする平坦地を削平面Ⅱ、北部を中心とするやや低い平坦地を削平面Ⅲとする（第6図）。

削平面Ⅱ・Ⅲの大半で、鉄分やマンガン粒の集積により数層に細分される旧耕作土（第7図①3～7層・第8図②2～6層）を除去すると、弥生時代以降の遺構面である灰～黄褐色系粘土（第7図①46～55層・第8図②19・20層）が露出する。弥生時代以降の堆積層は大きく削奪され、調査区東縁部のSD04上面に、かろうじて明黄褐色粘土（第8図②15層）の堆積を確認したに過ぎない。おそらく段丘崖形成以前に堆積した土壌と考える。

ベースとなる灰～黄褐色系粘土は、確認できた範囲で数層に細分され、複雑な堆積状況を呈する。上位にやや粘性の強い粘土が、下位にシルト質～砂質の土壌が堆積し、標高13.9m以下で粗砂～小礫によって埋没した旧大東川の河道が確認された。この旧河道については、十分な調査を行っていないが、河道上面の粘土層中からは、深掘トレンチ掘削時にサヌカイト剥片が1点出土し、あわせて土壌のC14



第5図 調査区周辺の微地形分類概念図

年代測定をおこなった。周辺の川津川西遺跡や川津六反地遺跡では、弥生時代以降の遺構面となる上壤中から縄文時代の遺物が出土することが報告されている。木遺跡においてもその可能性について、丁寧な精査をおこなったが、上述したサヌカイト剥片以外の遺物は出土せず、石器ブロックその他の遺構については、過去の改変により消滅した可能性が想定された。なおC14年代測定の分析結果については後述するが、概ね縄文時代前半期までに収まる結果が得られた。

B地区

調査前は宅地や耕作地などとして利用されていた。調査区内は北側の尾根端部と南側平地部2筆の計3筆に分筆されており、北と南2筆との間に、調査時には消滅していたが細い里道が東西に走行していたようだ。また里道北側尾根端部に所在した宅地の擁壁として、数段の石垣が残存していた。現地表面の標高は、北尾根端部で約16.2m、南東平地部で約15.1m、南西平地部で約14.9mである。

土層断面の観察(第9図③～⑤)により、南東部では宅地化に伴う整地層(同図②層)の下に旧耕作土層(同図③～⑤層)の堆積が認められたことから、宅地造成以前は水田もしくは畑地として利用されていたとみられる。航空写真には耕作地が写されており、宅地化は1962年以降のことであろう。南西部では、耕作土層(同図④1～3層)の直下で、遺構面となる。この遺構面を形成する土壌(同図④5層)について、C14年代測定をおこなった。分析の詳細については後掲するが、結果は縄文時代前期とされ、既述したA地区旧河道上面堆積層とほぼ近接した年代値が得られた。分析試料数に課題はあるが、段丘1面の基盤層の形成が、縄文前半期に位置付けられる可能性が示された点で、一定の成果が得られたものと考えられる。

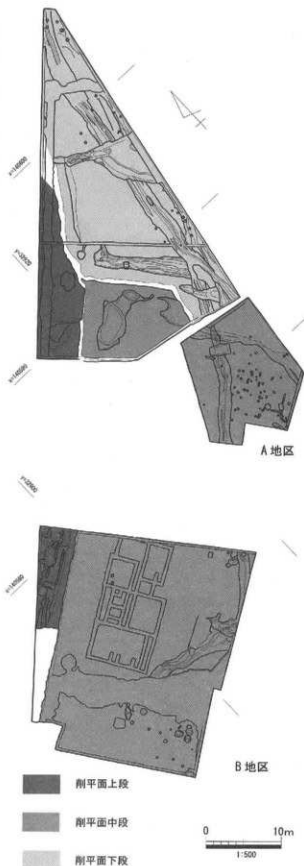
また北尾根端部では、表土（同図③1層・④1・2層）直下で花崗岩の風化土壌である灰白色粘土層（同図③18層・⑤8層）が露出する。A地区同様、近世以降の改変を顕著に蒙りながらも、中世に遡る遺構（SK05・06）が検出され、尾根端部の開発が中世に及んでいたことが判明した。なお尾根筋は、より南の南東平地部へ延びていたと考えられるが、既述した耕地造成により削平・消失したとみられ、この部分において検出された遺構は近世以降と考える上坑2基（SK07・08）にとどまる。

一方尾根西半部は、基盤層が大きく潜り込み、厚い造成土（同図⑤2層）の堆積が認められた。既述したように、この部分には小規模な谷地形（谷2）が想定され、厚い造成土は、宅地化のため谷部を埋めた盛土と考えられる。またB-2区東部を南へ延長する溝状の攪乱は、明治期以降の遺物が多量に投棄されていたため調査はおこなわなかったが、池と調査区際を東流する上井用水を連絡する用水路であり、谷2を利用して開削された可能性を想定したい。

C地区

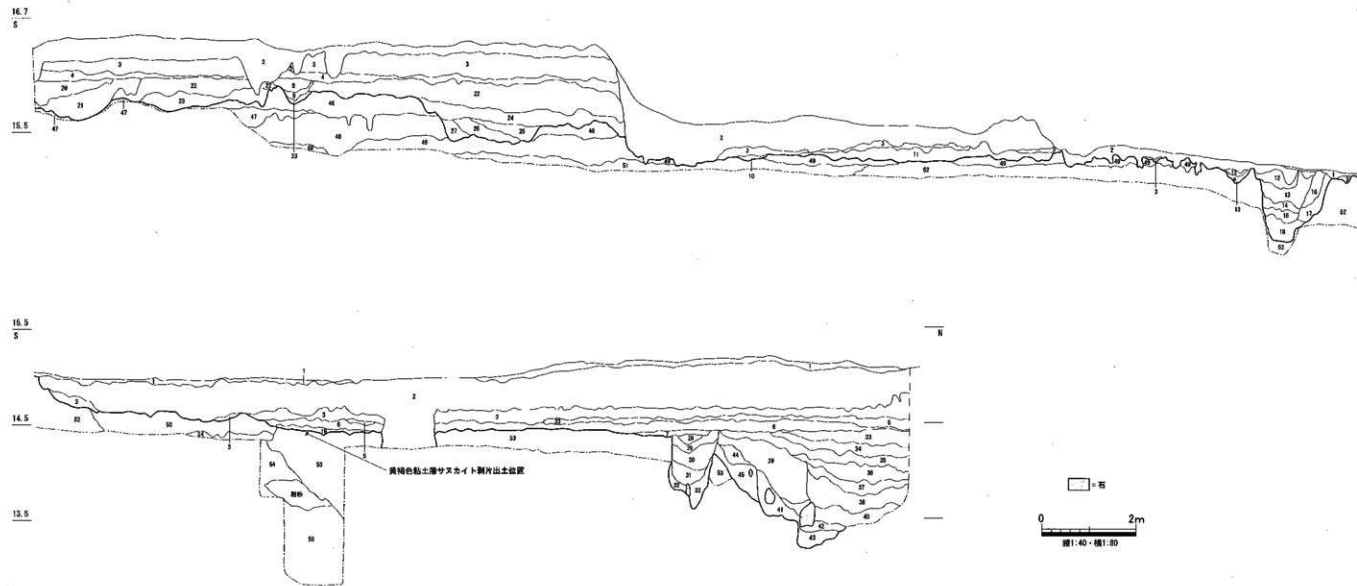
C地区は、西端に位置する調査区で、調査前は宅地として利用されていた。東西45m、南北28mのほぼ平坦な宅地の南半部が調査地である。宅地北側は、旧地形を反映して高さ2mほどの石垣や擁壁に覆われた崖面となっており、調査地が一定度の削平を蒙っていることが容易に推測された。東西2筆に分筆されており、地境には北側の宅地の排水を上井用水へ排水する水路が設けられている。東側の区画を1区、西側を2区として調査を進めた。現地表面の標高は、1区で14.9m前後、2区で14.4m前後である。

層序は、層厚0.2m程度の宅地に伴う造成土を除去すると、数層に細分される旧耕作土層となる。航空写真には、宅地部分はより北側に偏在し、調査地は耕作地として利用されていたことが窺え、調査地を含めて宅地化されるのは1962年以降のことと思われる。この旧耕作土を除去すると、東半部では褐色系粘土（第10図⑥・⑦3・4層）を、西半部では花崗岩の風化土壌



第6図 A・B地区の土地改変図

① A地区西壁



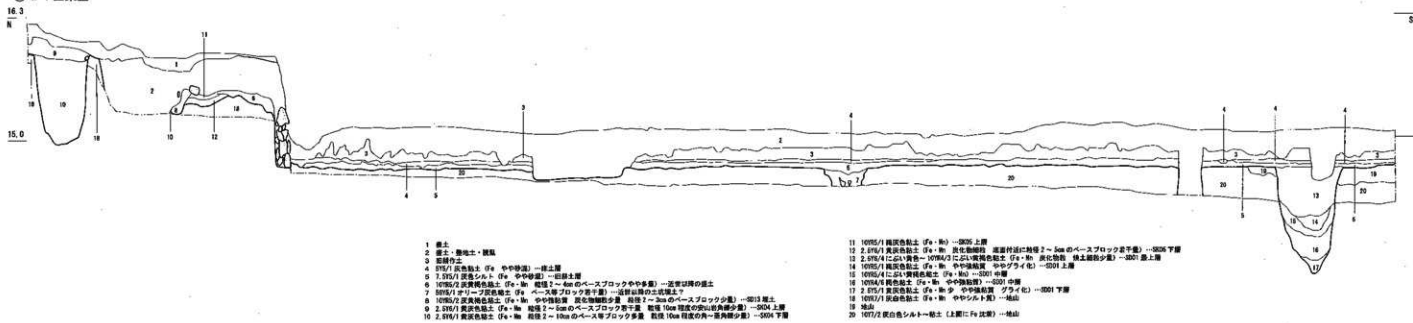
- 1 黄土
- 2 黄土・腐土
- 3 腐砂土 (1層に限定可)
- 4 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 5 腐砂土
- 6 100%黄砂質粘土 (F) やや砂質 黄化物なし → 硬土
- 7 5%W/黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 腐砂土の硬土
- 8 100%黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 9 100%黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 10 100%黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 11 100%黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 12 2%W/黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 13 2%W/黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 14 2%W/黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 15 5%W/黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 16 5%W/黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 17 5%W/黄砂質粘土 (F・M) 多 粒径 3mm 前後のベスブロック多量 → 硬土
- 18 100%以上は黄砂質粘土 → 硬土

- 19 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 20 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 21 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 22 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 23 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 24 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 25 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 26 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 27 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 28 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 29 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 30 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 31 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 32 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 33 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 34 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 35 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土

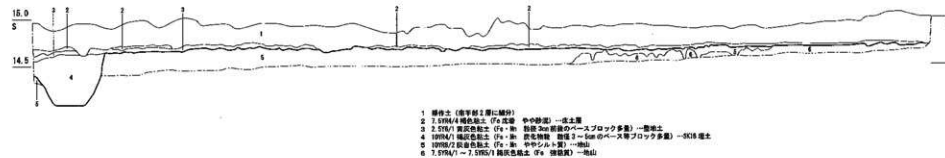
- 37 5%W/黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 38 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 39 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 40 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 41 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 42 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 43 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 44 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 45 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 46 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 47 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 48 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 49 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 50 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 51 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 52 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 53 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 54 100%以上は黄砂質粘土 (F・M) 中砂質 粒径 3mm 未満 (少量) → 田尻土
- 55 2.0%W/黄砂質粘土 → 硬土

第7図 A地区土層断面図1

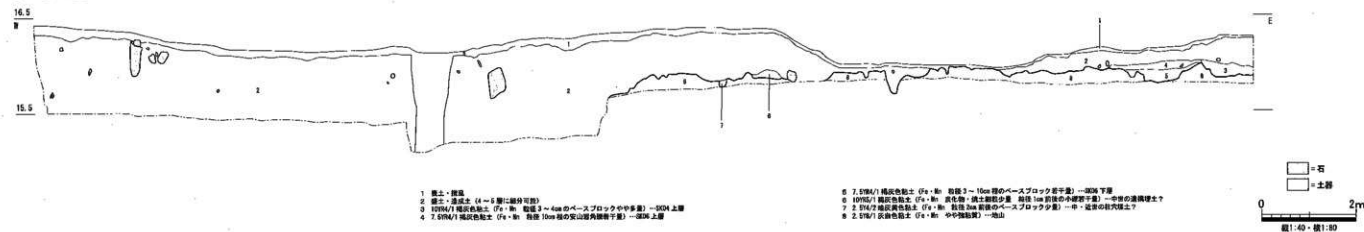
③ B-1 区東壁



④ B-2 区西壁

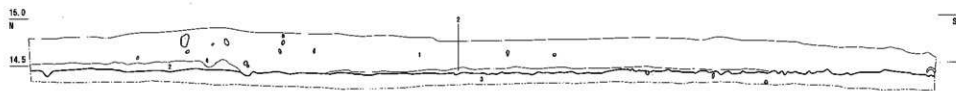


⑤ B 地区北壁

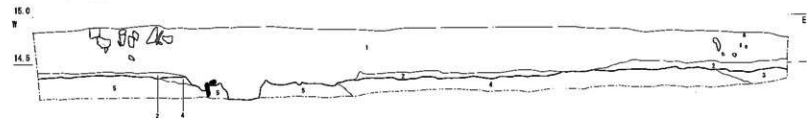


第9図 B地区土層断面図

⑥ C-1 区東壁



⑦ C-1 区北壁

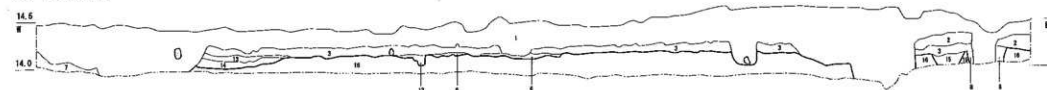


- 1 表土・表成土・埋戻
- 2 2.0%の黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻土
- 3 2.0%の黄褐色土 → 2.0%の黄褐色粘土 (Fe) 埋戻土 → 埋戻
- 4 埋戻土に黄褐色砂質土を中砂質 (Fe) 中砂質土 → 埋戻
- 5 埋戻土に黄褐色土 (Fe) 埋戻土 → 埋戻

⑧ C-2 区西壁



⑨ C-2 区北壁



- 1 表土・表成土・埋戻
- 2 2.0%の黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻土
- 3 埋戻土に黄褐色砂質土を中砂質 (Fe) 中砂質土 → 埋戻
- 4 埋戻土に黄褐色砂質土を中砂質 (Fe) 中砂質土 → 埋戻
- 5 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 6 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 7 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 8 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻

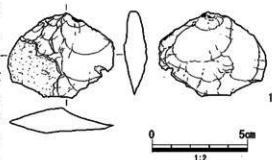
- 9 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 10 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 11 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 12 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 13 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 14 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 15 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 16 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 17 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻
- 18 2.0%の黄褐色土 (Fe) 中砂質 埋戻 2~3cm 程度のベースブロックを中砂質 → 埋戻



第10図 C地区土層断面図

である灰白色粘土（同図⑦5層・⑧・⑨17層）をそれぞれベースとする遺構面となる。遺構面の標高は、1区で14.4m前後、2区で14.1m前後である。

C地区中央部では、中世後半期に埋没した谷状遺構SR01（谷Ⅲ）が検出された。この谷Ⅲを境として、B地区谷Ⅱの西部から谷Ⅲまでの微高地部分（微高地B）と、C地区西半部以西の微高地部分（微高地C）に地形的に細分される。SR01からは一定量の中世以前に遡る遺物の出土がみられ、微高地部分に当該期の屋敷地などの展開が予想された。しかし、微高地部分は、近世以降の地下げなどにより中世以前の遺構面が削奪されたためか、残念ながら確実に中世に遡る遺構はきわめて乏しい。しかしSR01からの遺物の出土状況を踏まえるなら、微高地B・C上に中世の遺跡が展開したことは確実であり、A地区での区画溝を伴った屋敷地とも関連して、面的な広がりをもって中世段階には開発行為が進展していた可能性が予想される。



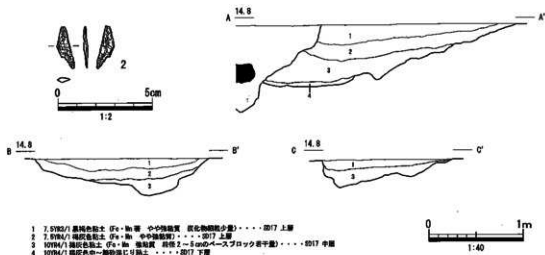
第11図 黄褐色粘土層出土石器

第2節 遺構と遺物

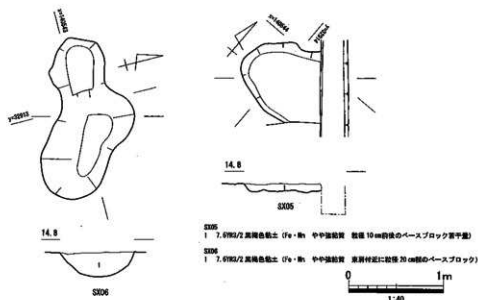
1 縄文時代

第1節で既述したように、A-1区の弥生時代以降の遺構面を構成するにふい黄褐色粘土層（第7図④53層）より、ササカイト剥片1点が出土した。出土位置は削平面Ⅱのベース層中で、出土が確認されて以後周囲丁寧に精査したが、上述した剥片以外に遺物は得られなかった。剥片は、層上位の浅い位置より出土していること、周辺の遺構埋土中より縄文期と想定される石器や風化の進んだササカイト剥片などが出土していることなどから、当該期の遺物は既に削奪された土壤中に含まれていた可能性が考えられる。

さて、既述したように本層（試料No.4）及びその下位に堆積した黄色砂礫～灰黄色粗砂ラミナ（同図56層、試料No.5）の土壌について、その堆積時期を特定するためC14年代測定をおこなった。分析の詳細については後掲するが、その年代は試料No.4が縄文時代早期に、試料No.5が後期旧石器時代とのことであった。現場での土層の堆積順序と分析結果とは矛盾せず、妥当な年代と考えられるが、各層1点



第12図 SD17出土遺物実測図・土層断面図



第13図 SX05・06 平面・土層断面図

受け、西端は近代以降の攪乱溝(溜池からの水路)によって断ち切れ、より以西では削平により消失する。したがって調査区内で延長10.4mを確認したにとどまる。やや蛇行するが、流路方向は概ねN 80.6° W、検出面での幅1.57～2.83m以上、残存深は最大0.6mである。底面には起伏が顕著に認められ、断面形はいびつな皿状ないし逆台形状を呈する。底面の標高は、西部で14.40m前後、東部で14.07m前後となり、底面の標高差から東に流下するとみられる。こうした平・断面形状や自然地形に規制された位置関係などから、人為的に掘開された溝状遺構ではなく谷状地形(自然流路)の可能性も考えられる。

埋土は、2～4層に細分された。上層(第12図1・2層)は、溝上面を広く覆うやや強粘質の灰黄色系粘土で、流路機能停止後の穏やかな環境下での自然堆積層とみられる。中層(同図3層)は、流路東半部にのみ確認された褐色系粘土層で、ベース層のラミナ状2次堆積が顕著に認められ、断続的な弱い水流下での堆積が想定される。下位層(同図4層)も、流路東端部にのみ確認された堆積層で、中層と酷似する粘土層にやや顕著な水流によるとみられる中～粗砂のラミナ堆積が認められる。

遺物は、上層より数点の土器細片とサヌカイト剥片1点、中層よりサヌカイト製石鏃1点と同剥片1点が出土したのみである。したがって細かな時期決定は困難だが、流路方向が地形に規制され、切り合い関係からSD01より先行すること、埋土の特徴などから、古代以前に遡る可能性を想定したい。

性格不明遺構

SX05・06 B-1区で検出した落ち込みである。SX06は、東西0.79m、南北1.69m、平面形は不定形を呈する。残存深は最大0.25m、底面の標高は最深部で14.41m、断面形状は実測位置では整ったU字状を呈するが、全体的に底面は起伏が顕著で、安定した断面形状を呈さない。埋土は単層(第13図)で、東屑付近に粒径20cm程度の大型のベース層ブロック土が混じる。

SX05は、南端をSD01に覆われ、東端は調査区外へ延長するため、西半部の一部のみ確認された。東西1.08m以上、南北0.85m以上、平面形は至な楕円形を呈する。残存深0.09m、底面の標高は最深部で14.58m、断面形は概ね浅い逆台形状を呈し、底面には起伏が顕著にみられる。埋土は、SX06と近似し、粒径10cm程度のベース層ブロック土を含む(第13図)。

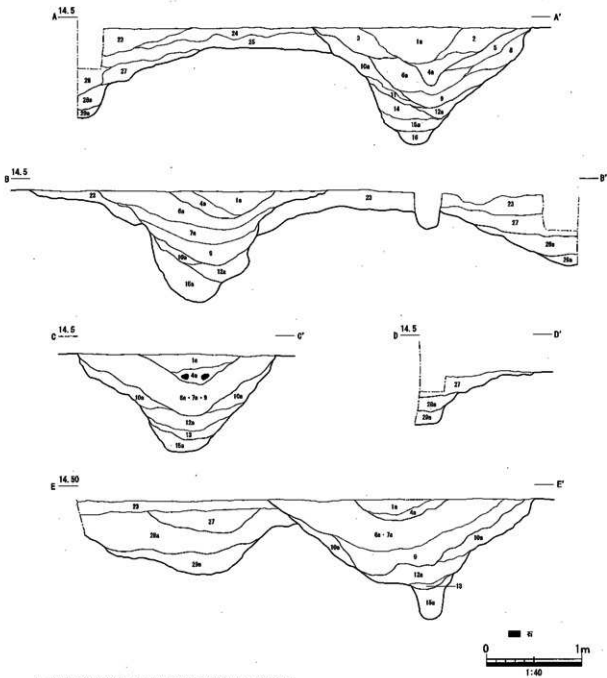
両遺構とも遺物は出土していない。SD17と近接し、埋土が近似していることから、SD17に近似した時期の可能性がある。性格については、平・断面形状や埋土の特徴、遺物が出土していないことなどを考えると、風倒木痕の可能性が想定される。

のみの分析のため、より精度を高める意味でも今後分析の継続が望まれる。

2 弥生時代～古墳時代

溝状遺構

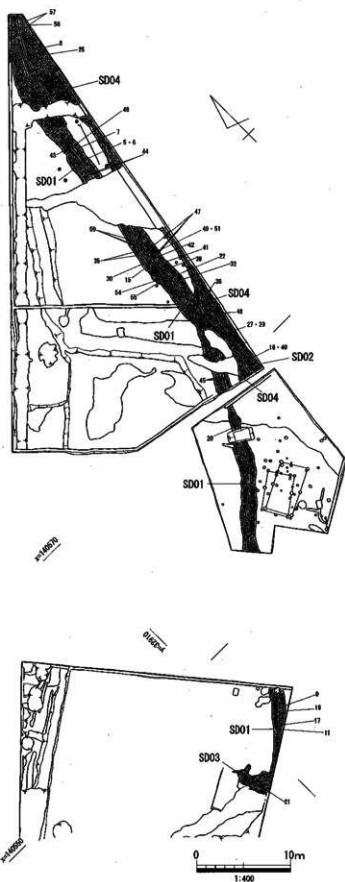
SD17 B-1区で検出した流路状遺構。第1節で既述した尾根筋の南側縁部を流下する。東端は古代溝SD01・03によって攪乱を受け、



- 1a 10YR5/2に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 炭化物質・・・SD01 最上層
 1b 2.5YR/4に多い黄色粘土 (Fe・Mn) 粒径4mm程度の骨層ブロック・・・SD01 最上層
 2 10YR5/2に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 炭化物質(少量)・・・SD04 最上層
 2a 2.5YR/2に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 炭化物質・・・SD01 最上層
 4a 10YR2/1に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 少 中強度腐敗 炭化物質 粒径2mm以下のベースブロック(少量)・・・SD01 最上層
 4b 10YR2/1に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 炭化物質 粘土粒径(少量) 炭層中に粒径3-7mmのベースブロック(少量)・・・SD01 最上層
 8 2.5YR/2に多い黄褐色粘土 (Mn) 多 中強度腐敗・・・SD01 上層
 6a 10YR2/4に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 炭化物質・・・SD01 上層
 6b 10YR2/4に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 粒径3-4mmのベースブロック(若干層)・・・SD01 上層
 7a 10YR2/4に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 わずかに砂層・・・SD01 上層
 7b 10YR2/1に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 上部に炭化物質(若干グライセ)・・・SD01 上層
 8 2.5Y/1に多い黄褐色粘土 (Mn) 多 炭化物質・・・SD01 上層
 9 10YR2/4に多い黄褐色粘土 (Mn) 中強度腐敗 粒径3-8mmのベースブロック・・・SD01 上層
 10a 10YR2/1に多い黄褐色粘土 (Mn) 多 中強度腐敗・・・SD01 中層
 10b 10YR2/1に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 少(しるる) ベース層に炭化・・・SD01 中層
 11 10YR2/4に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 炭層中に粒径2mm前後のベースブロック(若干層)・・・SD01 中層
 12a 10YR2/4に多い黄褐色粘土 (Mn) 多 中強度腐敗 炭層中に粒径2mm前後のベースブロック(若干層)・・・SD01 中層
 12b 10YR2/4に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 炭層中に粒径3-4mmのベースブロック(少量)・・・SD01 中層
 13 2.5Y/1に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中強度腐敗 炭層中に粒径3-4mmのベースブロック(少量)・・・SD01 中層
 14 10YR2/4に多い黄褐色粘土 (Mn) 中強度腐敗 炭層中に粒径3-4mmのベースブロック(少量)・・・SD01 中層
 15 10YR2/1に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 少 中強度腐敗 グライセ 粒径2mm前後のベースブロック(少量)・・・SD01 中層
 16 2.5Y/1に多い黄褐色粘土 (Fe・Mn) 少 中強度腐敗 グライセ 粒径2-3mmのベースブロック(少量) 炭層中に粒径1-2mmの骨-中砂ラミナ状腐敗物・・・SD01 中層

第14図 SD01～04土層断面図1

し、A・B地区間は現有道路により一部未調査部を残す。延長約89.4mを検出した。A-2区で緩やかに屈曲し、A地区尾根端部の南縁辺を回り込むように開削されている。A-2区屈曲部付近でSD02が、B-1区南端部でSD03がそれぞれ合流する。部分的にわずかに蛇行して配されるが、屈曲部以北の流路方向は概ねN 10.8° E、以南はN 35.4° Eである。底面の標高は、B-1区で13.60m前後、A-2区で13.50m前後、A-1区で13.20～13.30mとなり、ゆるやかに北に流下する。検出面で幅1.4～2.4m、残存深1.06～1.24m、断面形は概ねV字状ないし逆台形状を呈する。埋土は、7～14層に細分され、最上(第14・15図1～4層)・上(同図5～9層)・中(同図10～13層)・下(同図14・15層)・最下(同図16層)の5層に大別する。最上層は、溝の機能停止後、窪地を埋めて徐々に自然堆積した土層である。黄褐～黒褐色系粘土がレンズ状堆積し、低湿地状況下での堆積が想定され、また層下位には、砂の混入が認められることから、雨水などによる弱い流水の伴った可能性も想定できる。上層は、後述する中層を大きく掘り込むように堆積していることから、中層の堆積により溝の埋没が進み、改修された可能性が考えられ、その改修後の堆積層である。黄～褐色系粘土がレンズ状に堆積し、溝中央部付近に中砂の混入が認められることから、弱い水流を伴いながら徐々に堆積したと想定される。また肩部付近には、壁面の崩落に起因するとみられるベース層に近似した土層の斜面堆積が認められる。中層も、上層と同様な堆積状況を示すことから、改修後の堆積層と考えられる。上位には、肩部壁面の崩落に起因するとみられる土層が斜面堆積し、下位層はグライ化した灰色系粘土が堆積し、一定期間滞水下にあった可能性が想定できる。下層も、北端付近での土層断面の観察から、改修後の堆



第16図 SD01～04 遺物出土位置図

積の可能性が想定できるが、南半部では流路底面まで下層が堆積し、後述する最下層の堆積が認められないため、改修の範囲については断定できない。あるいは局所的な改修であった可能性も考えられる。灰色系粘土がレンズ状堆積し、下位層を中心に中～粗砂のラミナ堆積が認められ、溝機能時の堆積層と考えられる。また各層に、ベース層ブロック土が混入しているが、これは壁面の崩落に起因するものだろう。最下層は、溝北端部のみに認められた流水下堆積層である。既述したように、検出範囲は狭く、下層との関係については断定しかねるが、調査時の所見を重視して、溝開削時の堆積層と考える。

遺物は、コンテナ5箱程度と乏しい。遺物の性格や当該期の集落との位置関係を反映しているのだろうか。溝機能時の堆積層である下層・最下層の遺物は1箱にも満たない。また、A-1区中央部付近の上層底面より、須恵器などの遺物がまとまって出土した(第16図35・49～51)。出土状況から、一括投棄されたものと考えられ、8世紀中葉～後半代の年代観が与えられる。中層までの埋没がこの頃までに終了していたと考えられる。A-3区上層より出土した遺物の一群(第17図12・13・18)は、後述する中世区画溝SD08との重複付近より出土しており、本来的にはSD08の遺物とすべきものであろう。図示以外には、器種不詳の土師器や須恵器、ササカイト剥片などが、若干量出土したに過ぎない。いずれも完形に復元可能なものはなく、土師器を中心に細片化したものが多い。

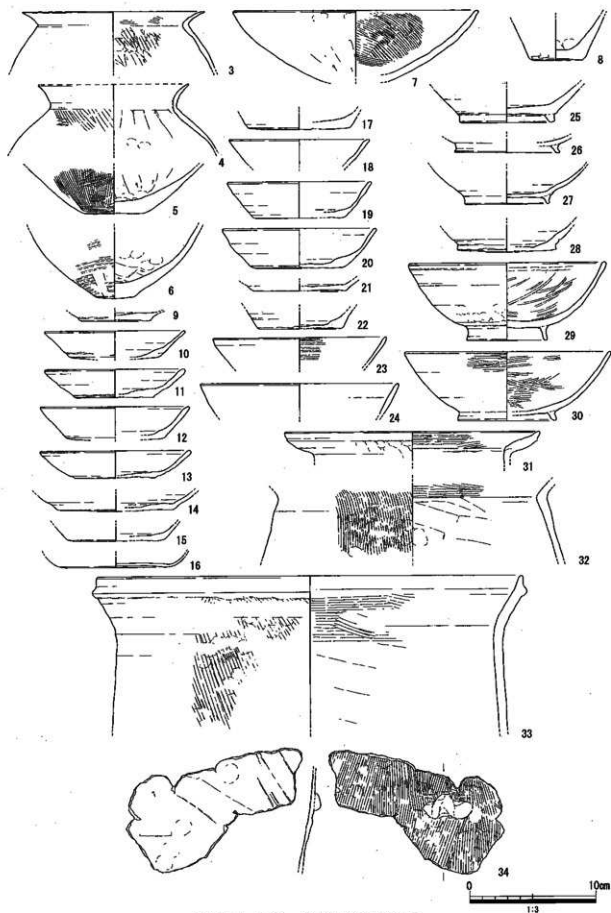
既述したように、屈曲部付近でSD02が合流する。合流部付近で近世溝SD06が重複し、その攪乱はSD02底面付近まで及び、SD01・02両溝の関係についての詳細なデータは得られなかった。しかし、埋土の一部はかろうじて連続していることが確認され、同時併存していたとみて大過ないと思われる。SD02は、検出面で幅1.17m以上、底面の標高13.15m前後、残存深は0.9m程度、断面形は逆台形状を呈する。延長8.0mを検出し、流路方向は概ねN0.5°Wである。A-3区では、中世溝SD08による攪乱のため南延長部を確認できなかったが、調査区東縁辺付近を南へ延伸するものと考えられる。

埋土は、3層に大別する。上層(第14・15図19層)は、穏やかな環境下で徐々に自然堆積した土壌であろう。中層(同図20・21層)も自然堆積層だが、下位層は細砂質シルトが堆積し、弱い水流を伴った可能性がある。下層(同図22層)底面には、砂礫層の堆積が認められ、流水下での堆積が想定でき、SD01下層(同図15a層)に連続する。

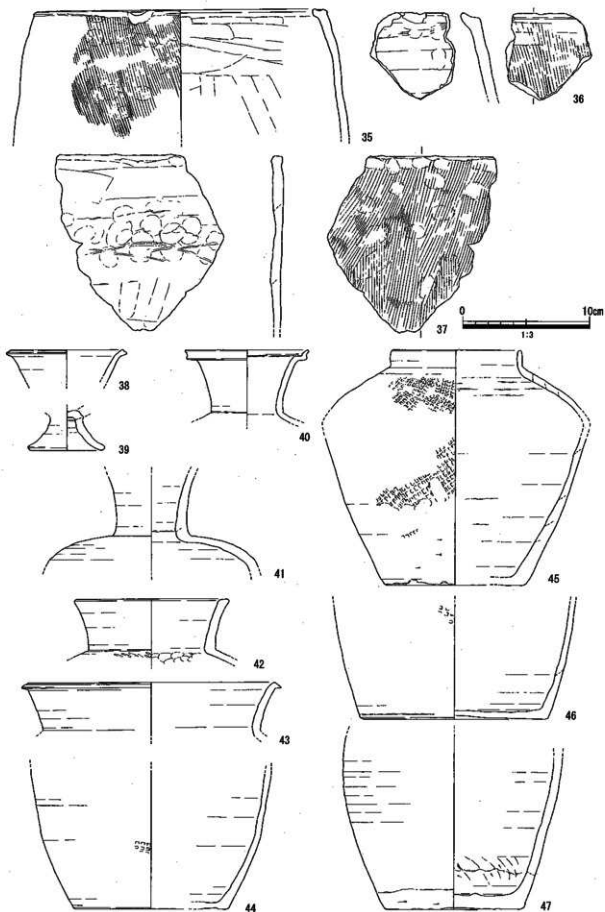
遺物量は、SD01同様コンテナ半箱程度と乏しく、上・中層からの出土が多数を占める点もSD01と共通する。図示した以外には、器種不詳の弥生土器や土師器、須恵器などの小片、土師器甕、黒色土器碗がある。いずれも細片化しており、完形に復元可能なものはない。

SD03は、B-1区SD01西端部で検出され、SD01とほぼ直交して配される。延長約3.5mを検出したのみで、北端は調査区内で途切れる。検出面で幅2.30m、底面の標高は北端部付近で14.55m、南端部付近で13.60mと急傾斜でSD01へ流入する。底面は安定せず階段状を呈し、一部掘り方がオーバーハングしている部分も認められた。断面形状は、不整なV字状ないしは逆台形状を呈する。平・断面形状や検出位置などから、飯野山より流下する谷状地形(自然流路)などの可能性も考えられるが、調査範囲が限定され断定するまでにはいたらなかった。

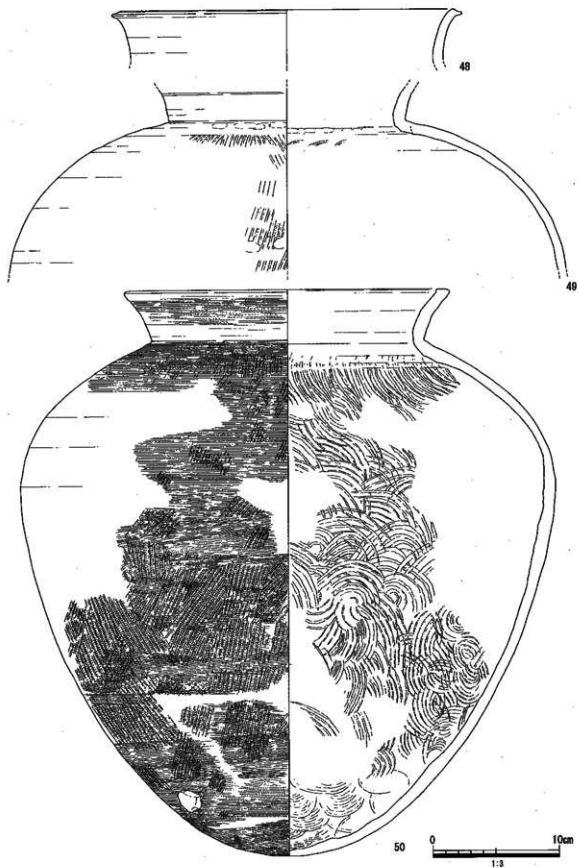
埋土は、5層に大別する。最上層(第15図30・31層)は、溝上面の窪地を埋める自然堆積層とみられるが、北西部については、ベース層ブロック土が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。上層(同図32・33層)も、穏やかな環境下で徐々に埋没した自然堆積層であろう。上位層中には、一時的な流水の痕跡とみられる中砂の堆積がみられる。なお、SD01との合流部付近上層下位から中層にかけて、人頭程度の安山岩などの重石礫が多量に出土した。顕著な流水下堆積の痕跡が認められなかったため、人為的に投棄ないしは簡易な堰に伴って設置された可能性も考えられる。しかしながら、合流部の大半が調査区外となるため、その性格を断定することはできなかった。中層(同図34層)も自然堆積層であろう。北部では、壁面の崩落に起因するとみられる多量のベース層ブロック土の堆積が認められた。下層(同図35層)も自然堆積層であろう。溝底面において流水下堆積が顕著でな



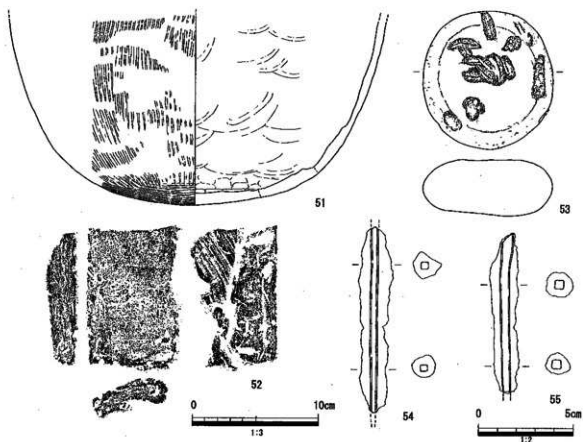
第17圖 SD01 ~ 03 出土遺物実測圖 1



第 18 図 SD01 ~ 03 出土物実測圖 2



第19圖 SD01～003 出土遺物実測図3



第20図 SD01～03 出土遺物実測図 4

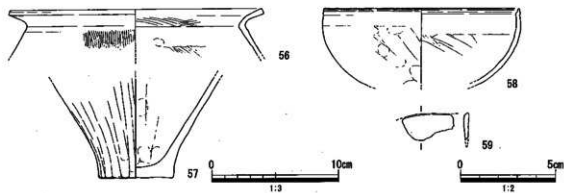
い状況は、SD01のB区周辺の埋土と共通し、溝廃棄直前には通水していなかった可能性も考えられる。なお、上～下層は、後述する最下層を掘り込んで堆積しており、改修後の堆積層と考えられる。最下層(同図36層)も自然堆積層であろう。壁面の崩落に起因するとみられるベース層ブロック土を含む。本層底面は概ね14.0m前後で、改修後の溝底である下層底面より0.2mほど高い位置にある。改修に伴い、より深く底面を掘り下げたことが確認され、それはSD01の改修とも連動する可能性がある。

遺物量は乏しく、コンテナ半箱にも満たない。図示した以外に、器種不詳の土師器などの小片やサヌカイト剥片が出土しているのみである。またいずれも細片化しており、完形に復元可能なものはない。

さて、これら幹線水路群より出土した遺物について、下位層より出土した遺物は乏しく、さらに頻繁な改修などが認められる点からも、明確な開削時期を特定することは困難である。後述するSD04の埋没時期と本溝上層の遺物群から、7世紀前葉から8世紀後葉までの時期幅のなかで開削されたことは確実であるが、より年代を絞り込むにはなお今後の調査が必要である。また土師器や黒色土器の碗類は、11世紀末頃までの年代に収まると考えられ、これ以後の遺物がみられないことからすると、11世紀代のうちに溝の機能はほぼ衰退し廃絶されたと考えられる。

なお、SD01上層(第14図B断面7a層)とSD02上層(第15図F断面19層)より出土した炭化材について、C14年代測定をおこなった。分析の詳細は後掲するが、結果はSD01上層試料が飛鳥時代末～奈良時代前半、SD02上層試料が奈良時代末～平安時代前半であった。前者の試料については、出土遺物の年代とやや齟齬が認められるが、後者の試料については整合的である。試料数が乏しいため即断はできないが、開削から上層堆積までの年代が奈良時代から平安時代前半のうちにおさまる可能性を示しているものと考えられる。

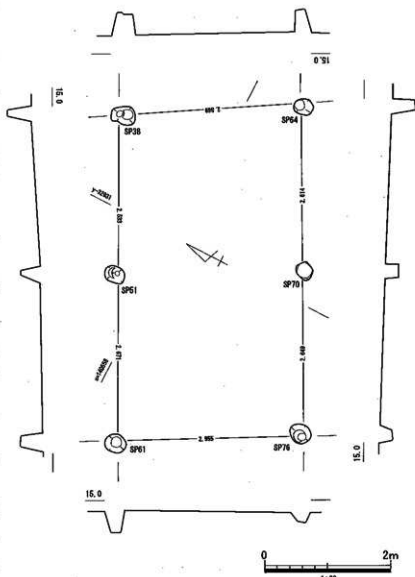
また、SD01・02の各層より採取した土壌についても、当時の植生復元のため花粉分析をおこなった。



第21図 SD04出土遺物実測図

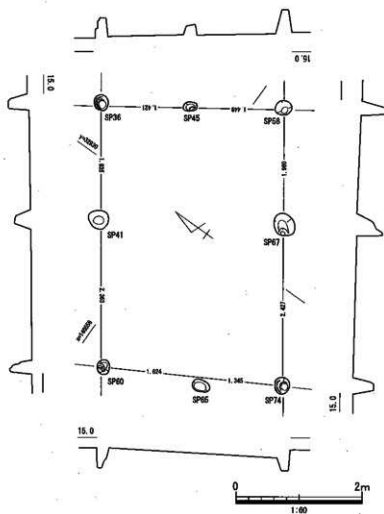
大半の試料で花粉密度が低く、残念ながら植生復元には至らなかったが、B地区SD01上層（第15図H断面7b層）・中層（第15図H断面12b層）試料より、二次林が分布する環境であった可能性が示された。また草本では、周囲がやや乾燥した環境であったとされ、これら分析結果からSD01周辺が一度開発されていた可能性が窺われた。

SD04 A地区東端部を南北に走行する流路遺構である。調査区内の一部で流路底面を確認できたのみで大半は調査区外となり、また後世の遺構との重複などのため、詳細なデータが得られたわけではない。溝上面には、層厚0.1m前後の包含層（第14図23～25層）が堆積し、その上面より掘り込まれたSD01とは層位的にも先行する。底面の標高は、A-1区南端部で13.71m前後、確認される北端部で13.48m前後となり、ゆるやかに北に

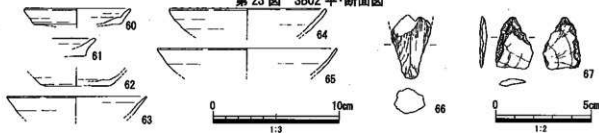


第22図 SB01平・断面図

流下するとみられる。検出面で、幅2.30m以上、残存深0.7m程度、断面形は逆台形状を呈する。流路は、大きく蛇行している可能性があり、小規模な自然流路の可能性も考えられるが、断定するまでには至らなかった。



第23図 SB02 平・断面図

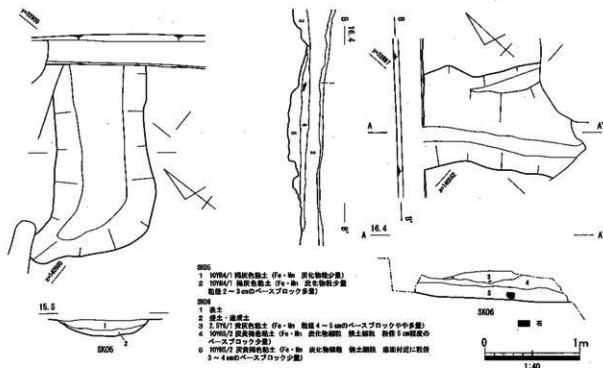


第24図 SB01・中世柱穴出土遺物実測図

埋土は、上（第14・15図27層）・中（同図28層）・下（同図29層）の3層に大別する。上層は、穏やかな環境下で堆積した自然堆積層とみられ、肩部付近に壁面の崩落に起因するとみられるベース層ブロック土を多量に認める。中層も同様な環境下での堆積が想定できる。下層は、流路機能時の堆積層とみられ、中～粗砂のラミナ堆積が確認され、一定量の流水下に堆積したことが想定できる。

遺物は、調査区北端部付近中層より弥生土器や土師器片がややまとまって出土した以外は、土師器や須恵器の細片が少量出土したに過ぎない。出土遺物が乏しく時期を特定することは困難だが、7世紀前葉を中心とした時期には、一定度の埋没が進捗していたものと考えられる。

なお、中層（第14図A断面28a層）より採取した土壌について花粉分析をおこなったが、花粉密度が低く、植生復元には至らなかった。



第25図 SK05・06平・断面図

4 中世

掘立柱建物

SB01 A-3区で検出し、桁行2間、梁間1間、主軸方向N 62.5° Eの東西棟の側柱建物として復元した。桁行は北側で5.21 m、南側で5.27 m、梁間は東側で2.91 m、西側で2.96 mと平面プランは整った矩形を呈し、床面積は15.37 m²である。桁行の柱間寸法は、2.54~2.67 mとほぼ揃う。柱穴掘り方は、径0.23~0.35 mの概ね楕円形を呈し、残存深0.26~0.39 m、底面の標高14.24~14.49 mであった。なお、SP51では柱材が認められたが、腐食が著しく図化することはできなかった。樹種は、後掲の分析の結果、針葉樹と判断された。

遺物は、SP38・51・61・64・76より土師質土器や瓦器の細片、焼土塊が少量出土したのみである。

SB02 A-3区で検出し、桁行2間、梁間2間、主軸方向N 65.15° Eの東西棟の側柱建物として復元した。桁行は北側で4.16 m、南側で4.42 m、梁間は東側で2.89 m、西側で2.95 mと平面プランはやや歪な台形状を呈し、床面積は12.52 m²である。桁行の柱間寸法は、1.8~2.44 mと幅があり、中央穴より西側が概ね0.5 mほど広い。柱穴掘り方は、径0.12~0.33 mの概ね楕円形を呈し、残存深0.15~0.44 m、底面の標高14.31~14.64 mであった。

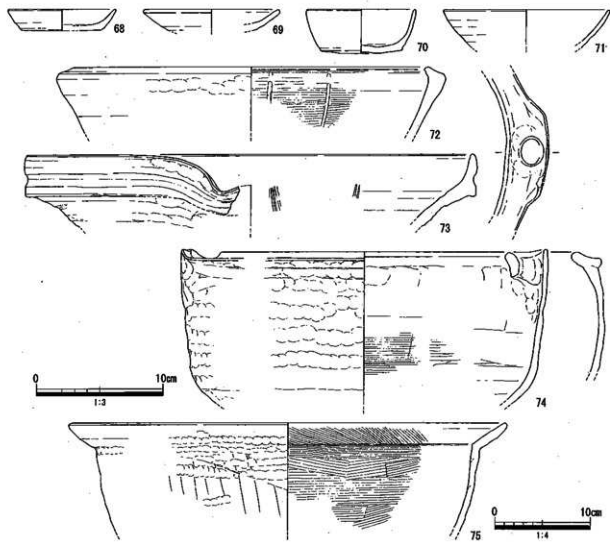
遺物は、SP65を除く各柱穴より土師質土器の細片や焼土塊が少量出土している。

柱穴

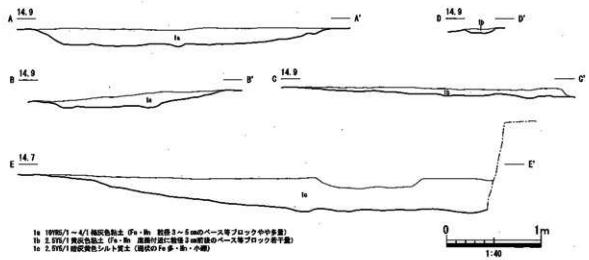
当該時期の柱穴は、A・C地区において検出した。とくにA地区において多く確認され、既述したように建物遺構2棟を復元した。C地区は後世の削平のため、その可能性のあるものを数基確認したのみで、建物遺構は復元されていない。建物を構成しない柱穴より出土した遺物を第24図に図示した。

土坑

SK05 B-1区で検出した。遺構東端部は調査区外へ延長するため、全体形状は不詳である。検出範囲で、東西2.2 m以上、南北0.91~1.03 mの平面やや歪な隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN 51.2° E、

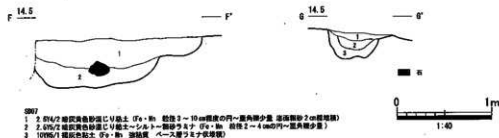


第 26 図 SK05・06 出土遺物実測図



1a 1975/1-4/1 緑灰色粘土 (Fe・Mn 数値 3~5 mm のベース等ブロックや砂多量)
 1b 2. 575/1 黄灰色粘土 (Fe・Mn 濃度付足に数値 3 mm 程度 のベース等ブロック若干量)
 1c 2. 575/1 緑灰色シルト質土 (腐敗の Fe 多・Mn 少)

第 27 図 SD08 土層断面図



第28図 SD07土層断面図

残存深は最大で0.2m前後、断面形は皿状を呈する。埋土は2層に細分されたが大差はなく、いずれも自然埋没の可能性が想定される。なお下層には、壁面の崩落に起因するとみられる最大粒径3cm前後のベース層ブロック土を伴う。

遺物は、図示した以外に、土師質土器皿・内耳足釜・土鍋等の小片が若干量出土したのみである。大半の遺物が細片化しており、完形に復元可能なものはない。

SK06 B-1区で検出した。遺構の北部は調査区外へ延長し、南部と西部は地下げに伴う攪乱により消失しており、全体形状は不詳である。検出範囲で、東西2.20m以上、南北1.93m以上、残存深は最大0.3m、断面形は皿状ないし浅い逆台形状を呈する。底面の標高は、北部で15.8m前後、南端部で15.7m前後と、ゆるやかに南に下る。埋土は3層に細分された。上層は、最大粒径5cm程度のベース層ブロック土を多量に含み、土坑埋没後に生じた窪地を埋めた整地層と判断された。中・下層は近似した粘土層で、南に傾斜して堆積しており、土坑廃絶後に徐々に自然堆積した土壌と考えられる。

遺物は、土師質土器皿・足釜、備前焼播鉢等の小片が若干量出土したのみである。いずれも細片化しており、完形に復元可能な遺物はない。

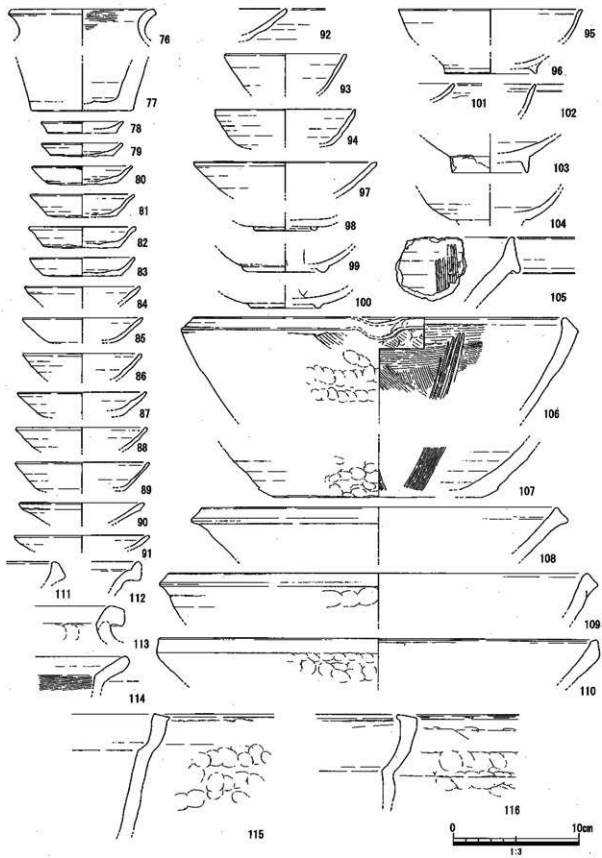
溝状遺構

SD08 A-2・3区において検出した、平面L字状を呈する溝状遺構である。西端は調査区内で途切れ、南端は調査区外へ延長する。東西溝8.75m、南北溝22.82mを検出した。A-2区では、上面を大きく削平され、削平面IIIにおいては確認できず、削平面IIにおいてようやく溝底面付近が確認された。また、後述するSD07やSX03は、その位置関係や埋土の特徴、出土遺物の内容などの点から、本溝と一連の遺構である可能性が想定される。幅は、東西溝で3.3m前後、南北溝で5.8m以上、残存深は、東西溝で最大0.2m、南北溝で同0.35m、肩部は緩やかに掘り込まれ、断面形は概ね皿状を呈する。流路方向は、東西溝でN54.67°E、南北溝でN36.96°Wと、両溝は概ね直交する。底面は起伏に富み、その標高は東西溝で14.6m前後、南北溝で14.2m前後を測り、底面の標高差から南へ流下すると考えられる。埋土は単層で、粒径5cm以下のベース層ブロック土をやや多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。

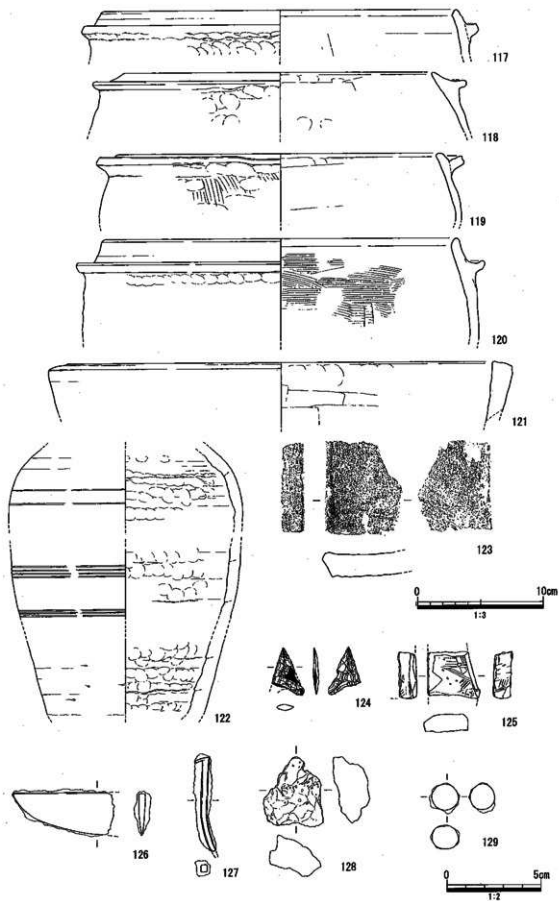
遺物は、図示した以外に、須臾器、土師質土器皿・杯・足釜・鍋・播鉢、亀山焼甕、備前焼甕・播鉢、龍泉窯系青磁碗、焼土塊、サヌカイト火打石・石核・チップ・剥片などが若干量出土した。いずれも細片化しており、完形に復元可能なものはない。

なお、本溝で画されたとくにA-3区においては、掘立柱建物2棟を含む一定数の柱穴群が検出された。したがって本溝は、これら建物群で構成される屋敷地の区画溝としての機能が想定される。

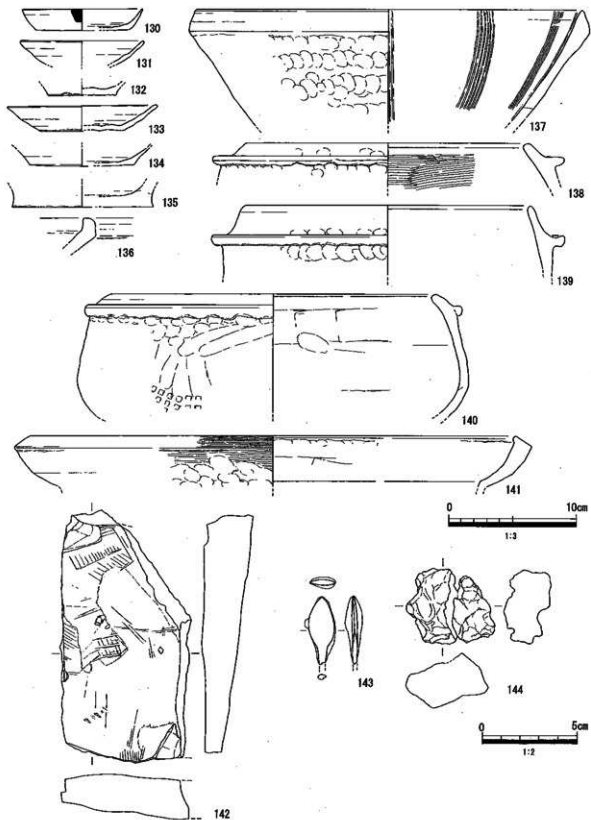
SD07 A-2区で検出した。近世以降の溝状遺構などとの重複のため、平面プランは上面を一部掘り下げて確認した。北西―南東に配され、北西端は調査区内で途切れる。延長7.2mを検出した。調査区内でわずかにS字状に屈曲するが、概ね流路方向はN32.6°Wとなる。底面の標高は、北西端で14.15m、



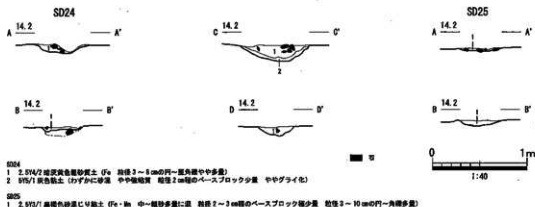
第29圖 SD08 出土遺物実測図1



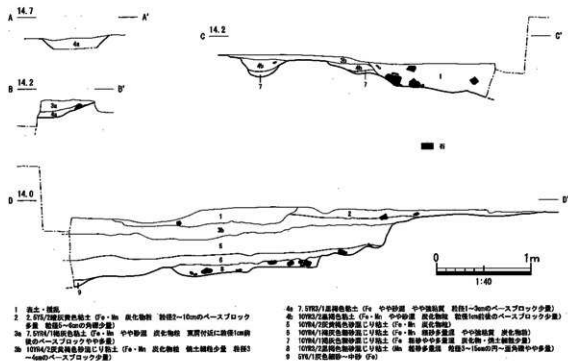
第 30 图 SD08 出土遗物实测图 2



第 31 圖 SD07 出土遺物実測図



第32図 SD24・25土層断面図

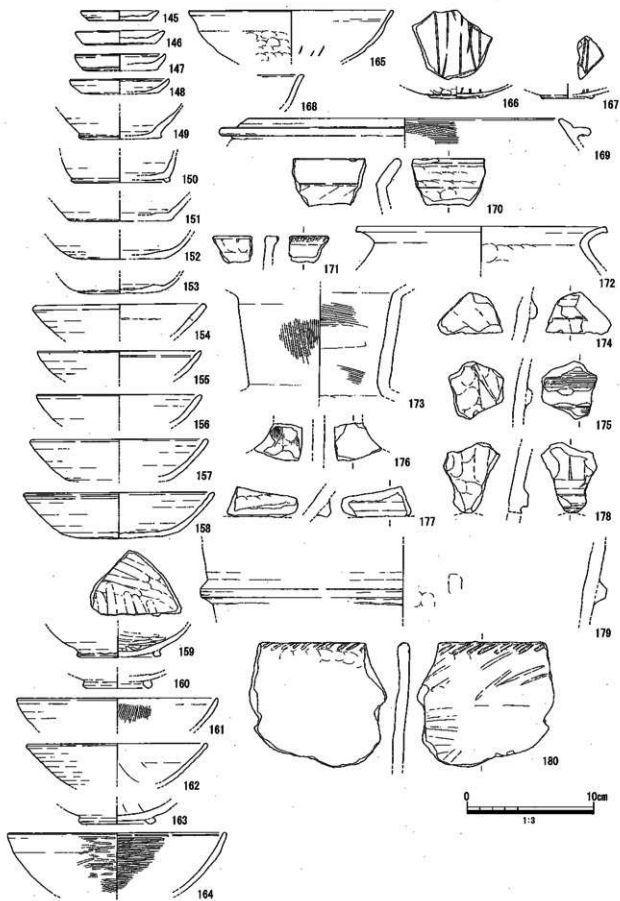


第33図 SR01土層断面図

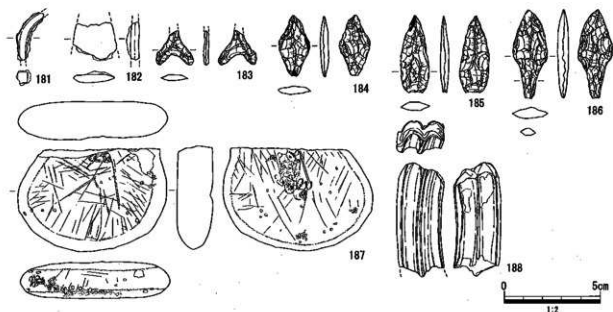
南東端で13.81mとなり、南東方向に流下する。検出位置での幅2.0m以上、残存深は最大で0.5m、断面形は逆台形状ないしU字状を呈する。埋土は、2~3層に細分された。上層は、溝上面を覆う堆積層で自然堆積層とみられる。底面に粗砂層の薄い堆積がみられることから、本層の堆積初期にわずかな水流のあった可能性が考えられる。中層は、粘土~シルト~粗砂のラミナ堆積を示し、顕著な溝機能時の堆積層と考えられる。下層は、溝西部でのみ確認した粘土層で、ベース層の流入が認められるなど自然堆積の可能性が高い。中層は、この下層上面より掘り込むように堆積していることから、溝の機能停止後一定期間放置され、下層堆積後に改修された可能性も考えられる。

遺物は、コンテナ1箱程度出土しており、溝東半部上層にやや多くまとまる。ただ細片化したものが多く、完形に復元可能なものはない。図示した以外に、須恵器、土師質土器小皿・杯・足釜・鍋・土鍋・摺鉢、亀山焼甕、備前焼甕・壺、龍泉窯系青磁碗、瓦質土器摺鉢、焼土塊、サヌカイト剥片などが出土している。

SD10・11 A-3区で検出した。SD10は、調査区南端部付近でL字状に配される小溝で、東端は調査区内



第 34 图 SD25 · SR01 出土遺物実測図 1



第35図 SD25・SR01出土遺物実測図2

で途切れ、南端は調査区外へ延長する。東西溝の流路方向N 55.80° E、幅0.16～0.25 m、残存深0.04 m、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、南端で14.72 m、東端で14.66 mを測り、底面の高低差から東へ流下する。埋土は単層。

SD11は、SD10の中央付近より北に派生する小溝である。北端は調査区内で途切れ、延長1.29 mを検出した。流路方向N 35.0° W、幅0.17～0.21 m、残存深0.03 m、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、北端で14.75 m、SD03との合流部付近で14.72 mとわずかに南に下る。埋土は単層で、SD10と酷似し、同時併存とみられる。両溝とも、規模・形状より建物の雨落ち溝としての性格が想定できるが、適した位置に建物遺構は復元できず、性格については不詳である。

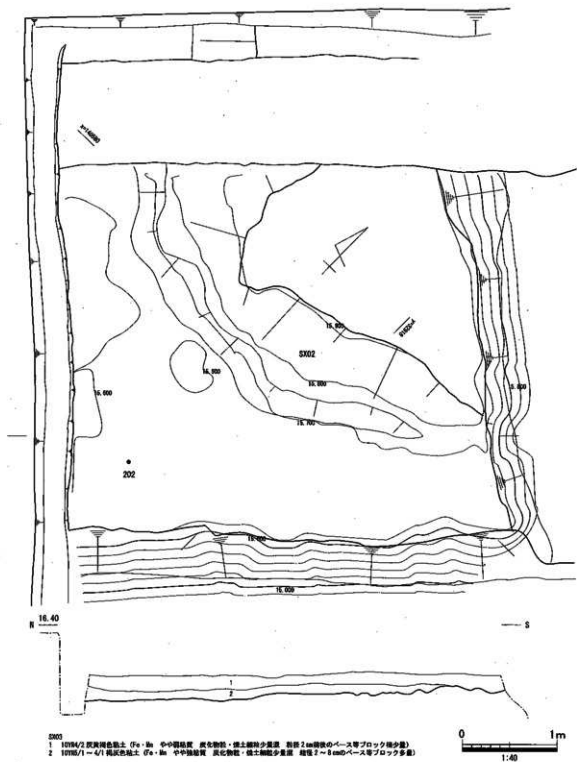
遺物は、両溝とも土師質土器小皿や須恵質土器碗などの細片がごく少量出土したのみである。

SD24・25 C-2区SR01西岸部で検出した。両溝とも、やや蛇行して検出され、規模や流路方向は一定せず、人為的に掘開された溝状遺構よりはむしろ、雨水や丘陵部よりの流水により生じた小規模な自然流路といった感じが強い。SR01の上層は、両溝埋土を削り込んで堆積するが、位置関係などから、SR01とその機能時の一時期を共有していた可能性は高いと判断される。SD24の幅0.38～0.72 m、残存深0.02～0.16 m、SD25の幅0.31～0.57 m以上、残存深0.02～0.06 mである。断面形は両溝とも概ね皿状を呈し、底面の標高は、13.90～14.00 m前後で、部位により若干の起伏を認める。埋土は上位に、中～粗砂や径3～10 cmの円～亜角礫が多量に混じり、流水下堆積の可能性が想定できる土壌が堆積し、SD24では溝北部のやや深くなった部分に、弱くグライ化した粘土層が堆積する(第32図)。

遺物は、両溝とも極少量の須恵器、土師質土器小皿・楕鉢などの細片と、サヌカイト剥片が出土したのみである。

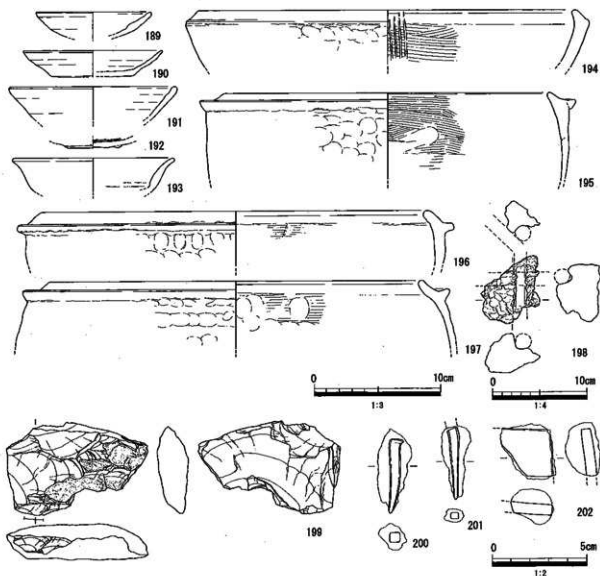
自然流路

SR01 C-2区で検出した。調査区東端を概ね直線状に流下し、南北両端と東岸は調査区外へ延長する。東端部は、繰り返し穿たれた近代以降の攪乱土坑により、大きく損なわれている。上面プランや後述する埋土上位層は、単一の流路として確認されるが、底面には複数の小流路が併走・分岐して流下し、さらには起伏や段が顕著に認められ、飯野山より下る小規模な谷地形と考えられる。流路幅4.95 m以上、残存深は最大0.81 m、断面形はU字状ないし逆台形状を呈する。底面の標高は、北端部で13.91 m、



第36図 SX03 平面・土層断面図

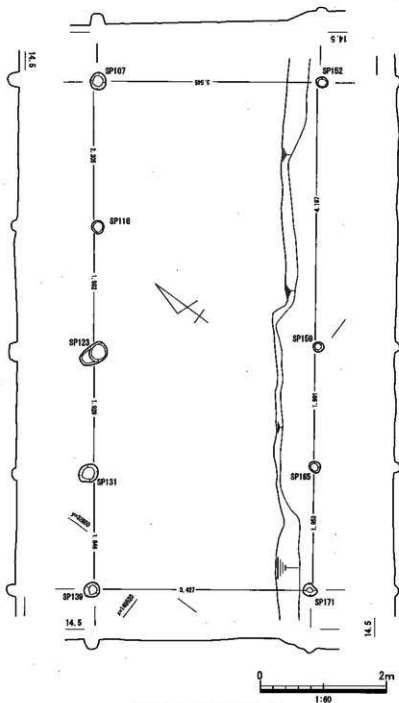
中央部で13.77 m、南端部で13.10 mを測り、とくに検出範囲の南半部で急速に底面標高を下げている。埋土は5層に大別する。最上層（第33図4層）は、溝南端部付近で確認された上面を薄く覆う土層で、ベース層のブロック土を多量に含み、流路上面に残された窪地を埋める整地土の可能性が考えられる。上層（同図5～7層）は、砂が混じる褐色系の粘土層で、弱い水流を伴いながらも穏やかな環境下で徐々に埋没したことが想像される。本層堆積時には、谷としての機能はほぼ停止していたと想定される。中



第 37 図 SX03・04 出土遺物実測図

層（同図 8 層）は、流路南半部のやや深くなった部分に堆積した粘土層で、上層より粗砂の比重が高く、より頻繁な水流下での堆積が想定される。下層（同図 9・10 層）は、粗砂や長径 3～15 cm 程度の円～亜各稜が多量に混じる粘土層で、流路底面の西側の小流路及びこれに合流する中央部の小流路を埋める土壌である。土石流堆積をイメージさせる堆積層である。最下層（同図 11 層）は、東側の小流路を埋める土壌で、細～中砂が堆積し、旺盛な流水下堆積を示す。

遺物は、図示した以外に、最上層より円筒埴輪、須恵器、土師質土器小皿・皿・杯・碗・土鍋、黒色土器碗、西村産須恵質土器碗、瓦器、焼土塊などの小片やサヌカイト剥片が、上層より弥生土器、円筒埴輪、須恵器杯、土師質土器皿・杯・碗・足釜・土鍋、黒色土器碗、西村産須恵質土器碗、瓦器皿、焼土塊などの小片やサヌカイト石鏃・剥片が、中層より弥生土器、円筒埴輪、須恵器、土師質土器皿・杯・碗、黒色土器碗、西村産須恵質土器碗、サヌカイト剥片が、下層より弥生土器甕、円筒埴輪、須恵器杯、土師質土器皿・杯、和泉型瓦器碗などの小片やサヌカイト石鏃、動物遺存体が、最下層より須恵器、土師質土器の細片が少量出土した。出土遺物総量は、28 ℓ 入りコンテナ 2 箱である。とくに上層ないし中層からの遺物量が多い。



第38図 SB03平・断面図

た。切り合い関係より、SX03より先行する。埋土は2層（第7図①22・23層）に分層されたが大差はなく、いずれもベース層ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が窺える。形状より、溝状遺構の可能性も考えられたが、検出範囲に限られるため、断定するまでには至らなかった。

遺物は、土師質土器小皿・皿・杯・土鍋、須恵器片、サヌカイト剥片などが少量出土したにすぎない。切り合い関係からSX03よりは先行するが、SX04埋没後まもなくSX03が掘削されたと考えられる。

5 近世

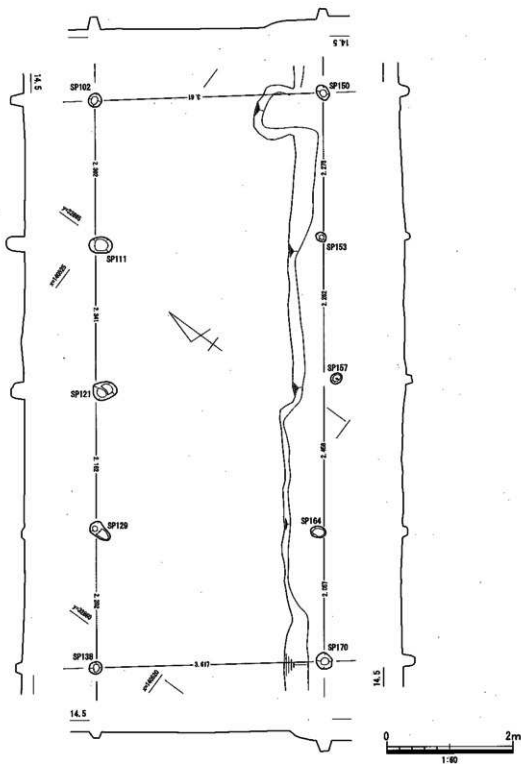
掘立柱建物

性格不明遺構

SX03・04 SX03は、A-2区削平面Iで検出した。西部は調査区外へ延長し、北部と東部は削平により、全形を窺うことはできない。南北3.4m以上、残存深0.3mで、断面形は皿状を呈する。南東方向に緩やかに傾斜しており、既述したようにSD08と一連の溝状遺構の可能性がある。埋土は2層に分層された（第36図）。下層は、粒径8cm以下のベース層のブロック土を多量に含み、人為的な埋め戻しなしに整地土の可能性が考えられる。上層は自然堆積層であろう。

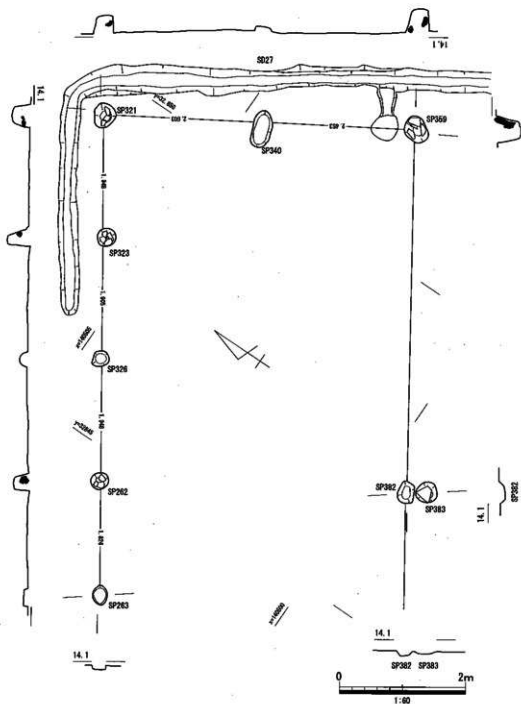
遺物は、上層を中心にコンテナ半箱程度出土した。いずれも小片化しており、完形に復元可能なものはない。図示した以外に、須恵器、土師質土器小皿・杯・足釜・土鍋・播鉢、和泉系瓦器碗、亀山焼甕、輸入磁器白磁皿、同安窠系青磁碗、焼土塊などが出土している。

SX04は、A-2区西壁際で検出した。大半が調査区外へ延長し、また北端部は地下げにより消失し、その東肩部をわずかに確認したのみで、全形は不詳である。南北長10.6m以上、残存深0.3mを検出し



第39図 SB04平・断面図

SB03 C-1区で検出し、桁行4間、梁間1間、主軸方位N 53.67° Eの東西棟の側柱建物として復元した。桁行南列の柱穴は、攪乱溝により上面を概ね0.1m程度削平を蒙る。桁行南列1穴を欠く。桁行は北側で8.06m、南側で8.05m、梁間は東側で3.55m、西側で3.44m、床面積は28.13㎡である。桁行の柱間寸法は、欠落する柱穴を除いて、1.85～2.31mとややばらつく。柱穴掘り方は、径0.14～0.27m前後の略円形ないし楕円形を主とし、残存深0.07～0.25m、底面の標高14.09～14.24mであった。

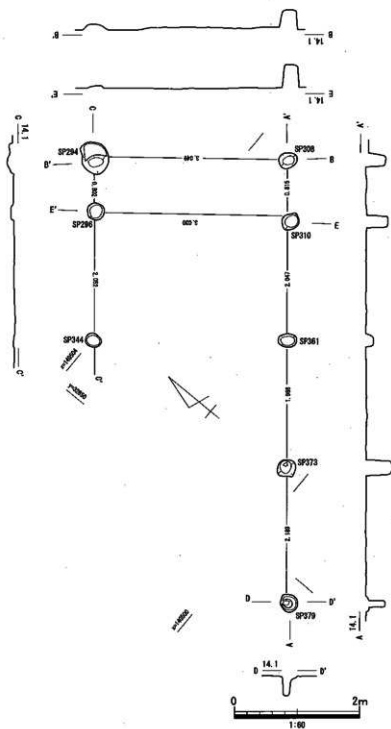


第 40 図 SB05 平・断面図

全般に桁行南列の柱穴が、北列よりも 0.1 m 程度深く掘り込まれている。旧地形を一定程度反映した可能性は想定できるが、その構造的な理由については不明である。

遺物は出土していない。

SB04 C-1 区 SB03 とほぼ同位置で検出したが、柱穴の重複がみられず、先後関係については不詳である。主軸方向や建物規模は、SB03 と近似し、建て直された可能性が高い。桁行 4 間、梁間 1 間、主軸方位 N 53.43° E の東西棟の側柱建物として復元した。桁行は北側で 9.01 m、南側で 9.02 m、梁間は東側で 3.62 m、西側で 3.63 m、床面積は 32.68 m² である。桁行の柱間寸法は、2.08 ~ 2.45 m とややばらつく。柱穴掘り方は、径 0.13 ~ 0.26 m 前後の略円形ないし楕円形を主とし、残存深 0.10 ~ 0.30 m、

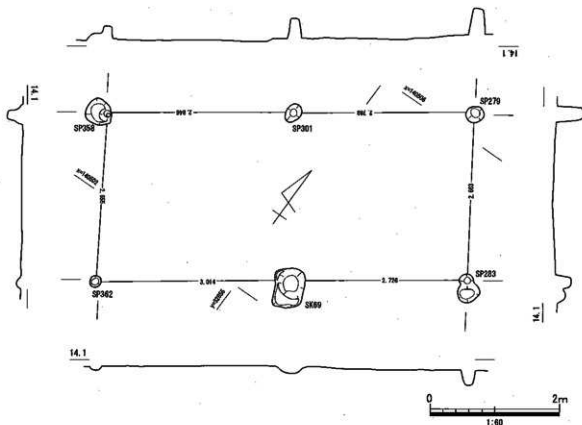


第41図 SB06平・断面図

底面の標高 13.98～14.21 mであった。SB03 同様、桁行南列の柱穴が、北列よりも 0.1 m 程度深く掘り込まれている。

遺物は、SP121 より土師質土器の壺体部とみられる細片が 2 点、SP111 より土師質土器の細片が 4 点出土しているのみである。

SB05 C-2 区 SB06・07 と重複して検出したが、柱穴の重複はみられず、先後関係については不詳である。桁行 4 間、梁間 2 間、主軸方位 N 56.35° E の東西棟の側柱建物として復元した。桁行南列 3 穴と梁間西列 1 穴を欠く。桁行北列で 7.62 m、梁間東列で 4.95 m、床面積は 37.72 m² である。桁行の柱間寸法は、



第 42 図 SB07 平・断面図

1.77～2.00 mとややばらつく。柱穴掘り方は、径 0.23～0.41 mの略円形ないし楕円形を主とし、残存深 0.08～0.35 m、底面の標高 13.62～13.97 mであった。SP262・321・323・359 で、長軸 0.05～0.31 mの角～亜角礫の詰石が確認された。

遺物は、SP262 より土師質土器と瓦質土器、SP326 より土師質土器大甕と瓦、SP323・359 より土師質土器の細片がそれぞれ数点出土した。

SB06 C-2 区で検出し、桁行 3 間、梁間 1 間、主軸方位 N 50.55° E の東面に庇を有する東西棟の側柱建物として復元した。桁行北列 2 穴を欠く。桁行南列で 6.05 m、梁間東列で 3.05 m、床面積は 18.45 m²である。桁行の柱間寸法は、1.92～2.16 mとややばらつく。柱穴掘り方は、径 0.22～0.40 mの略円形ないし隅丸方形を主とし、残存深 0.03～0.36 m、底面の標高 13.60～14.01 mであった。全般に桁行南列の柱穴が北列よりも、0.2 m程度深く掘り込まれている。SP373 で、柱材の遺存が認められた。

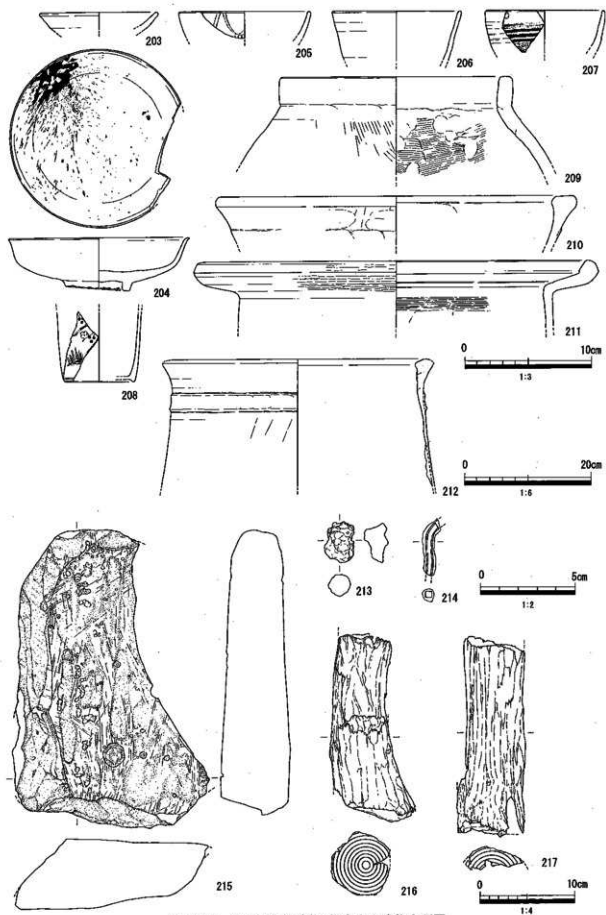
遺物は、SP344・361 より土師質土器、SP373 より土師質土器碗の細片がそれぞれ数点出土した。

SB07 C-2 区で検出し、桁行 2 間、梁間 1 間、主軸方位 N 54.44° E の東西棟の側柱建物として復元した。桁行南列中央穴は SK14 により壊される。桁行北列で 5.67 m、桁行南列で 5.73 m、梁間東列で 2.66 m、梁間西列で 2.68 m、床面積は 15.22 m²である。桁行の柱間寸法は、2.80～2.87 mとまとまる。柱穴掘り方は、径 0.15～0.38 mの略円形ないし楕円形を主とし、残存深 0.07～0.41 m、底面の標高 13.50～13.94 mであった。SP358 で、柱材の遺存が認められた。

遺物は、SP283・301 より土師質土器、SP358 より須恵器、土師質土器、肥前系陶器、平瓦の細片がそれぞれ数点出土した。

柱穴

当該時期の柱穴は、C地区において検出し、既述したように建物遺構 5 棟を復元した。建物を復元で



第 43 图 近世掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図

きなかった柱穴も多数検出され、それら柱穴より出土した遺物は第43図に図示した。

土坑

SK04 B-1区で検出した。北部と東部は調査区外へ延長し、全体形状は不詳である。埋土は2層に細分(第44図)され、両層とも人為的な埋め戻し土と考えられる。

遺物は、周辺遺構からの混入とみられる中世の遺物が一定量出土している。

SK07・08 B-1区で2基並んで検出した。宅地造成により、上面は大きく削平を蒙る。SK07は、平・断面プランとも安定した形状を呈する。埋土は、3層に細分された。上層(第44図1層)は、人為的な埋め戻し土。中層(同図2層)は、炭・焼土層で、土坑全面に堆積する。下層上面に被熱痕が確認できず、炭・焼土は廃棄されたと想定される。下層(同図3層)は、土坑掘削後の流入土であろうか、底面付近に炭粒を少量含む。SK08は、SK07の西約0.6mで検出され、SK07とほぼ同規模の上坑である。埋土は2層で、SK07上・中層と酷似する。

両上坑は近接して検出され、内容も酷似することから、ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。

SK09 B-2区SK10の東に接して検出した土坑で、埋土や遺物内容が近似していることから、SK10と同じ性格をもつと推定される。遺構の大半を攪乱溝によって壊されているため、確認できたのは北西隅の一部である。埋土は単層(第45図)で、炭化物粒や焼土塊を多量に混入する。

SK10 B-2区で検出した。平面プランは不整形な形状を呈し、底面は起伏がやや顕著に認められ、とくに東半部約0.85mは深く掘り込まれる。埋土は上下2層に大別する。上層(第45図1層)は、炭化物や焼土粒、鉄滓などを多量に含む。下層上面に被熱痕跡は認められず、近接した鍛冶炉より廃棄されたものと考えられる。下層(同図2・3層)は、粒径5cm以下のベース層のブロック土を多量に含み、人為的な埋め戻し土と考えられる。下層中にも、炭化物や焼土の混入が認められ、一定期間継続して廃棄された可能性が考えられる。

SK11・12・13 B-2区で検出した。いずれも埋土は単層(第44図)で、人為的な埋め戻し土と考えられる。

SK14 B-2区で検出した。平面プランは不整形で、東から南部にかけて浅いテラスが巡る。埋土は2層に細分された。下層(第44図2層)は人為的な埋め戻し土と考えられ、上層(同図1層)は下層埋め戻し後に生じた窪地に自然堆積した土壌であろう。

SK15 B-2区で検出した。埋土は2層に細分され、上層(第44図1層)は、土坑廃棄後の人為的な埋め戻し土、下層(同図2層)は、滞水下堆積の可能性が想定され、土坑機能時の堆積層と考えられる。

SK16 B-2区で検出した。西端部でSK15が上より掘り込まれる。埋土は、ブロック土の混入の多寡により2層に細分可能だが、大差はなく単層として図化した(第44図)。いずれも人為的な埋め戻し土であろう。

SK17 B-2区で検出した。埋土は3層に大別され、上層(第44図1・2層)は、土坑廃棄後の人為的な埋め戻し土と考えられる。中層(同図3層)は、滞水下堆積の可能性が想定され、底面より遺物が投棄された状況で出土した。埋土や遺物の出土状況は、土坑廃棄後に一定期間オープンな状態であった可能性を示唆する。なお本層は後述する下層を掘り込むように堆積し、本層下面には浅いテラス面が十坑東半部を半周することから、下層堆積後再度掘り直された可能性も考えられる。下層(同図4層)は、人為的な埋め戻し土であろう。

SK18 B-2区で検出した。西半部は調査区外へ延長し、全形を窺うことはできない。上坑底面に接して、土師質土器風呂底部が正置の状態出土した。底部は全周せず欠損しており、体部は打ち欠いている。土坑廃棄時に打ち欠いたものか、打ち欠いた風呂を設置し何らかの用途に供しようとしたのかは不明。埋土は、風呂内部に堆積した土坑廃棄後の埋め戻し土である上層(第44図1層)と、風呂の裏込め土の下層に分層した。

SK19 B-2区で検出した。切り合い関係よりSK18に先行する。南半部は調査区外へ延長し、全形を窺うことはできない。

SK20 C-1区SD18の底面で検出し、SD18より先行する。埋土は単層（第45図）で、人為的な埋め戻し土と考えられる。

SK21 C-1区で検出した。西端部の一部をSD18によって覆われる。土坑底面にほぼ接するように、底部を打ち欠いた土師質土器大甕が正置の状態出土した。甕と土坑規模はほぼ一致し、当初より埋甕土坑として掘削されたと考えられる。埋土は、甕内部に堆積し、土坑廃棄後の埋め戻し土である上層と、甕の裏込め土である下層に分層する。甕内部底面には、甕体部上半部を破砕し埋め戻したらしく、他の遺物とともに一定量の体部破片が折り重なり出土した。

SK22 C-1区で検出した。底面より上位約0.15mの周壁は直に近く掘り込まれ、それより上位は緩やかに大きく開く。埋土は2層に細分された。断面形状に概ね相関して、上下2層が堆積する。上層（第45図1層）は、人為的な埋め戻し土と想定され、下層堆積後に上面より掘り返された堆積状況を示す。下層（同図2層）は、ベース層の流入土もしくは埋め戻し土と想定される。

SK23 C-1区で検出した。埋土は単層（第45図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK24 C-1区で検出した。埋土は2層に細分され、上層（第45図1層）は土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。下層（同図2層）は滞水下堆積の可能性があり、土坑掘削後一定期間オープンな状態であったか、滞水状況下で使用された可能性が想定される。

SK25 C-1区で検出した。埋土は2層に細分（第45図1・2層）された。いずれも土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられ、その堆積状況や平・断面プランより再掘削された可能性が考えられる。

SK26 C-1区で検出した。埋土は2層に細分され、上層（第45図1層）は滞水下堆積の可能性が想定され、下層は埋め戻し土と考えられる。埋土の堆積状況から、一程度埋め戻した後再度掘削し、一定期間オープンな状態で放置されたか、滞水下で使用された可能性が考えられる。

SK27・28 C-1区で検出した。いずれも埋土は単層で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK29 C-1区で検出した。切り合い関係から、SB04より先行する。検出面より下位4cmほどの位置で、東西両層に幅0.1～0.15mのテラス面を備え、それより下位はほぼ直に近く掘り込まれる。埋土は単層（第46図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK30 C-1区で検出した。土坑底面よりやや浮いて、土師質土器火鉢が底部を下に正置の状態出土した。埋土は、その火鉢内に堆積し、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる上層と、火鉢の裏込め土である下層に分層する。火鉢底面からは、上半部を破砕して埋め戻したらしく、体部破片が折り重なるように出土した。

SK31 C-1区で検出した。切り合い関係から、SB03より先行する。埋土は単層（第46図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK32 C-1区で検出した。切り合い関係より、SD19より先行する。埋土は単層（第46図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK33 C-1区攪乱溝底面で検出した。土坑底面より9cm前後上位で、土師質土器甕が底部を下に正置の状態出土した。甕と土坑規模はほぼ一致する。埋土は、主に甕上面に堆積し、土坑廃棄後の埋め戻し土である上層（第46図1層）と、甕内部に堆積し、土坑機能時の堆積層の可能性のある中層（同図2層）、甕の裏込め土である下層（同図3層）に分層する。上層下位から中層にかけて、甕体部上半を破砕し埋め戻したらしく、平瓦などとともに体部破片が折り重なって出土した。

SK34 C-1区で検出した。北端部を攪乱溝によって覆われる。埋土は単層（第46図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK35 C-1区で検出した。埋土は単層（第46図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK36 C-1区で検出した。西半部は調査区外へ延長し、全形を窺うことはできない。埋土は3層に細分され、上層(第46図1層)は、土坑埋め戻し後の窪地に堆積した流入土、中層(同図2層)は土坑廃棄後の埋め戻し土である。中層底面には、厚さ1~2cm程度に炭層が薄く堆積し、炭化物や焼土粒が多く混じる。下層(同図3層)は、滯水下の堆積の可能性が想定され、土坑廃棄後一定期間オープンな状態であった可能性がある。

SK37 C-1区で検出した。埋土は単層(第46図)で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK38 C-1区で検出した。切り合い関係から、SK39より後出する。土坑中央部、底面よりわずかに浮いて、土師質土器火鉢が底部を下に正置の状態出土した。埋土は、その火鉢内に堆積し、土坑廃棄後の埋め戻し土と想定される上層(第46図1層)と、火鉢の裏込め土である下層(同図2層)に分層する。上層からは、埋め戻し時に体部上半を破砕したらしく、破片数点が出土した。

SK39 C-1区で検出した。切り合い関係よりSD21より先行する。検出面より約0.15m下位に北肩部で浅いテラス面が伴う。埋土は単層(第46図)で、土坑廃棄時の埋め戻し土と考えられる。

SK40 C-1区で検出した。SK41との切り合い関係が不詳のまま調査を進め、後再度詳細に切り合い関係を確認したところ、SK41より後出することが判明した。したがって、北半部の一部については、上面プランの確認ができていない。埋土は単層(第47図)で、土坑廃棄時の埋め戻し土と考えられる。また、長軸4~20cm程度の安山岩や花崗岩の亜角礫10点程度が埋土中より出土した。とくに規則的に配置された状況は窺えず、遺物とともに投棄されたものと判断された。

SK41 C-1区で検出した。既述したように、重複関係の認識を誤ったため、土層上半部について詳細な記録は作成できていない。埋土は、調査データより土坑廃棄時の埋め戻し土により上面まで充填されていたと考えている(第47図)。

SK42 C-1区で検出した集石土坑である。埋土は単層(第47図)で、土坑廃棄時の埋め戻し土と考えられる。集石に意図的な配列は認められず、土坑中央部に少なく周壁際を中心に出土し、土器類や石製品などの遺物が混在しており、土坑周囲より投棄されたと判断される。石材は、長軸2~25cmの安山岩を中心とした角~亜角礫であり、遺跡周辺のベース層中に散見される石材である。

SK43 C-1区で検出した。切り合い関係より、SK42より先行する。土坑底面よりわずかに浮いて、底部を打ち欠いた土師質土器甕が底部を下に正置の状態出土した。甕と土坑規模はほぼ一致する。埋土は、この甕内部に堆積した上層(第47図1・2層)と、甕の裏込め土(同図3層)に大別する。上層はいずれも土坑廃棄後の人為的な埋め戻し土であり、とくに下位層底面付近はグライ化しており、滯水で埋め戻された可能性がある。甕底部付近より、土坑廃棄に際し甕体部を破砕し埋め戻したらしく、他の遺物とともに一定量の破片が折り重なるように出土した。

SK44 C-1区で検出した。平面プランはやや不整形であり、複数の遺構の重複の可能性も考えられるが、調査時に確認できていない。切り合い関係より、SK42・43より先行する。埋土は単層(第47図)で、土坑廃棄時の埋め戻し土と考えられる。

SK45 SK44底面で検出した。その位置関係や土層の堆積状況から、SK44とは別遺構とした。埋土は3層に細分された。下層(第47図4層)は、ベース層の流入土とみられ、土坑廃棄まで一定期間オープンな状態であった可能性がある。中層(同図3層)は、人為的な埋め戻し土である。上層(同図2層)は、埋め戻し後に生じた窪地に自然堆積した土壌であろう。

SK46 C-1区で検出した。埋土は2層(第47図)に細分されたが大差はなく、いずれも土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK47 C-1区で検出した。切り合い関係よりSK43・44・46より先行する。埋土は2層(第48図)に細分されたが大差はなく、いずれも土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK48 C-1区で検出した。南半部は調査区外へ延長し、北部はSK44に譲られる。限られた部分の調査

であったため、SK49との重複に気付かず、掘り方東辺の一部を掘り抜いてしまった。埋土は単層（第48図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK49 C-1区で検出した。南半部は調査区外へ延長し、また上面をSK48に覆される。土坑底面に接して、土師質土器甕が底部を下に正置の状態出土した。底部は全周せず、西半部は抜き取られていた。残存する甕体部と土坑規模はほぼ一致する。埋土は、甕内部から土坑上面まで堆積する上層（第48図2層）と、甕の裏込め土である下層に分層する。上層は、土坑廃棄後の人為的な埋め戻し土である。甕底面からは底・体部を破砕し埋め戻したとみられ、破片が折り重なるように出土した。

SK50 C-1区で検出した。埋土は単層（第48図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土と考えられる。

SK51 C-1区で検出した。切り合い関係から、SD22より先行する。埋土は2層（第48図）に細分され、いずれも土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK52 C-1区で検出した。切り合い関係より、SD22より先行する。埋土は単層（第48図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK53 C-1区で検出した。切り合い関係から、SK55・SD22より先行する。埋め戻し土である上層（第48図1層）を除去した段階で、南北に2基ならんだ土坑を確認し、これらを下層土坑として調査した。上層と各土坑の埋土との堆積状況から、南土坑が先行し、南土坑を埋め戻した後北土坑が開削されたと考えられる。北下層土坑は、平・断面プランとも概ね安定した形状を呈する。埋土は単層（同図2層）で、滞水下堆積の可能性があり、土坑機能時の堆積層と考えられる。南下層土坑は、北土坑より約0.18m浅い。底面より上位0.15m程度の周壁は直に近く掘り込まれ、それより上位は緩やかに開く。埋土は単層（同図3層）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK54 C-1区で検出した。埋土は単層（第48図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK55 C-1区で検出した。埋土は上下2層に大別する。上層（第48図1・2層）は、掘り方の大半を埋める埋土で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。下層（同図3層）は、滞水下堆積の可能性が想定され、土坑機能時の堆積層と考えられる。

SK56 C-1区で検出した。切り合い関係から、SK55より先行する。埋土は単層（第49図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK57 C-1区で検出した。切り合い関係から、SK55・56より先行する。埋土は単層（第49図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK58 C-1区で検出した。切り合い関係から、SD22、SK53・55より先行する。埋土は単層（第49図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

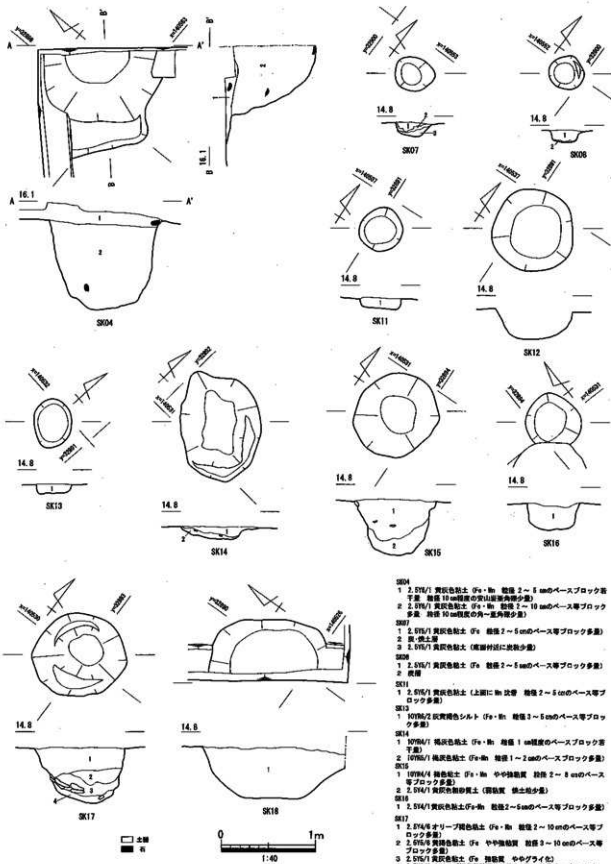
SK59 C-1区で検出した。埋土は2層に細分された。上層（第49図1層）は、土坑廃棄後の埋め戻し土で、遺物を多量に含む。下層（同図2層）は、掘り方東際に斜面堆積した粘土層で、流入土とみられることから、土坑廃棄まで一定期間オープンな状態であった可能性がある。

SK60 C-1区で検出した。上面プランは方形を基調とする不定形な掘り方を示し、それを埋めるほぼ水平に堆積した土壌（第49図1層）は、整地土と判断され、残存深0.1～0.16mの層厚がある。

SK61・62 両土坑ともSK60底面で検出し、切り合い関係から、SK60より先行する。いずれも埋土は2層（第49図）に細分されたが大差はなく、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

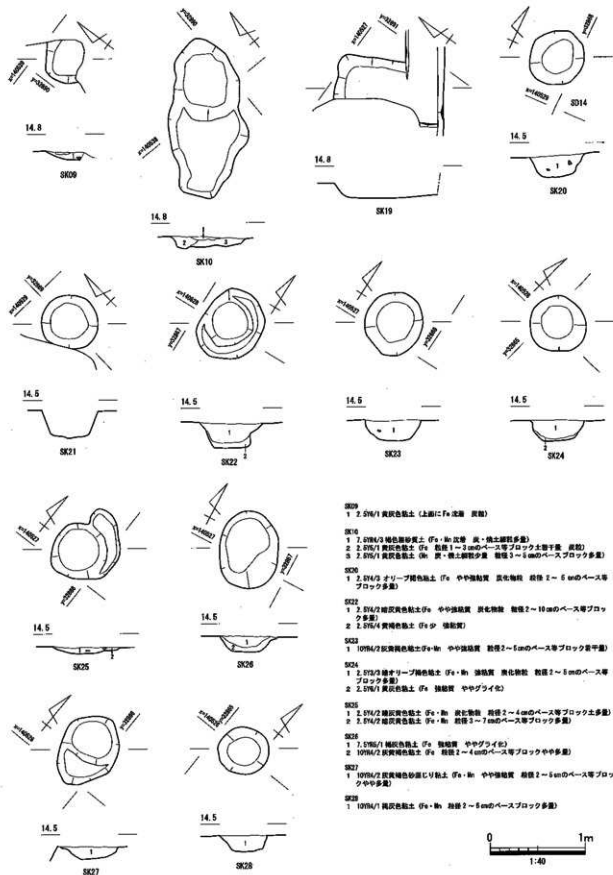
SK63 SK60底面で検出し、切り合い関係から、SK60より先行する。また、SK62と一連の遺構として掘り下げたため、上位層については詳細な記録を残すことができなかった。両土坑の間隔は、わずかに0.1mと近接し、同時併存の可能性は乏しいと判断されるが、先後関係については不詳である。底面付近でろうじて確認した土層（第49図6・7層）は2層に細分され、いずれも人為的な埋め戻し土である。また、上層は下層を掘り込んで堆積しており、一旦埋め戻した後再掘削した可能性が窺える。

SK64 C-1区で検出した。切り合い関係から、SK60より先行する。埋土は上・下2層に大別する。いず



- SK04
- 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe・Mn) 柱礎 2～5 cmのベースブロック着平層 柱礎 10 cm程度の尖山頂部(角部少量)
 - 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe・Mn) 柱礎 2～10 cmのベースブロック多量 物置 10 cm程度の角一量(角部少量)
- SK07
- 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe) 柱礎 2～5 cmのベース等ブロック多量)
 - 灰・粘土層
 - 2.576/1 黄灰色粘土 (灰層中に炭粒少量)
- SK08
- 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe) 柱礎 2～5 cmのベース等ブロック多量)
 - 礎
- SK11
- 2.576/1 黄灰色粘土 (上部にMn 改善 柱礎 2～5 cmのベース等ブロック多量)
- SK12
- 1070M/2 灰黄色緑色シルト (Fe・Mn) 柱礎 3～5 cmのベース等ブロック多量)
- SK13
- 1070M/1 黄灰色粘土 (Fe・Mn) 柱礎 1 cm程度のベースブロック着平層)
 - 1070M/1 黄灰色粘土 (Fe・Mn) 柱礎 1～2 cmのベースブロック多量)
- SK15
- 1070M/4 緑色粘土 (Fe・Mn) 中や中後期 柱礎 2～8 cmのベース等ブロック多量)
 - 2.576/1 黄灰色砂質土 (腐蝕質 粘土少量)
- SK16
- 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe・Mn) 柱礎 2～5 cmのベース等ブロック多量)
- SK17
- 2.576/4 オリーブ褐色粘土 (Fe・Mn) 柱礎 2～10 cmのベース等ブロック多量)
 - 2.576/4 緑色粘土 (Fe) や中後期 柱礎 3～10 cmのベース等ブロック多量)
 - 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe) 柱礎 中や中後期)
 - 2.576/4 オリーブ褐色砂質シルト粘土 (Mn) 柱礎 2～3 cmのベース等ブロック多量)
- SK18
- 1070M/1 黄灰色粘土 (Fe・Mn) 灰化物 柱礎 3～5 cmのベース等ブロック多量)

第44図 SK04・07・08・11～18平面・土層断面図



SK09
1 2.576/1 黄灰色粘土 (上面にFe沈着 炭酸)

SK10

- 1 2.576/2 褐色黄砂質土 (Fe・Mn 沈着 炭・焼土層跡多量)
- 2 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe 炭層 1~3cmのベース等ブロック土層平層 炭酸)
- 3 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe 炭・焼土層跡少量 炭酸 1~5cmのベースブロック多量)

SK16

- 1 2.574/2 オリーブ褐色粘土 (Fe 中や強粘質 炭化植物 炭酸 1~5cmのベース等ブロック多量)

SK22

- 1 2.574/2 黄褐色粘土 (Fe 中や強粘質 炭化植物 炭酸 2~10cmのベース等ブロック多量)
- 2 2.574/4 黄褐色粘土 (Fe 少 強粘質)

SK23

- 1 1.076/2 黄褐色粘土 (Fe・Mn 中や強粘質 炭酸 2~5cmのベース等ブロック多量)

SK24

- 1 2.573/2 緑やオリーブ褐色粘土 (Fe・Mn 強粘質 炭化植物 炭酸 2~5cmのベース等ブロック多量)
- 2 2.576/1 黄灰色粘土 (Fe 少 強粘質 ややグライ化)

SK25

- 1 2.574/2 緑褐色粘土 (Fe・Mn 炭化植物 炭酸 2~4cmのベース等ブロック多量)
- 2 2.574/2 黄褐色粘土 (Fe・Mn 炭酸 2~7cmのベース等ブロック多量)

SK26

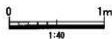
- 1 2.576/1 緑褐色粘土 (Fe 強粘質 ややグライ化)
- 2 1.076/2 黄褐色粘土 (Fe 炭酸 2~4cmのベース等ブロックや中多量)

SK27

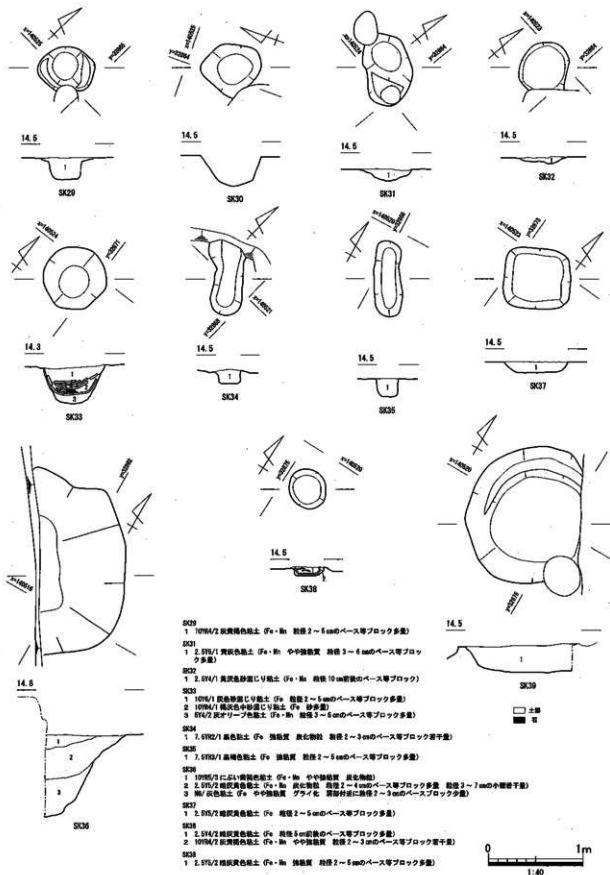
- 1 1.076/2 黄褐色粘土 (Fe・Mn 中や強粘質 炭酸 2~5cmのベース等ブロックや中多量)

SK28

- 1 1.076/1 黄褐色粘土 (Fe・Mn 炭酸 2~5cmのベースブロック多量)

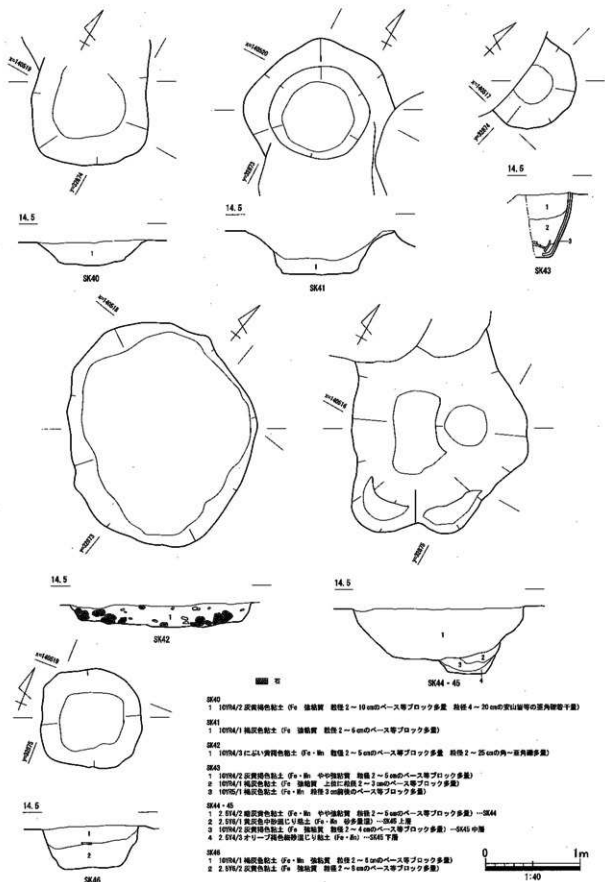


第45図 SK09・10・19~28 平面・土層断面図

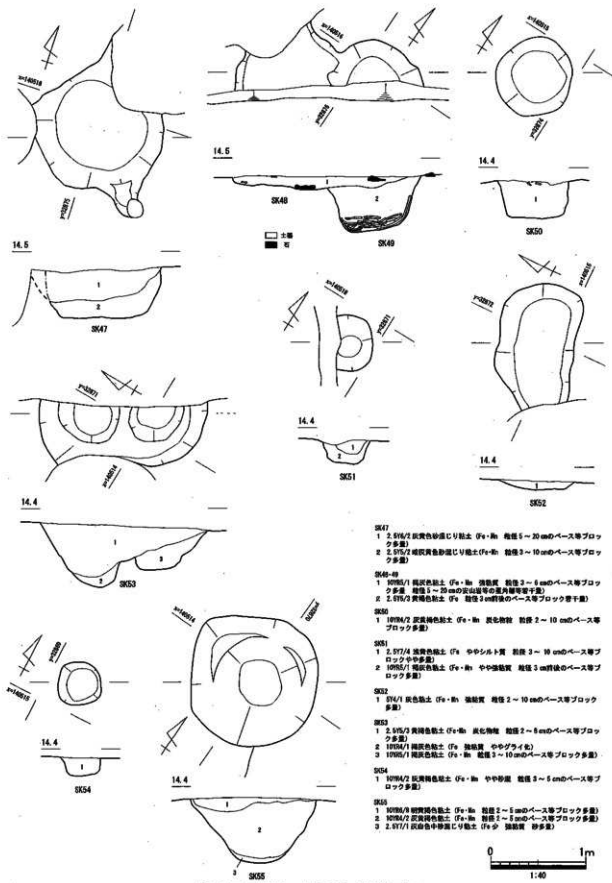


- SK29
1 10%¹/2 灰黄褐色粘土 (F₀・M) 直径 2～5cmのベース等ブロック多量)
- SK30
1 2.5%¹/1 黄灰色粘土 (F₀・M) やや雑物質 直径 3～4cmのベース等ブロック多量)
- SK32
1 2.5%¹/1 黄灰色砂質じり粘土 (F₀・M) 直径 10cm前後のベース等ブロック)
- SK33
1 10%¹/1 灰黄砂質じり粘土 (F₀ 直径 2～5cmのベース等ブロック多量)
2 10%¹/1 黄灰色中砂質じり粘土 (F₀ 砂多量)
3 5%¹/2 灰がりブロック粘土 (F₀・M) 直径 3～5cmのベース等ブロック多量)
- SK34
1 7.5%¹/1 黄灰色粘土 (F₀ 雑物質 炭化物粒 直径 2～3cmのベース等ブロック若干量)
- SK35
1 7.5%¹/1 黄褐色粘土 (F₀ 雑物質 直径 2～5cmのベース等ブロック多量)
- SK36
1 10%¹/1 に近い黄褐色粘土 (F₀・M) やや雑物質 炭化物粒)
2 2.5%¹/2 黄褐色粘土 (F₀・M) 炭化物粒 直径 2～4cmのベース等ブロック多量 直径 3～7cmの小礫若干量)
3 M/ 灰色粘土 (F₀ やや雑物質 グライ化 炭化物粒に直径 2～3cmのベース等ブロック少量)
- SK37
1 2.5%¹/2 緑灰黄色粘土 (F₀ 直径 2～5cmのベース等ブロック多量)
- SK38
1 2.5%¹/2 緑灰黄色粘土 (F₀ 直径 5cm前後のベース等ブロック多量)
2 10%¹/2 灰黄褐色粘土 (F₀・M) やや雑物質 直径 2～3cmのベース等ブロック若干量)
- SK39
1 2.5%¹/2 緑灰黄色粘土 (F₀・M) 雑物質 直径 2～5cmのベース等ブロック多量)

第 46 図 SK29～39 平面・土層断面図



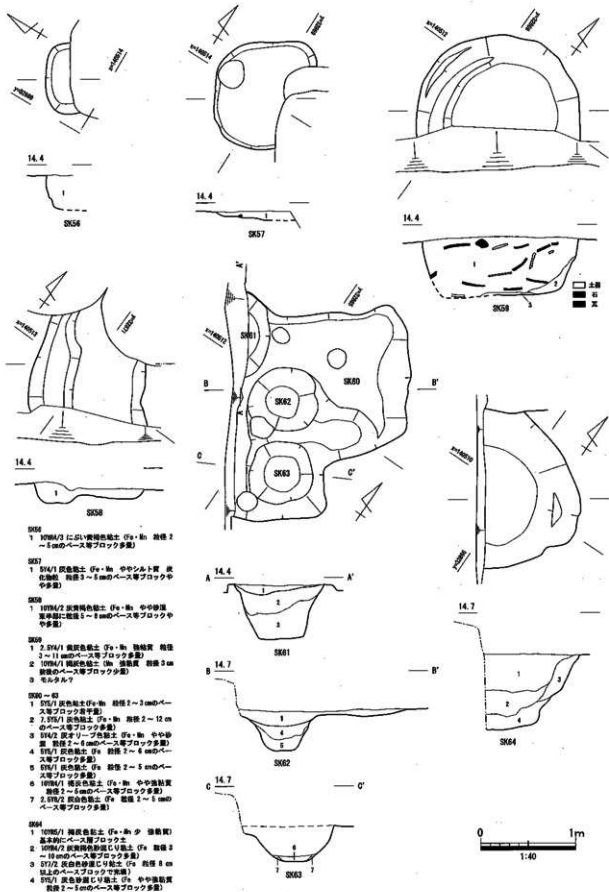
第 47 図 SK40 ~ 46 平面・土層断面図



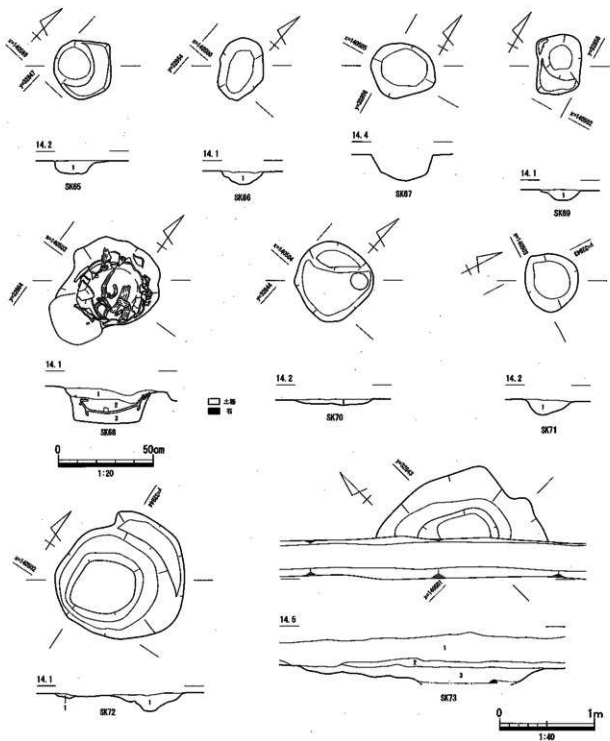
第 48 図 SK47 ~ 55 平面・土層断面図

- SK47
 - 1 2.5% 2 灰黄色砂混じり粘土 (Fe・Mn) 柱径 5 ~ 20 mm のベース等ブロック多量)
 - 2 2.5% 2 褐色赤色砂混じり粘土 (Fe・Mn) 柱径 3 ~ 10 mm のベース等ブロック多量)
- SK48-49
 - 1 2.0% 1 黄灰色粘土 (Fe・Mn) 柱径 2 ~ 8 mm のベース等ブロック多量 柱径 3 ~ 20 mm の灰土混等厚片等多量)
 - 2 2.5% 2 黄褐色粘土 (Fe) 柱径 3 cm 前後のベース等ブロック多量)
- SK50
 - 1 2.0% 2 黄褐色粘土 (Fe・Mn) 灰褐色 柱径 2 ~ 10 mm のベース等ブロック多量)
- SK51
 - 1 2.5% 1 黄褐色粘土 (Fe) 中シルト質 柱径 3 ~ 10 mm のベース等ブロック多量)
 - 2 2.0% 2 褐色粘土 (Fe・Mn) 中や砂混 柱径 3 cm 前後のベース等ブロック多量)
- SK52
 - 1 5% 1 灰色粘土 (Fe・Mn) 柱径 2 ~ 10 mm のベース等ブロック多量)
- SK53
 - 1 2.5% 1 黄褐色粘土 (Fe・Mn) 灰褐色 柱径 2 ~ 8 mm のベース等ブロック多量)
 - 2 2.0% 2 褐色粘土 (Fe) 柱径 3 cm 前後のベース等ブロック多量)
 - 3 2.0% 3 褐色粘土 (Fe・Mn) 柱径 3 ~ 10 mm のベース等ブロック多量)
- SK54
 - 1 2.0% 2 灰黄色粘土 (Fe・Mn) 中や砂混 柱径 3 ~ 5 mm のベース等ブロック多量)
- SK55
 - 1 2.0% 1 黄褐色粘土 (Fe・Mn) 柱径 2 ~ 5 mm のベース等ブロック多量)
 - 2 2.0% 2 灰黄色粘土 (Fe・Mn) 柱径 3 ~ 5 mm のベース等ブロック多量)
 - 3 2.5% 3 灰褐色中砂混じり粘土 (Fe・Mn) 柱径 3 ~ 5 mm 多量)





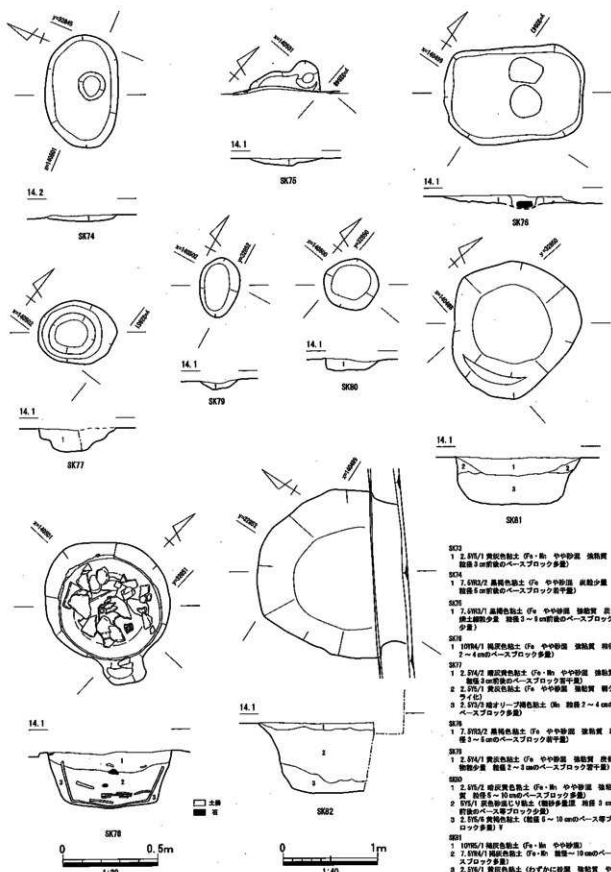
第 49 図 SK56 ~ 64 平面・土層断面図



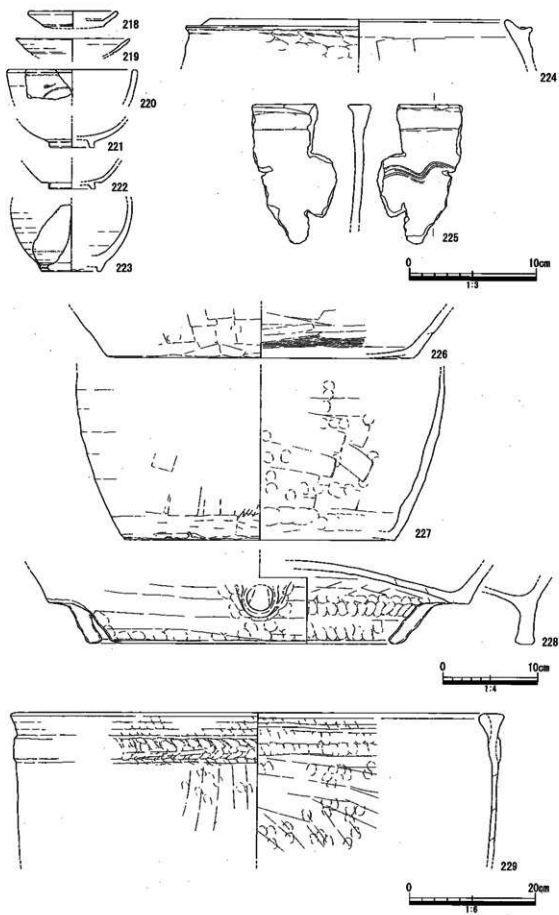
- SK65
1 2.5Y5/2 黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂混 強粘質 灰・粘土粒少量 粘付
2 4cm前後のベースブロック多量)
- SK66
1 10Y7/2 灰黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂混 強粘質 粘層 4~8cmのベ-
ースブロック多量)
- SK67
1 2.5Y5/2 黄褐色粘土 (Fe・Mn) 強粘質 灰化物質・粘土埃等少量 粘付
2 2.5Y7/1 黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂混 中強粘質
3 2.5Y7/1 灰褐色土 (Mn) 粘層 2~4cmの褐色粘土ブロック多量)
- SK68
1 10Y6/2 灰黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂混 灰化物質 粘層 3cm前後の
ベースブロックやや多量)

- SK69
1 10Y6/2 灰黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂混 強粘質 灰・粘土粒少量
粘層 7cm以下のベースブロック多量)
- SK70
1 2.5Y5/2~4/2 黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂混 強粘質 粘層 2~11
cmのベースブロック多量 粘層 10cm前後の層内(角部少量)
- SK71
1 2.5Y5/2 黄褐色粘土 (Fe・Mn) 中砂混 強粘質 粘層 3cm前後のベ-
ースブロック多量)
- SK72
1 基土
2 10Y5/4 に近い黄褐色粘砂混り粘土 (Fe・Mn)
3 5Y4/2 灰グリーン色粘土 (Fe・Mn) 中砂混 強粘質 灰化物質少量
粘層 2~5cmのベースブロックやや多量)

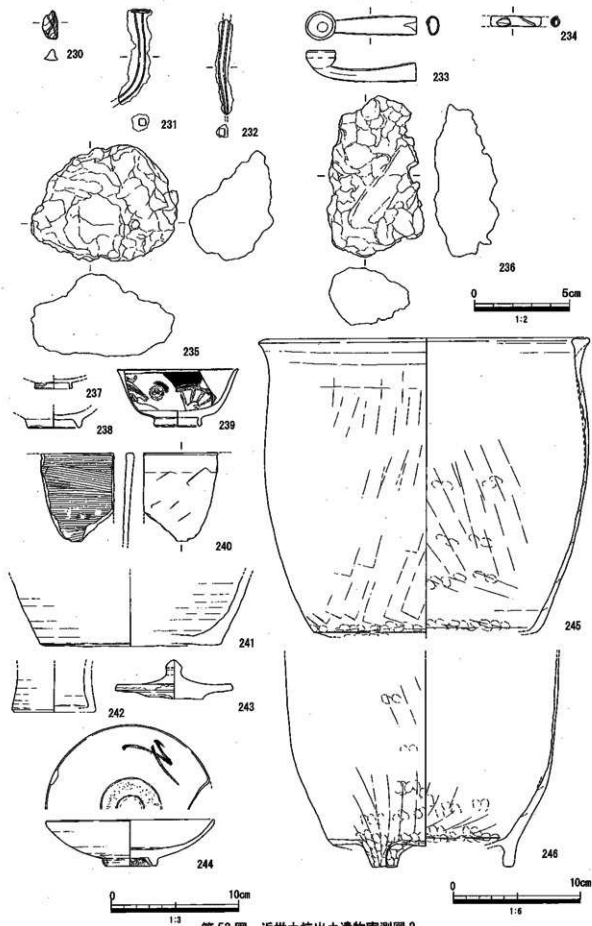
第 50 図 SK65 ~ 73 平面・土層断面図



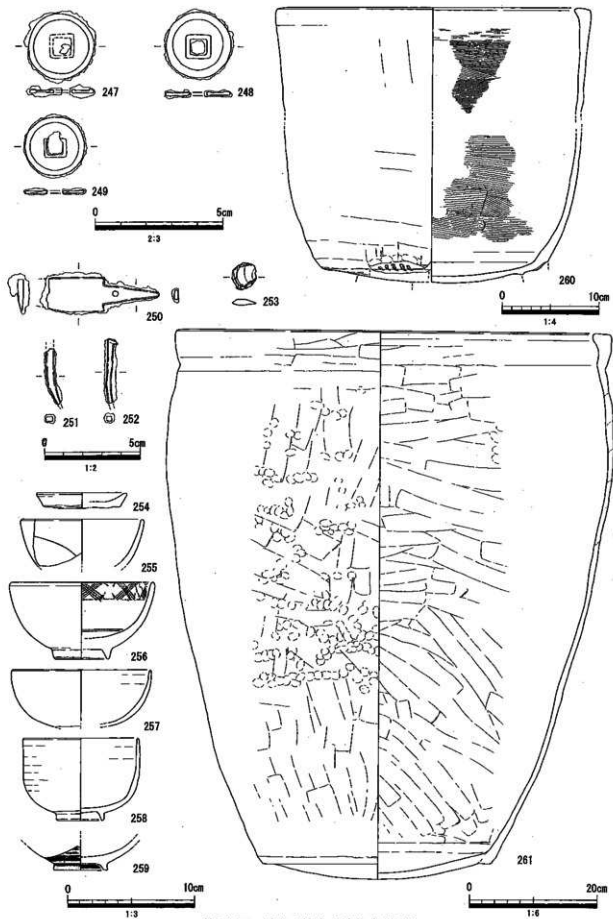
第51図 SK74～82平面・土層断面図



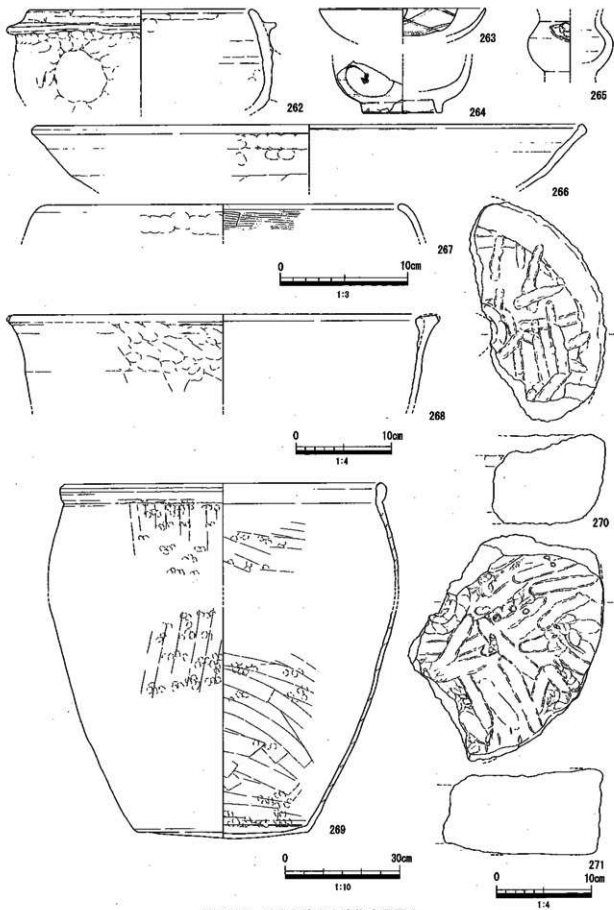
第 52 図 近世土坑出土遺物実測図 1



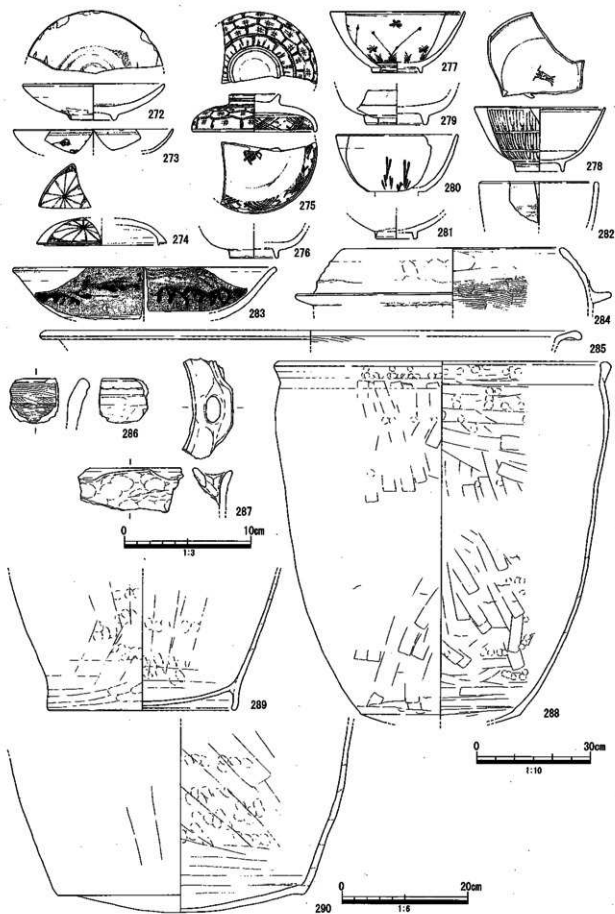
第 53 圖 近世土坑出土遺物実測圖 2



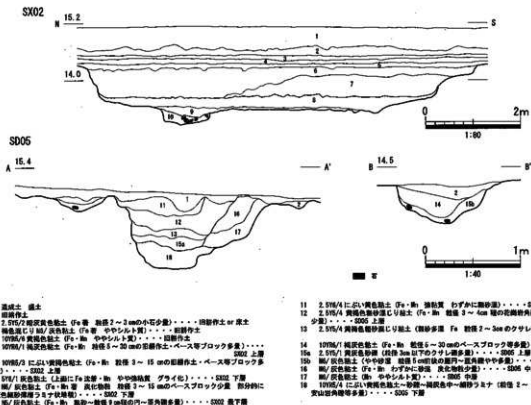
第54图 近世土坑出土遺物実測図3



第 55 图 近世土坑出土遺物実測图 4



第 56 图 近世土坑出土遺物突測圖 5



第 57 図 SX02・SD05 土層断面図

れもベース層のブロック土を多量に含み、人為的な埋め戻し土と判断される。上層 (第 49 図 1・2 層) は下層 (同図 3・4 層) を大きく掘り込んで堆積しており、一度埋め戻した後再度掘り直された可能性を示す。なお上面プランの不安定さは、こうした掘り直しに起因するとみられる。

SK65 C-2 区で検出した。東肩部の底面より 0.12 m 上位に幅 0.16 m ほどのテラス面が付す。埋土は単層 (第 50 図) で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK66 C-2 区で検出した。埋土は単層 (第 50 図) で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK67 C-2 区で検出した。試掘調査時に調査を完了した。

SK68 C-2 区で検出した。切り合い関係から、SB06 より先行する。底面より 3~4 cm ほど浮いて、土師質土器火鉢が正置の状態出土した。埋土は、火鉢上面に堆積し人為的な埋め戻し土と考えられる上層 (第 50 図 1 層) と、火鉢内の堆積土である中層 (同図 2 層)、火鉢の裏込め土である下層 (同図 3 層) に分層した。中層は、遺構機能時の堆積層と考えられ、底面に接して板材などが出土した。また、火鉢上半部は一部しか出土せず、上層埋め戻し時に破砕した可能性が考えられる。

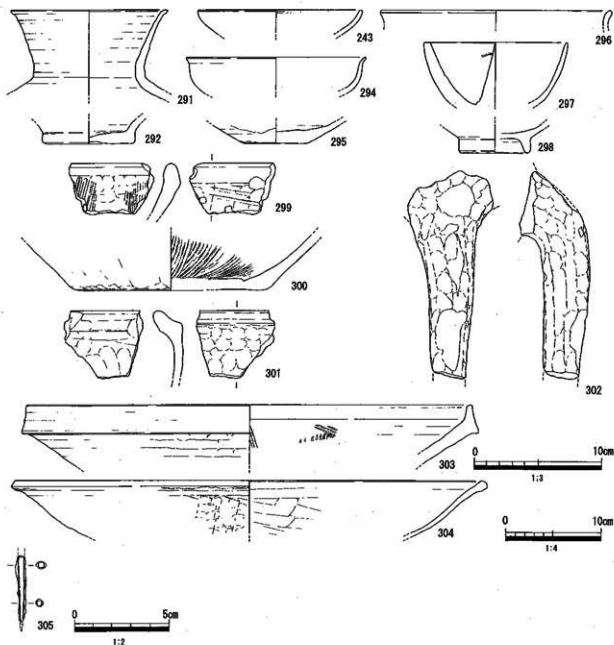
SK69 C-2 区 SB07 桁行中央部で検出されたことから、SB07 より後出すると考えられる。埋土は単層 (第 50 図) で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK70 C-2 区で検出した。埋土は単層 (第 50 図) で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。また底面には、層厚 2~3 mm 程度の炭化物層が全面に出土し、被熱痕にある動物遺存体が出土した。底面に被熱痕は認められず、廃棄されたものと判断された。

SK71 C-2 区で検出した。埋土は単層 (第 50 図) で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK72 C-2 区で検出した。平・断面プランとも不整形である。埋土は単層 (第 50 図) で、ベース層ブロック土を若干量含む。平・断面形状や埋土の状況から、風倒木痕の可能性が考えられる。

SK73 C-2 区で検出した。平面プランは不整形で、底面も中央部がやや盛り上がり、肩部付近が環状にやや深く掘り込まれるなど安定しない。埋土は単層 (第 50 図) で、ベース層ブロック土を多量に含む。



第58図 SX02・SD05 出土遺物実測図

平・断面形状などから、風倒木痕の可能性が考えられる。

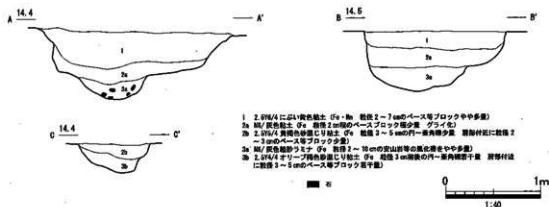
SK74 C-2区で検出した。埋土は単層（第51図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK75 C-2区で検出した。南半部を試掘調査時に壊される。埋土は単層（第51図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK76 C-2区で検出した。切り合い関係から、SB05より先行する。西辺よりSD28が西へ延長する。埋土は単層（第51図）で、自然堆積の可能性が想定される。

SK77 C-2区で検出した。底面より約0.13m上位に、幅0.1～0.12mのテラス面が全周する。埋土は単層（第51図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK78 C-2区で検出した埋壘土坑である。底面にほぼ接して、土師質土器壺が正置の状態で出土した。埋土は、壺上面に堆積し土坑を埋める上層（第51図1層）と、壺内面の堆積土である中層（同図2層）、壺の裏込め土である下層（同図3層）に細分した。上層は、土坑廃棄後の埋め戻し土である。中層は、



第59図 SD06土層断面図

滲水下堆積の可能性があり、遺構機能時の堆積層と考えられる。中層下半より、壘体部の破片や拳大程度の円～歪角礫などが出土したことから、土坑廃棄時に壘上半部を破砕し、一部を壘内に投棄した可能性が考えられる。

SK79・80 C-2区で検出した。いずれも埋土は単層（第51図）で、土坑廃棄後の埋め戻し土である。

SK81 C-2区で検出した。埋土は3層に細分され、上層（第51図1層）と下層（同図3層）は、土坑廃棄時の埋め戻し土である。中層（同図2層）は、ベース層の流入土と考えられ、土坑の廃棄後埋め戻しの段階で、一定の時間差のあったことが想像される。

SK82 C-2区で検出した。埋土は3層に細分され、上層（第51図1層）は、土坑埋没後に生じた窪地を埋める整地土もしくは旧耕作土層である。中層（同図2層）は、土坑廃棄後の埋め戻し土である。下層（同図3層）は、滲水下堆積の可能性が想定できる。また底面周縁部を中心に、ベース層のブロック土の混入が確認され、肩部の崩落により再堆積したものと考えられる。土層の堆積状況から、土坑掘削後一定期間オープンな状況下であったことが想像できる。

溝状遺構

SD05・SX02 A-1区で検出した溝状遺構SD05と、その東端で上井用水との合流部に設けられた出水木の遺構SX02である。SD05は、ほぼ直線状に東西に配され、西端は調査区外に延長する。延長約6.9mを検出した。流路方向はN 54.7° W、底面の標高は、西端で14.32m、SX02との合流部で13.78mとなり、東に流下する。検出面での幅0.76～1.27m、残存深は0.34～1.60mで、断面形状は逆台形状を呈する。埋土は、7層に分層され、上・中・下の3層に大別する。中・下層は、調査区西端の削平面上段のみで確認される。上層（第57図12～15層）は、後述する中・下層を掘り込んで堆積しており、改修後の堆積層と考える。上層上位2層（同図12・13層）は、溝廃棄後の自然堆積層であろう。上層中位層（同図14層）は、後述するSX02上層と一連の堆積層で、溝廃棄後の人為的な埋め戻し土である。上層下位層（同図15層）は、溝機能時の堆積層と考えられ、西端付近で流下水堆積の痕跡を確認した。また東半部の下位層（同図15b層）は、SX02下層と近似し、一連の堆積層と考えられる。削平面下段では、既述したように中・下層が改修により削奪されており、先のSX02下層との関係を踏まえるなら、SX02はSD05の改修に伴い設置された可能性が想定される。中層（同図16・17層）は、穏やかな環境下で堆積した自然堆積層であろう。検出面上面まで堆積していることから、後述する下層堆積後、一定期間溝の使用にプランクがあった可能性も考えられる。下層（同図18層）は、溝機能時の堆積層で、旺盛な水流下の堆積の可能性が想定される。

SX02の東端は調査区外へ延長し、その西半部を検出したにとどまる。北縁はSD05より直線状に穿たれ、南縁はSD05合流部より大きく弧を描くように南にひろがり、平面形は現状で、東西6.1m以上、南北

7.6 m以上の台形ないしは三角形を呈する。南北両壁は直に近く掘り込まれ、底面は概ね平坦で、断面形は概ね逆台形ないし箱形を呈する。この逆台形部分(貯水部)での底面の標高は13.4 m前後にあり、残存深は0.9～1.0 mとなる。また貯水部底面で、南北1.0 m、東西0.5 m以上、深さ0.3 mの平面楕円形を呈する土坑状の掘り込みが確認され、多量の湧水が認められた。東半部は調査区外となるため正確なことは不詳だが、透水路を掘り込んでおり、湧水部とみられる。埋土は、5層に細分される。上層(第57図6・7層)は、粒径最大30 cm程度の耕作土やベース層のブロック土を多量に含み、遺構廃絶後の人為的な埋め戻し土と考えられる。中層(同図8・9層)は、貯水部の底面に堆積した局所的に細砂をラミナ状に混じるグライ化した粘土層で、遺構機能時の滞水下での堆積層であろう。中層上面に直接上層が堆積していることから、遺構の機能停止後直ちに埋め戻されたことが想定される。下層(同図10層)は、湧水部に堆積した土層で、基本的には中層と同じだが、粗砂や拳大程度の礫石が多量に混じる。

遺物は、両遺構合わせてコンテナ1箱程度出土している。図示した以外に、SD05より弥生土器、須恵器、土師質土器足釜・措鉢などの小片が、SX02より須恵器、土師質土器土鍋・足釜、亀山焼甕、瓦質土器、備前焼甕、中国産青磁碗、肥前系陶器灰釉碗などの小片やササカイト剥片が、それぞれ出土した。いずれも中世後半期以前の遺物が多数を占め、当該時期の遺物は極少量で、生産域に隣接する遺構の特徴をよく示している。

SD06 A-2区で検出した。北西-南東方向に配された直線溝で、北西端は調査区内で途切れ、南東端は調査区外へ延長する。溝の西と南側には、削平面Ⅰ・Ⅱの法面が近接し、その方向と溝の流路方向が概ね合致することや後述する埋土の特徴、出土遺物の点から、旧耕作面に伴う用水路と考えられる。延長17.08 mを検出した。流路方向はN 40.1° W、底面の標高は北西端付近で13.95 m、南東端付近で13.40 mとなり、南東に流下する。検出面での幅は1.59～3.27 m、残存深は0.43～0.88 mである。検出面下0.3～0.5 mに幅0.2～0.5 mほどのテラス面があり、テラス面上位の断面形は逆台形ないし箱形を、テラス面下位のそれはU字状ないし皿状を呈する。埋土は、3層に細分され、上・下2層に大別する。上層(第59図1層)は、ベース層のブロック土をやや多量に含み、既述したテラス面上位に堆積することなどから、改修後の堆積層と考えられる。下層(同図2・3層)は、粗砂や小礫をラミナ状に混じる粘土層で、溝機能時の弱水流下での堆積が想定される。

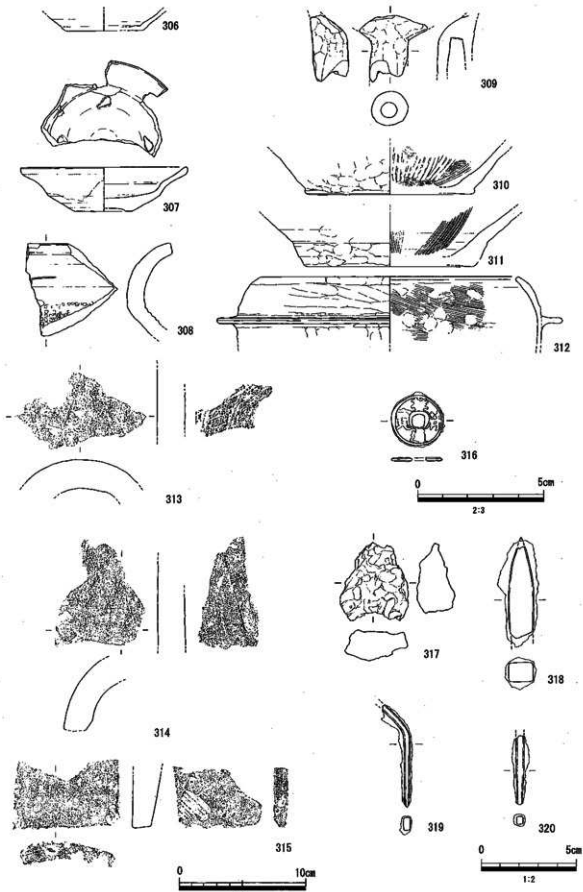
遺物は、コンテナ1箱程度出土した。図示した以外にも、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器小皿・杯・碗・足釜・土鍋・鍋・措鉢・甕・焙烙、西村産須恵質土器碗、亀山焼甕、備前焼措鉢・甕・壺、瓦質土器措鉢、同安窯系青磁碗、肥前系陶器灰釉碗・皿・兵器手碗・刷毛目碗、肥前系磁器染付皿・瓶、瀬戸美濃系陶器天目碗・鉢、焼土塊などの小片、ササカイト剥片がある。本溝も、中世後半期以前の遺物が多数を占める。出土した遺物より、18世紀後半以降の埋没の可能性が想定される。

SD13・14・15・16 いずれもB-1区北部、棚田状に削平された削平面の中位段において検出した、概ね東西に走行する小溝群である。SD13のみ東端が調査区外へ延長し、SD14～16は調査区内で終結するか攪乱坑により壊され、全形は判然としない。

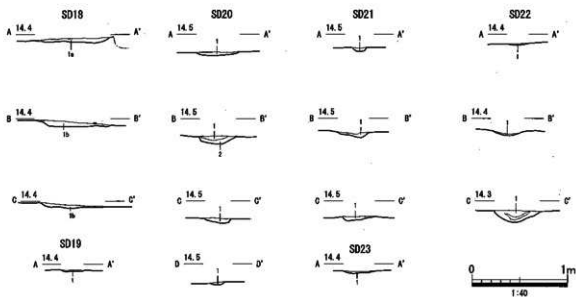
SD13は、旧地形の尾根筋の方向に規制され、緩やかに弧を描くように検出された。流路方向は、東半部でN 67.3° E、西半部でN 71.3° Eとなる。幅0.23～0.35 m、残存深0.17 m、断面形は箱形ないしU字状を呈する。底面の標高は、西端で15.57 m、東端で15.28 mを測り、底面の高低差から東へ流下する。

SD14も緩やかに弧を描き、流路方向はN 59° E前後となる。幅0.25 m前後、残存深0.05 m前後、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、西端で15.55 m、東端で15.47 mを測り、底面の高低差から東へ流下する。

SD15はわずかに蛇行して、流路方向N 55° E前後となる。幅0.34 m以上、残存深0.05 m前後、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、西端で15.64 m、東端で15.53 mを測り、底面の高低差から



第 60 图 SD06 出土遺物実測図



SD18
1a 2.015/2 緑灰色粘土 (F・M) 中強粘質 断面2～5mmのベース等ブロック土多量)
1b 100%/2 灰褐色砂質じり粘土 (F・M) 粘粒3～4mmのベース等ブロック土多量)

SD19
1 2.015/1 黄灰色砂質じり粘土 (F・M) 灰化粘粒 断面3～4mmのベース等ブロック土中多量)

SD20
1 2.018/1 緑灰色粘土 (F・M) 中強粘質 ベース層埋れ込み地層)
2 2.014/1 黄灰色砂質じり粘土 (F・M) 砂中多量)

SD21
1 2.014/7 緑灰色砂質じり粘土 (F・M) 粘粒2～7mmのベース等ブロック土多量)

SD22
1 300%/4 黄灰色砂質じり粘土 (F・M) 粘粒3～5mmのベース等ブロック土中多量 中粒に灰色中砂レンズ状地層)

SD23
1 2.017/1 黄灰色砂質じり粘土 (F・M) 粘粒4～5mmのベース等ブロック土多量)

第61図 SD18～23土層断面図

東へ流下する。

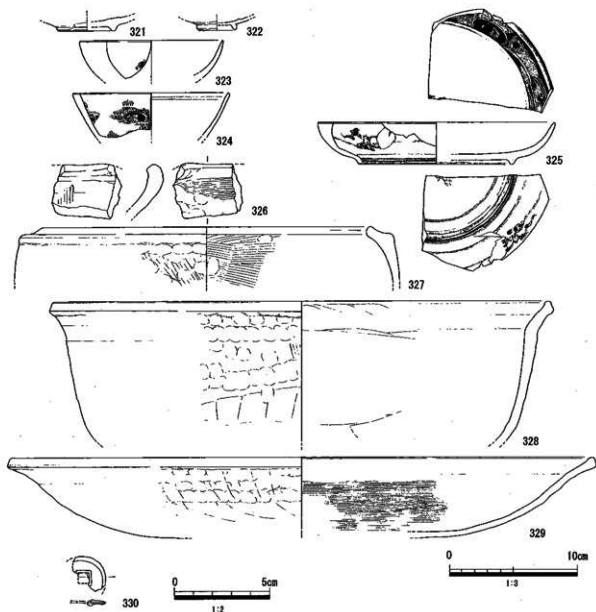
SD16 もわずかに蛇行し、流路方向 52° E 前後となる。幅 $0.39 \sim 0.55$ m、残存深 $0.08 \sim 0.15$ m、断面形は皿状ないしU字状を呈する。底面の標高は、東端で 15.52 m、西端で 15.34 m を測り、底面の高低差から西へ流下する。

遺物は、SD13 より土師質土器、瓦質土器摺鉢、輸入青磁香炉、肥前系陶器砂目皿、丸瓦、平瓦などの小片が、SD14 より土師質土器鍋などの小片が、SD15 より須恵器、土師質土器、備前焼、亀山焼などの小片が、SD16 より土師質土器、瀬戸・美濃系陶胎染付碗、瓦などの小片がそれぞれ少量出土したのみである。溝の規模や流路方向、削平面との位置関係などから、調査区周辺の耕地化に伴う排水溝の可能性を想定したい。

SD18 C-1 区で検出した。逆L字状にC-1 区近世屋敷地縁辺を区画するように配されるが、西・南両端は調査区内で途切れ、屋敷地全体の区画を意図した可能性に乏しく、その性格については特定しがたい。南北溝で延長 1.93 m、東西溝で延長 3.66 m をそれぞれ確認した。東西溝の幅 0.74 m、残存深 0.04 m、底面の標高 14.31 m、南北溝の幅 $0.67 \sim 0.78$ m、残存深 $0.03 \sim 0.05$ m、底面の標高 14.32 m 前後、流路方向 $N 30.43^\circ W$ を測る。溝の断面形は浅い皿状を呈し、流下方向については確認された延長が短いこともあり、判断できない。埋土は単層 (第61図) で、全面においてベース層のブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、須恵器、土師質土器小皿・摺鉢・焙烙・大甕、肥前系染付筒形碗、瀬戸・美濃系腰鍬釉碗、平瓦などの細片が少量出土した。18 世紀後半以降の埋没の可能性が考えられる。

SD19 C-1 区で検出した。その規模や位置関係から、建物遺構に付随する雨落ち溝的な性格を有するとみられるが、検出延長が 1.13 m と短く、性格について断定するまでには至らない。幅 0.23 m、残存深 0.01 m、流路方向 $44.73^\circ E$ 、底面の標高 14.33 m 前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層 (第61図) で、ベース層のブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。



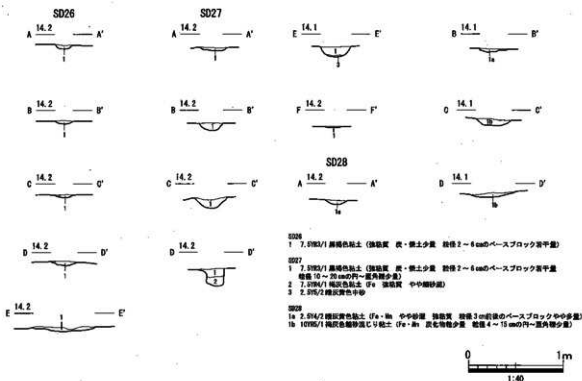
第 62 図 SD13・22・23・26・27・29 出土遺物実測図

遺物は、土師質土器細片が 1 点出土したのみである。

SD20 C-1 区で検出した。調査区西端部で、不整な T 字形を呈して検出され、西端は調査区外へ延長する。幅 0.15 ~ 0.43 m、残存深 0.03 ~ 0.09 m、断面形は皿状を呈する。底面の標高は西端部で 14.21 m、東西溝と南北溝との合流部で 14.25 m、南北溝南端で 14.29 m、同北端で 14.28 m と、溝底面の高低差から、東西溝西端から調査区外へ排水した可能性が高いと判断された。埋土は 1 ~ 2 層に分層され、とくに東西溝西半部の下層に砂の混入が顕著に認められ、弱い流水状況下での堆積が想定される(第 61 図) 点は、先に想定した流下方向と矛盾しない。

遺物は、土師質土器培培などの細片が数点出土したのみである。

SD21 C-1 区で検出した。ほぼ直線状に南北に配され、南端は調査区外へ延長し、北端は攪乱坑により壊されるが、攪乱坑以北で延長部分は確認されず、ほぼ途切れるものと判断される。延長 4.97 m を検出した。北端付近で、小溝が東へ分岐するが、検出延長が短く、詳細はわからない。幅 0.14 ~ 0.33 m、残存深 0.03 ~ 0.05 m、流路方向 N 35.22° W、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は北端で 14.32 m、



第 63 図 SD26 ~ 28 土層断面図

南端で 14.30 m を測り、底面の標高差から南へ流下するとみられる。溝の規模や流下方向から、近世屋敷地に生じた浮水を上井用水へ排水する排水路と考えられる。埋土は単層 (第 61 図) で、全面においてベース層のブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、土師質土器焙烙、丸瓦、焼土塊などの小片が少量出土した。

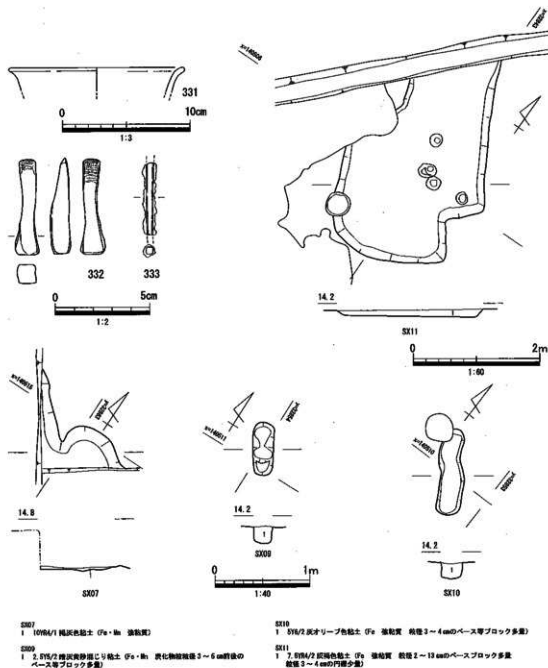
SD22 C-1 区で検出した。ほぼ直線状に配され、北端は試掘トレンチにより攪乱され、トレンチ北側では検出されなかったことから、トレンチ内で収束するとみられる。南端は調査区外へ延長する。また、トレンチ際で SD23 が分岐して西へ延びる。延長 4.24 m を検出した。幅 0.21 ~ 0.50 m、残存深 0.01 ~ 0.11 m、流路方向 N 33.09° W、断面形は皿状を呈する。底面の標高は北端で 14.30 m、南端で 14.08 m を測り、底面の標高差から南へ流下するとみられる。溝の規模や流下方向から、近世屋敷地に生じた浮水を上井用水へ排水する排水路と考えられる。埋土は単層 (第 61 図)。ベース層ブロック土の混入が顕著で、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。南端付近では、下位に中砂の薄いレンズ状堆積が認められ、埋没までの一時期に、流水環境にあったことが想像される。

遺物は、土師質土器足盆・播鉢・焙烙・大甕、肥前系青磁染付丸碗蓋、京・信楽系陶器丸碗、焼土塊などの細片が極少量出土した。18 世紀後半 ~ 19 世紀初頭頃の埋没の可能性が考えられる。

SD23 C-1 区で検出した。SD22 より西に分岐し、2.4 m ほど延長して途切れる。周辺には柱穴が配され、建物遺構は復元できなかったが、溝の規模などから建物に付随する雨落ち溝的な性格が想定できる。幅 0.35 m 前後、残存深 0.02 m 程度、流路方向 N 60.34° E、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は 14.30 m 前後、SD22 へわずかに傾斜する。埋土は単層 (第 61 図) で SD22 と共通し、同時期に埋め戻されたと考えられる。

遺物は、土師質土器土鍋などの細片が 10 点程度と、動物遺存体 1 点が出土したのみである。

SD26 C-2 区で検出した。断続的に東西に配され、両端は調査区内で途切れる。近世屋敷地内を区分する、区画溝としての性格が想定される。延長 13.11 m を検出した。わずかに屈曲するものの流路方向 N 58.83° E を示す。幅は西端部の不整に膨らんだ部分を除くと、概ね 0.16 ~ 0.20 m、残存深 0.03 ~ 0.04



第 64 図 SX07・09・10・11 出土遺物実測図・平面・土層断面図

m、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、西端部で 14.02 m、東端部で 14.06 m とわずかに西に傾斜する。埋土は単層（第 63 図）で、ベース層ブロック土を若干量含むが、人為的な埋戻しによるものかは断定できなかった。

遺物は、土師質土器小皿・播鉢などの細片が数点出土したのみである。

SD27 C-2 区で検出した。掘立柱建物 SB05 の北～東面を逆 L 字状に配され、東西溝西端は調査区内で途切れ、南北溝南端は調査区外へ延長する。SB05 と整った位置関係にあり、SB05 の雨落ち溝と想定される。また東西溝が SD26 とほぼ併行すること、両溝の規模や底面の標高値、埋土も近似することから、両溝が同時並存していた可能性は高いと判断される。東西溝の延長 3.66 m、南北溝の延長 9.19 m を検出した。東西溝は、幅 0.24 ~ 0.26 m、残存深 0.04 ~ 0.08 m、流路方向 N 56.86° E、断面形は皿状を、

南北溝は、幅 0.28～0.34 m、残存深 0.10～0.18 m、流路方向 N 33.52° W、断面形は概ね皿状を呈するが、中央部付近で一部箱形を呈する。底面の標高は、東西溝西端で 14.02 m、東西溝と南北溝の合流部で 13.97 m、南北溝南端で 13.85 m を測り、底面の標高差から南へ流下し、上井用水へ排水していたと考えられる。埋土は 1～3 層に細分された (第 63 図)。上層は SD26 埋土と酷似する。下位層は南北溝南半部にのみ中砂の薄層が溝底に堆積し、溝機能時の水流下堆積の可能性が想定された。

遺物は、須恵器、土師質土器鍋・焙烙・大甕、瓦器、肥前系染付小碗・小広東碗・皿、瀬戸・美濃系腰鎗軸碗、丸瓦、平瓦などの小片が出土した。18 世紀末以降の埋没の可能性が考えられる。

性格不明遺構

SX07 C-1 区で検出した落ち込みである。南半部は試掘トレンチによって裏され、西半部は調査区外へ延長する。底面は安定せず起伏が顕著に認められる。埋土は単層 (第 64 図) で、自然堆積の可能性が考えられる。

遺物は、出土していない。

SX09 C-2 区で検出した。南端部はやや浅く 2 段に掘り込まれる。埋土は単層 (第 64 図) で、人為的な埋め戻し土の可能性はある。

遺物は、土師質土器の細片が 1 点出土したのみである。

SX10 C-2 区で検出した。埋土は単層 (第 64 図) で、人為的な埋め戻し土の可能性はある。

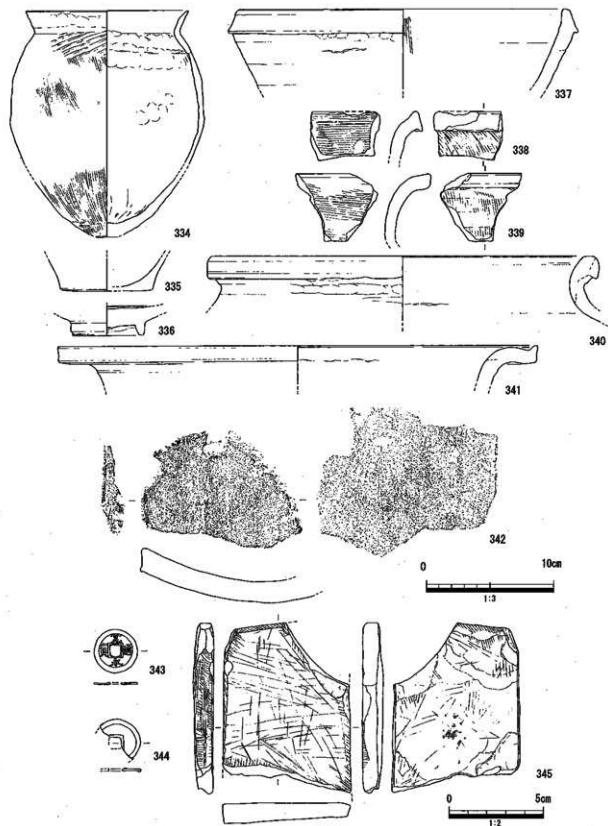
遺物は、出土していない。

SX11 C-2 区で検出した浅い落ち込みである。北端部は調査区外へ延長し、また西端部の一部を攪乱坑に裏される。平面プランから複数の遺構の重複の可能性を考えたが、埋土を分層することはできず、底面もほぼ平坦であったことから、単一の遺構と判断した。埋土は単層 (第 64 図) で、人為的な埋め戻し土の可能性はある。

遺物は、図示した以外に、土師質土器や肥前系磁器染付碗などの細片が極少量出土したのみである。

註

- 1 SD08 出土の古瀬戸陶器 (122) について、藤沢良祐氏より瓶子と壺の少なくとも 2 個体であるのご指摘を頂戴した。図版作成後のことであつたので、残念ながら本報告での訂正はできなかった。この土器については、機会を改めて訂正・報告したい。



第 65 图 包含层等出土物实测图

| 遺構名 | 調査区 | 平面形 | 東西長 (m) | 南北長 (m) | 断面形 | 埋存深 (m) | 底面の積厚 (m) | 出土遺物 | 年代 | 備考 |
|------|------|-----------|---------|---------|------|---------|-----------|--|---------------|-------------------------|
| SK67 | C-2区 | 隅丸方形 | 0.60 | 0.65 | U字状 | 0.28 | 13.68 | 土師質土器、肥前系陶器片断? | 18世紀~ | 説明なし調査済 |
| SK68 | C-2区 | 逆台形 | 0.46 | 0.48 | 逆台形 | 0.19 | 13.62 | 平層;土師質土器小片 | 不明 | 埋藏土坑 |
| SK69 | C-2区 | 隅丸方形 | 0.42 | 0.50 | U字状 | 0.11 | 13.69 | 土師質土器 | 不明 | |
| SK70 | C-2区 | 隅丸方形 | 0.81 | 0.82 | 皿状 | 0.05 | 13.59 | 土師質土器、肥前系陶器、平瓦 | 不明 | |
| SK71 | C-2区 | 隅丸方形 | 0.48 | 0.59 | U字状 | 0.15 | 13.69 | 土師質土器 | 不明 | |
| SK72 | C-2区 | 逆台形 | 1.35 | 1.32 | 不定形 | 0.18 | 13.64 | 土師質土器片、大甕?肥前系陶器片、陶器類彩色目録、平瓦 | 16世紀前半~19世紀前半 | |
| SK73 | C-2区 | 瓦葺板形状 | 0.73以上 | 1.77以上 | 不定形 | 0.16 | 13.86 | 土師質土器土塊、砂土 | 近世 | |
| SK74 | C-2区 | 長槽形状 | 1.20 | 0.75 | 皿状 | 0.06 | 13.87 | 土師質土器、赤土塊 | 不明 | |
| SK75 | C-2区 | 隅丸方形小 | 0.73以上 | 0.19以上 | 皿状 | 0.08 | 13.94 | 赤土塊 | 不明 | |
| SK76 | C-2区 | 隅丸方形 | 1.47 | 0.99 | 皿状 | 0.11 | 13.90 | 土師質土器小皿、水鉢?燧岩、肥前系陶器彩色目録、京・信濃系陶器小砂礫、瓦片、赤土塊 | 不明 | 説明なし調査済 |
| SK77 | C-2区 | 長槽形状 | 0.90 | 0.95 | 二段櫓形 | 0.23 | 13.74 | 土師質土器、燧岩片、肥前系陶器片断、平瓦 | 埋蔵了 | |
| SK78 | C-2区 | 隅丸方形 | 0.65 | 0.65 | 逆台形 | 0.26 | 13.68 | 中層;土師質土器大甕、肥前系陶器小皿、京・信濃系陶器丸瓶、丸瓦、燧岩片、土師質土器小片 | 18世紀前半~19世紀前半 | |
| SK79 | C-2区 | 長槽形状 | 0.40 | 0.62 | 皿状 | 0.07 | 13.91 | 土師質土器、不明砂土 | 不明 | |
| SK80 | C-2区 | 隅形 | 0.54 | 0.53 | 逆台形 | 0.11 | 13.69 | 土師質土器、不明砂土 | 不明 | |
| SK81 | C-2区 | 全く異なる隅丸方形 | 1.30 | 1.43 | 逆台形 | 0.18 | 13.70 | 中層;土師質土器、肥前系陶器片断、下層;土師質土器 | 不明 | |
| SK82 | C-2区 | 隅形小 | 1.75 | 1.54以上 | 逆台形 | 0.73 | 13.26 | 上層;土師質土器、肥前系陶器片断、中層;土師質土器小皿、土師、肥前系陶器片、燧岩片?土師質土器 | 17世紀前半~18世紀前半 | |
| SK92 | A-1区 | 台形小 | 6.1以上 | 7.6以上 | 逆台形 | 0.9~1.0 | 13.4 | 上層;土師質土器片、肥前系陶器片、赤土塊、燧岩片、中層;土師質土器片、赤土塊、肥前系陶器片、京・信濃系陶器丸瓶、土師質土器、輸入青磁皿、輸入青磁皿、肥前系陶器片、赤土塊、下層;土師質土器、京・信濃系陶器丸瓶、肥前系陶器片、平瓦、下層;土師質土器 | 近代 | 古代~当世の層と見做す 近代一定層とする |
| SK99 | C-2区 | 長槽形状 | 0.20 | 0.54 | 燧岩 | 0.18 | 13.91 | 土師質土器 | 不明 | |
| SK10 | C-2区 | 逆台形 | 0.24 | 0.69 | 燧岩 | 0.18 | 13.92 | 燧岩 | 不明 | |
| SK11 | C-2区 | 逆台形 | 2.29 | 3.03以上 | 逆台形 | 0.14 | 13.99 | 土師質土器、輸入青磁皿、肥前系陶器 | 18世紀前半~ | |
| SK12 | C-2区 | 不定形 | 0.69以上 | 0.81以上 | 皿状 | 0.05 | 13.89 | 土師質土器、燧岩 | 不明 | |

第3表 近世土坑・性格不明遺構一覽表3

第IV章 自然科学的分析

第1節 東坂元秋常遺跡に係る花粉分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。ここでは、東坂元秋常遺跡において花粉分析を行い、古環境（植生・水域環境）の変遷について検討する。

2. 試料

分析試料は、A-1区SD01より採取された試料1（最上層・第14図A断面4a層）、試料2（上層・同図A断面6a層）の2点、A-2区SD01より採取された試料3（中層・第15図G断面10a層）、試料4（中層・同図G断面12a層）、試料5（下層・同図G断面15a層）の3点、A-1区SD04より採取された試料6（中層・第14図A断面28a層）1点、A-2区SD02より採取された試料7（中層・第15図F断面20層）1点、B-1区SD01より採取された試料8（上層・第15図H断面7B層）、試料9（中層・同図H断面12b層）、試料10（下層・同図H断面15b層）の3点の計10点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルトマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。

4. 結果

(1) 分類群

産出した分類群は、樹木花粉17、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉10、シダ植物孢子2形

態の計33である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が100個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを作成した(図1)。主要な分類群は顕微鏡写真に示す。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、モクセイ科、スイカズラ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

[草本花粉]

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、ギシギシ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、アカネ科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) A-1区SD01(試料1(最上層)、試料2(上層))・(図1)

いずれの試料も花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

2) A-2区SD01(試料3(中層)、試料4(中層)、試料5(下層))・(図1)

いずれの試料も花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

3) A-1区SD04(試料6(中層))・(図1)

花粉密度が極めて低く、検出されない。

4) A-2区SD02(試料7(中層))・(図1)

花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

5) B-1区SD01(試料8(上層)、試料9(中層)、試料10(下層))・(図1)

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。試料10(下層)では、花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。試料9(中層)では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属を主に、モクセイ科、ツガ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、ニレ属-ケヤキなどが出現する。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属などが出現する。試料8(上層)では、樹木花粉の占める割合が高くなり、コナラ属コナラ亜属が優占する。

5. 考察とまとめ

A-1区SD01の最上層、上層、A-2区SD01の中層、下層、A-1区SD04の中層、A-2区SD02の中層からは花粉がほとんど検出されない。水流の分別作用により花粉などの微遺体が堆積しなかったか、乾湿を繰り返す堆積環境により花粉が分解されたことなどが考えられる。

B-1区SD01の上層と中層では、樹木花粉が草本花粉より多い。コナラ属コナラ亜属が優占することから、周囲はコナラやクヌギなどの二次林が分布していたと推定される。他に、モクセイ科、クマシデ属-ア

サダ、ハシバミ属、ツガ属、カバノキ属、ニレ属-ケヤキ等の樹木花粉がそれぞれ5%前後を占めている。モクセイ科は中層の時期に近隣に生育していたと思われる。草本ではイネ科、ヨモギ属が生育し、周囲はやや乾燥した環境であったと考えられる。

なお、栽培種に由来する花粉は確認できない。イネ科は栽培要素である可能性があるが、イネ属以外の分類群は花粉分析では同定が困難であり言及できない。

参考文献

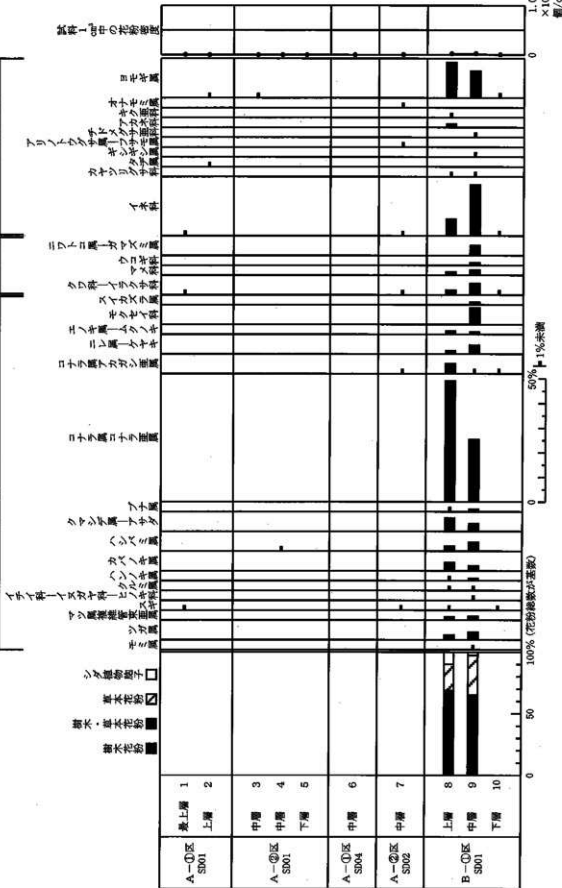
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p. 249-262。
 高倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
 中村純 (1973) 花粉分析。古今書院、p. 82-110。
 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究、13、p. 187-193。
 中村純 (1977) 播作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p. 21-30。
 中村純 (1980) 日本産花粉の標本。大阪自然科学博物館収蔵目録第13集、91p。

| 分類群 | 学名 | 和名 | A-①K SD01 | | A-②K SD01 | | A-③K SD04 | | A-④K SD02 | | B-① SD01 | |
|--|---------------------------|-----|--------------|-----|--------------|-----|--------------|-----|--------------|----|-------------|-----|
| | | | 上層 | 下層 | 中層 | 下層 | 中層 | 上層 | 中層 | 下層 | | |
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | | | | | | | | | | | |
| <i>Abies</i> | モミ属 | | | | | | | | | | | 1 |
| <i>Tsuga</i> | ツガ属 | | | | | | | | | | 3 | 6 |
| <i>Pinus subgen. Diploxylon</i> | マツ属短葉松亜属 | | | | | | | | | | 2 | 3 |
| <i>Cryptomeria japonica</i> | スギ | 3 | | | | | | | 2 | 1 | | 1 |
| <i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i> | イチイ科-イヌゲヤ科-ヒノキ科 | | | | | | | | | | | 1 |
| <i>Juglans</i> | クルミ属 | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| <i>Alnus</i> | ハンノキ属 | | | | | | | | | | 1 | 2 |
| <i>Betula</i> | カバノキ属 | | | | | | | | | | 6 | 4 |
| <i>Corylus</i> | ヘシバミ属 | | | | | | | | | | 3 | 7 |
| <i>Corylus-Gaiyrya japonica</i> | クマシゲ属-アサゲ | | | | | | | | | | 8 | 6 |
| <i>Fagus</i> | ブナ属 | | | | | | | | | | 1 | 2 |
| <i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i> | コナラ属コナラ属 | | | | | | | | | | 72 | 49 |
| <i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i> | コナラ属アカガシ属 | | | | | | | | 1 | | 6 | 1 |
| <i>Ulmus-Zelkova serrata</i> | ニレ属-ケヤキ | | | | | | | | | | 3 | 7 |
| <i>Celtis-Aphananthe aspera</i> | エノキ属-ムクノキ | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| <i>Glucosae</i> | モクセイ科 | | | | | | | | | | | 13 |
| <i>Lonicera</i> | スイカズラ属 | | | | | | | | | | | 2 |
| Arboreal + Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | | | | | | | | | | | |
| <i>Moraceae-Urticaceae</i> | タケノ科-イラクサ科 | 1 | | | | | | | | 1 | 3 | 9 |
| <i>Leguminosae</i> | マメ科 | | | | | | | | | | 2 | 4 |
| <i>Araliaceae</i> | ウコギ科 | | | | | | | | | | | 2 |
| <i>Sambucus-Viburnum</i> | ウツロコ属-ガマズミ属 | | | | | | | | | | | 8 |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | | | | | | | | | | | |
| <i>Gramineae</i> | イネ科 | 2 | | | | | | | 2 | | 10 | 40 |
| <i>Cyperaceae</i> | カキツリグサ科 | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| <i>Polygonum</i> | タデ属 | | 1 | | | | | | | | | |
| <i>Rumex</i> | ギンギン属 | | | | | | | | | | | 1 |
| <i>Haloxalis-Myriophyllum</i> | アリノトウグサ属-フタモ属 | | | | | | | | 1 | | | |
| <i>Hydrocotyloideae</i> | チヂミグサ属科 | | | | | | | | | | | 1 |
| <i>Rubiaceae</i> | アカネ科 | | | | | | | | | | 2 | |
| <i>Asteroidae</i> | キク科 | | | | | | | | | | 1 | |
| <i>Xanthium</i> | オナモミ属 | | | | | | | | 1 | | | |
| <i>Artemisia</i> | ヨモギ属 | | | 1 | 1 | | | | | | 21 | 21 |
| Fern spore | シダ植物孢子 | | | | | | | | | | | |
| Monolete type spore | 単条溝孢子 | 3 | 1 | | | | | | 3 | | 8 | |
| Trilete type spore | 三条溝孢子 | | | | 1 | | | | | | 8 | 5 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | 3 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | 3 | | 107 | 107 |
| Arboreal + Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5 | | 23 | 1 |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | 2 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 4 | 35 | | 54 | 3 |
| Total pollen | 花粉総数 | 6 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 8 | 147 | | 194 | 6 |
| Pollen frequency of 1cm ² | 試料1cm ² 中の花粉頻度 | 5.6 | 1.2 | 0.6 | 0.6 | 0.0 | 0.0 | 5.4 | 2.3 | | 2.6 | 4.2 |

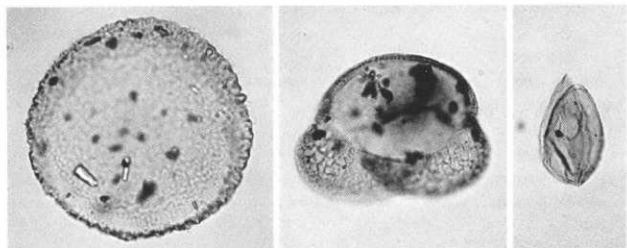
第4表 東坂元秋常遺跡における花粉分析結果

樹木・草本花粉

草本花粉



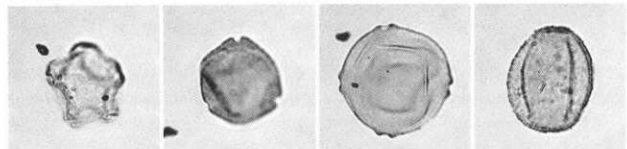
第 66 図 東坂元教常遺跡における花粉ダイアグラム



1 ツガ属

2 マツ属複維管束亜属

3 スギ

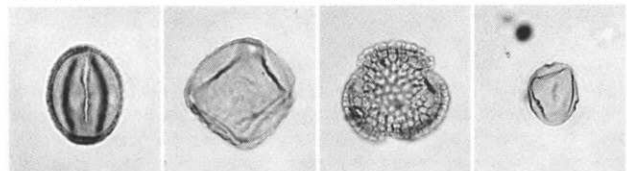


4 ハンノキ属

5 ハシバミ属

6 クマシデ属-アサダ

7 コナラ属コナラ亜属

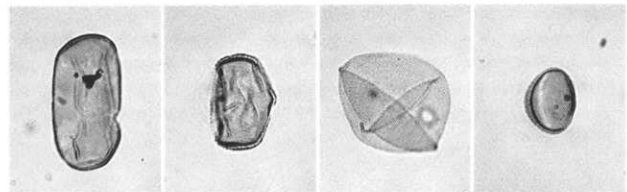


8 コナラ属アカガシ亜属

9 ニレ属-ケヤキ

10 モクセイ科

11 クワ科-イラクサ科



12 マメ科

13 ウコギ科

14 イネ科

15 ヨモギ属

— 10 μm

第2節 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

東坂元秋常遺跡は、香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常 135-1 (北緯 34° 16' 13"、東経 133° 51' 18") に所在する。

(2) 遺跡の立地

古代末頃に形成された崖 (完新世段丘) 面上に立地する。遺跡南東を大東川が北東流し、北には飯野山が所在する。遺跡はその間のわずかな平地に立地する。

(3) 測定の意義

遺物量の少ない遺構の年代決定の参考資料としたい。

(4) 測定対象試料

測定対象は、SD01 上層 (第 14 図 B 断面 7a 層) から出土した木炭 (No. 1: IAAA-70653)、SD04 下層 (第 15 図 F 断面 29b 層) から出土した木炭 (No. 2: IAAA-70654)、SD02 上層 (同図 F 断面 19 層) から出土した木炭 (No. 3: IAAA-70655)、包含層 1 (第 7 図① 53 層) の土壌 (No. 4: IAAA-70656)、包含層 2 (同図① 55 層) の土壌 (No. 5: IAAA-70657)、包含層 3 (第 9 図④ 5 層) の土壌 (No. 6: IAAA-70658)、合計 6 点である。

(5) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001 ~ 1N の水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°C で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。なお、土壌試料には、1N の塩酸 (80°C) による酸処理のみを実施した。
- 3) 試料を酸化銅 1g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°C で 30 分、850°C で 2 時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(6) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (Hox II)

を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も同時に行う。

(7) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る ^{14}C 年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰;パーミル)で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(14\text{AS} - 14\text{AR}) / 14\text{AR}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(13\text{AS} - 13\text{APDB}) / 13\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、14AS: 試料炭素の ^{14}C 濃度: ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)Sまたは($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)S

14AR: 標準現代炭素の ^{14}C 濃度: ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)Rまたは($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$)R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($13\text{AS} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの ^{14}C 濃度(14AN)に換算した上で計算した値である。(1)式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$14\text{AN} = 14\text{AS} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (14\text{ASとして}^{14}\text{C}/^{12}\text{C}\text{を使用するとき})$$

または

$$= 14\text{AS} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (14\text{ASとして}^{14}\text{C}/^{13}\text{C}\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(14\text{AN} - 14\text{AR}) / 14\text{AR}] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon)がよく使わ

れており、 $\Delta 14C$ との関係は次のようになる。

$$\Delta 14C = (pMC / 100 - 1) \times 1000 (\%)$$

$$pMC = \Delta 14C / 10 + 100 (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta 14C$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$\begin{aligned} T &= -8033 \times \ln [(\Delta 14C / 1000) + 1] \\ &= -8033 \times \ln (pMC / 100) \end{aligned}$$

5) 14C年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 校正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCal3.10校正プログラム (Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

(8) 測定結果

SD01上層から出土した木炭 (No.1 : IAAA-70653) の14C年代が 1270 ± 30 yrBP、SD04下層から出土した木炭 (No.2 : IAAA-70654) の14C年代が 230 ± 30 yrBP、SD02上層から出土した木炭 (No.3 : IAAA-70655) の14C年代が 1150 ± 30 yrBP、包含層1の土壌 (No.4 : IAAA-70656) の14C年代が 8080 ± 40 yrBP、包含層2の土壌 (No.5 : IAAA-70657) の14C年代が 15300 ± 60 yrBP、包含層3の土壌 (No.6 : IAAA-70658) の14C年代が 5450 ± 40 yrBPである。暦年校正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、No.1が685 ~ 775ADであり飛鳥時代末から奈良時代前半、No.2が1640 ~ 1670AD (37.3%)・1780 ~ 1800AD (30.9%)であり江戸時代前期から中期、No.3が780 ~ 790AD (0.8%)・820 ~ 840AD (6.3%)・860 ~ 900AD (27.1%)・910 ~ 970AD (34.1%)であり奈良時代末から平安時代前半、No.4が7140 ~ 7030BCであり縄文時代早期、No.5が16810 ~ 16680BCであり後期旧石器時代、No.6が4345 ~ 4315BC (30.1%)・4295 ~ 4260BC (38.1%)であり縄文時代前期に相当する。土壌試料は炭素含有量が極めて微量であったが、化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

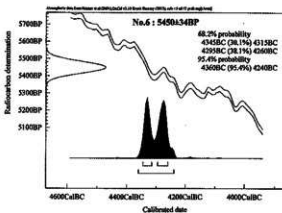
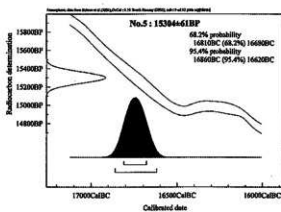
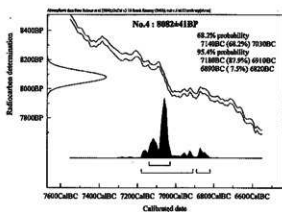
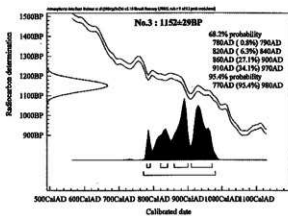
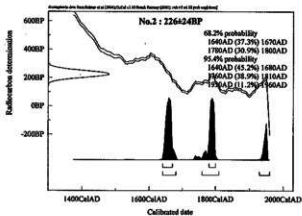
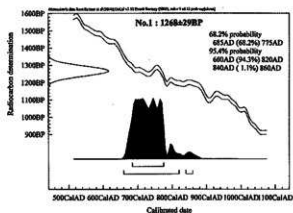
| AA Code No. | 試料 | BP年代および誤差の四位体比 |
|-----------------------|--|--|
| IAAA-70653 #1817-1 | 試料採取場所：香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常 東坂元秋常遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 1 | Libby Age (yrBP) : 1,270 ± 30 δ 13C (‰)、(加速器) = -25.49 ± 0.63 Δ 14C (‰) = -146.1 ± 3.1 pMC (%) = 85.39 ± 0.31 |
| | (参考) δ 13C の補正無し | δ 14C (‰) = -147 ± 2.9 pMC (%) = 85.3 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,280 ± 30 |
| IAAA-70654 #1817-2 | 試料採取場所：香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常 東坂元秋常遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 2 | Libby Age (yrBP) : 230 ± 30 δ 13C (‰)、(加速器) = -24.99 ± 0.33 Δ 14C (‰) = -27.8 ± 3 pMC (%) = 97.22 ± 0.3 |
| | (参考) δ 13C の補正無し | δ 14C (‰) = -27.7 ± 2.9 pMC (%) = 97.23 ± 0.29 Age (yrBP) : 230 ± 20 |
| IAAA-70655 #1817-3 | 試料採取場所：香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常 東坂元秋常遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 3 | Libby Age (yrBP) : 1,150 ± 30 δ 13C (‰)、(加速器) = -25.45 ± 0.48 Δ 14C (‰) = -133.6 ± 3.2 pMC (%) = 86.64 ± 0.32 |
| | (参考) δ 13C の補正無し | δ 14C (‰) = -134.4 ± 3.1 pMC (%) = 86.56 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,160 ± 30 |
| IAAA-70656 #1817-4 | 試料採取場所：香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常 東坂元秋常遺跡 試料形態：土壌 試料名(番号)：No. 4 | Libby Age (yrBP) : 8,090 ± 40 δ 13C (‰)、(加速器) = -23.39 ± 0.43 Δ 14C (‰) = -634.4 ± 1.9 pMC (%) = 36.56 ± 0.19 |
| | (参考) δ 13C の補正無し | δ 14C (‰) = -633.2 ± 1.9 pMC (%) = 36.58 ± 0.19 Age (yrBP) : 8,060 ± 40 |
| IAAA-70657 #1817-5 | 試料採取場所：香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常 東坂元秋常遺跡 試料形態：土壌 試料名(番号)：No. 5 | Libby Age (yrBP) : 15,300 ± 60 δ 13C (‰)、(加速器) = -20.2 ± 0.67 Δ 14C (‰) = -851.2 ± 1.1 pMC (%) = 14.88 ± 0.11 |
| | (参考) δ 13C の補正無し | δ 14C (‰) = -849.7 ± 1.1 pMC (%) = 15.03 ± 0.11 Age (yrBP) : 15,230 ± 60 |
| IAAA-70658 #1817-6 | 試料採取場所：香川県丸亀市飯山町東坂元字秋常 東坂元秋常遺跡 試料形態：土壌 試料名(番号)：No. 6 | Libby Age (yrBP) : 5,450 ± 40 δ 13C (‰)、(加速器) = -19.86 ± 0.63 Δ 14C (‰) = -492.6 ± 2.2 pMC (%) = 50.74 ± 0.22 |
| | (参考) δ 13C の補正無し | δ 14C (‰) = -487.3 ± 2.1 pMC (%) = 51.27 ± 0.21 Age (yrBP) : 5,370 ± 30 |

参考資料：暦年較正用年代

| IAA Code No. | 試料番号 | Libby Age (yrBP) |
|--------------|-------|------------------|
| IAAA-70653 | No. 1 | 1268 ± 29 |
| IAAA-70654 | No. 2 | 226 ± 24 |
| IAAA-70655 | No. 3 | 1162 ± 29 |
| IAAA-70656 | No. 4 | 8082 ± 41 |
| IAAA-70657 | No. 5 | 15304 ± 61 |
| IAAA-70658 | No. 6 | 5450 ± 34 |

ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下 1 桁を丸めたい値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

第3節 樹種同定結果報告書

株) 加速器分析研究所

東秋元秋常遺跡より出土した柱材の樹種

出土した柱材の試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を切り、封入剤ガムクロラルでプレパラートを作製し、生物顕微鏡で観察、同定をおこなった。以下に同定された分類群を示し、木材解剖学的記載を行う。

No.7(A-1区 SP005) ヒノキ(幹材)

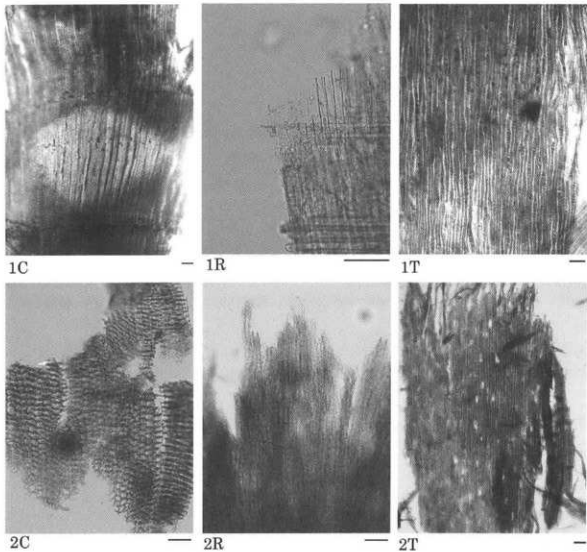
No.8(A-3区 SP051) 針葉樹

ヒノキ(*Camacyparis obtusa* Endl.): 年輪が狭く晩材部に樹脂細胞が集中している。保存状態が悪いが分野壁孔はかろうじて確認でき、典型的なヒノキ型が1分野に2個ある。ヒノキの自生地は福島県以西九州までの比較的乾燥した山腹や尾根などであるが、需要が高いため古来より至る所に植栽されている。

針葉樹: 保存状態が極めて悪く細胞壁がかなり薄くなっている。晩材部付近にやや樹脂細胞がみられる。放射細胞はほとんどの壁が溶けているため科の識別ができない。

※) 本測定は、当社協力会社・古代の森研究舎にて実施した。

図版2 柱材の顕微鏡写真



1: ヒノキ (No. 7 A-1 区 SP005) 2: 針葉樹 (No. 8 A-3 区 SP051)

C: 横断面, R: 放射面, T: 接線断面, スケールは 0.1mm

第V章 まとめ

第1節 遺構の変遷

縄文時代

A地区においてサヌカイト剥片を含む当該期の堆積層を確認した。本堆積層の下には、旧大東川の流路堆積とみられる厚い砂礫層の堆積が確認されており、本層は流路上面を薄く覆うように堆積する。本層より出土した遺物は、剥片1点に限られ、また地表下比較的浅い位置より出土したことなどから、本層の主要部分は後世の開発により削奪された可能性が高いと判断した。本層の堆積年代については、C14年代分析により縄文時代早期に遡る可能性が示された。試料点数がわずかであるため、なお年代については分析の追加や周辺調査の進展などを待たねばならないだろうが、本遺跡での調査成果は、周辺の地形環境の復元に資するものとなる。

弥生時代～古墳時代

B地区丘陵端部の縁道を流下する流路SD17は、出土遺物が乏しいものの旧地形に規制された位置関係や埋土などから当該時期に遡る可能性が高い。また古代の流路としたA地区SD04は、弥生時代後期の遺物が周辺を含め一定量出土しており、その埋没時期は古代初頭まで下るものの、機能時の一点は当該時期に遡る可能性を示す。

以上のように当該時期の遺構は、自然流路などが主体を占め、また遺物量も乏しい。このことは、調査地周辺が、居住に適さない旧大東川の氾濫原低地部に位置していたことが理由として考えられる。

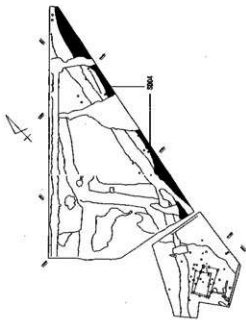
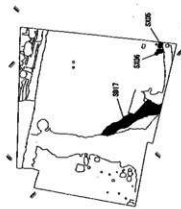
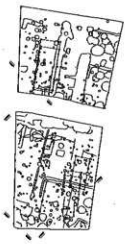
古代

調査地周辺において、活発な開発が実施されるのは当該時期からである。A・B地区で検出された大型水路SD01は、頻繁な改修痕跡が認められ、比較的長期にわたり利用された幹線水路と考えられる。遅くとも8世紀後葉までに開削されたと考えられ、完新世段丘が形成される11世紀代のうちにほぼ廃絶されたようだ。SD01の脇には、現在上井用水が通水しており、SD01廃絶後は現水路へ付け替えられた可能性も考えられる。この点については、次節において検討しよう。

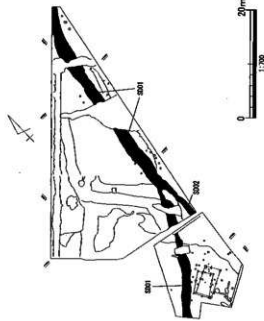
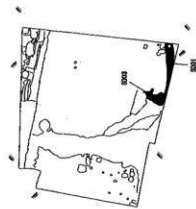
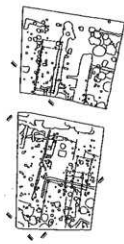
中世

中世の遺構は、各調査区において検出した。概ね13世紀後半から14世紀前半代の遺物が主体を占め、ほぼ当該期に営まれた集落と考えられる。A地区では、方形区画溝に囲まれた屋敷地を確認し、2棟の掘立柱建物を検出した。屋敷地は、より西方の丘陵斜面部へ展開する可能性がある。B地区では、土坑2基を検出したのみだが、古代の幹線水路SD01上面より当該時期に下る可能性のある遺物が極少量出土しており、近世以降の削平による影響がなければ、当該期の遺構がひろがっていた可能性も考えられる。C地区では、谷状地形SR01を検出し、一定量の当該期の遺物が出土した。下位層からは、より遡る遺物も出土しており、それら遺物の所属する年代の遺跡が上流域に想定される。とくに川西編年V期の円筒埴輪が少量ながら出土しており、上流域で当該期の古墳の存在が予想される。本調査区も近世以降の削平が顕著であるが、SR01での遺物の出土状況や一部当該期に遡る柱穴などの遺構の存在から、

① 新・石室



② 古代



第 67 図 遺構変遷図 1

本調査区周辺にも当該時期の居住遺構が展開した可能性が窺われた。以上の調査成果より、当該時期の居住域は、微高地A及びCにおいて展開していたと考えられる。

出土遺物には、在地の土師質土器類とともに、搬入品として樟葉型と和泉型瓦器碗や瀬戸・美濃系陶器壺・瓶子・天目碗、常滑焼、備前焼、亀山焼、東播系須恵器、中国産磁器碗・皿類などが出土している。古瀬戸段階の瀬戸・美濃系陶器は、中・四国地域では広島県草戸千軒町遺跡など一部の遺跡を除くと、1遺跡で数点以下しか出土していない（荻野 1997・瀬戸市文化振興財団編 2006）。当該期の常滑焼を含めた東海系製品の流通の低調さは、本地域の特徴であり、本遺跡においても同様な傾向を示している。また本遺跡の居住者は、樟葉型瓦器・古瀬戸・常滑などの搬入品を所有しており、本地域内の中世社会において一定の階層的位置を占めていたことを反映していると考えられる。

近世

近世遺構は、各調査区において検出している。出土遺物より、16世紀末～17世紀中葉（近世Ⅰ期）と18世紀前半以降（近世Ⅱ期）の2時期に大別され、後者の遺構の比重が大きい。

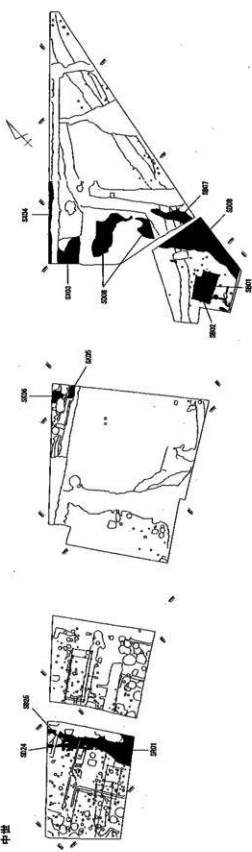
A地区では、水路や土坑が主体で、居住遺構は確認されず、おそらくは耕作域として利用されていたことが想定できる。B地区では、その西部で複数の土坑を検出したが、居住遺構は確認できなかった。本調査区も耕作域として利用されていた可能性が高いと判断されるが、鍛冶に伴う可能性のある廃棄土坑SK09・10が検出され、あるいは礎石建物遺構が居住施設として存在した可能性も考えられる。時期は、A・B地区とも近世Ⅱ期に位置付けられる。

C地区では、掘立柱建物5棟を含む多数の柱穴とともに、土坑・溝などが検出され、屋敷地として利用されていたことが判明した。柱穴の一部に、中世に遡る可能性をもつものが含まれるが、大半は近世の柱穴としてよいだろう。後世の削平などにより、復元された建物遺構は5棟にとどまるが、柱穴のひろがりから、頻繁に建て替えられながら、居住空間として継続した利用がなされたと考えられる。時期は、近世Ⅱ期の遺構が大半を占めるが、17世紀中葉段階のほぼ完形の肥前系磁器皿を意図的に埋めたと考えられる柱穴SP231なども検出されたことから、屋敷地としての造成が近世Ⅰ期に遡る可能性は高いと判断される。

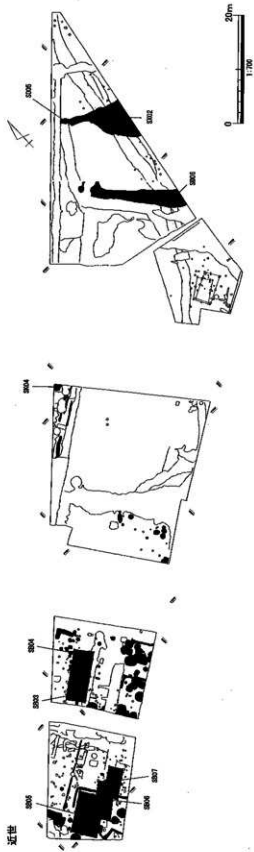
近世Ⅰ期において、どの程度本地域が開発されていたか、調査成果の点から詳細に評価することは困難である。A・B両区において、近世Ⅰ期に遡る遺構が皆無であることは、より限定されたものであったことを示しているのかもしれない。16世紀末から17世紀初頭期に集落（屋敷地）が成立する例は、高松平野では東山崎・水田遺跡、川南・西遺跡、木太中村遺跡などで確認されている。さらに、当該時期の肥前系陶磁器類の単発的な出土例などを含めるなら、その遺跡数はかなりの数に達するとみられる。しかし、集落（屋敷地）として調査された遺跡の多くが、17世紀中葉を前後する時期に廃絶しており、本遺跡もそうした動向と同調した様相をみせる。佐藤は、こうした斉一的ともみられる遺跡の動向について、個別完結的な屋敷に対する意識の止揚と、城下町と農村との差別化への起点として評価した（佐藤 2006）。

遺物についてみると、近世Ⅰ期では、供膳具において肥前系陶磁器類（碗・皿）を主体に、瀬戸・美濃系陶器（丸皿・天目碗）が少量混在する様相をみせる。肥前系製品の流通とともに、瀬戸・美濃系製品の少量流通は、高松平野での様相と共通したあり方を示している。当該期の瀬戸・美濃系製品の流通に織豊政権の関与を想定し、さらに豊臣方大名が入部した城下への同製品の搬入量の増加に、豊臣政権

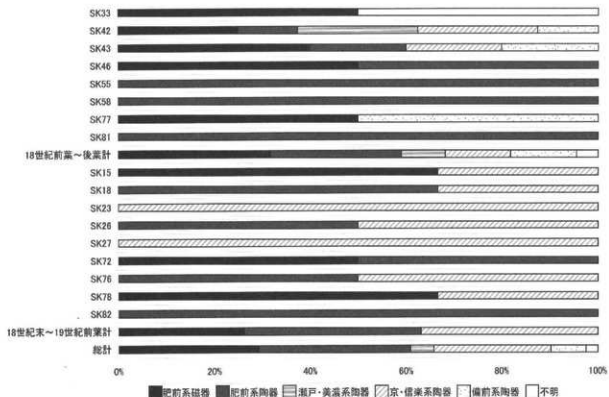
③ 中世



④ 近世



第 68 图 遺構変遷図 2



第 69 図 近世陶磁器産地別組成表

の経済政策を読み取る意見（藤澤 2000）を前提とするなら、こうした農村部への瀬戸・美濃製品の少量だが広範な流通も、そうした経済政策の余波として評価することもできよう。また、用途が限定される天目碗や、まだ流通量が乏しかった肥前系磁器類が少量ながら出土していることは、本遺跡の開発を主導した屋敷地の住人の階層を一定程度反映していると考えられる。

近世Ⅱ期では、京・信楽系製品の出土が注目される。第 69 図は、C 地区屋敷地で検出された遺構のうち、陶磁器類が比較的良好な状態で出土した遺構を選んで、未報告資料を含む遺物を集計した陶磁器類の産地別組成図である。この図では、近世Ⅱ期を、18 世紀前葉～同後葉のⅡ a 期と、18 世紀末～19 世紀前葉のⅡ b に細分した。Ⅱ a 期の遺構（SK33・42・43・46・55・58・77・81）では、京・信楽系陶器は約 14%だが、Ⅱ b 期の遺構（SK15・18・23・26・27・72・76・78・82）では約 37%に達し、両時期を合計したⅡ期全体でも約 24%という数値が得られた。各遺構からの陶磁器類の出土点数は数点程度と少量であり、こうした数値が遺跡全体の傾向を反映したものかどうかは、なお類例の増加を待つ必要があるかもしれない。しかし、これまでに調査された遺跡での様相を詳細に分析した松本は、農村部の遺跡において「京・信楽系陶器は搬入される遺跡と全く確認できない遺跡があり、前者の場合でもその組成は極めて低い」と結論付けている（松本 2002）。本遺跡での様相は、こうした理解とは相容れないものである。その要因として、本地域の特殊性や、あるいは居住者の階層や性格など、さまざまな可能性が考えられるが、今後の課題としておきたい。

第 2 節 古代幹線水路について

1 はじめに

前章で既述したように、A・B地区の調査において古代の幹線水路SD01が検出された。規模の点において、大東川流域で過去に調査された遺跡で検出された水路の中では、最も大型の一群に属す。その点で、本地域の基幹水路として位置付けられる資料であり、本地域の開発を考える上で、重要な位置を占める資料であると考え。類似した幹線水路は、川津川西遺跡や東坂元三ノ池遺跡で検出されている。以下、本地域での類例を検討する中で、本水路開削の意義について、検討しよう。

2 周辺遺跡の様相と開発

上述したように、類似した規模をもつ幹線水路は、川津川西遺跡と東坂元三ノ池遺跡で検出されている。川津川西遺跡は、飯野山北東麓の段丘I面上に所在する集落遺跡である。調査区中央部で、南北方向に配された幹線水路SD135が検出されている。SD135は、N 60° W前後の流路主軸をもちほぼ直線状に配された水路である。調査区内で延長約38mを確認している。検出面で幅3.5～4.3m、残存深1.3～1.4m、断面形は概ね逆台形状を呈し、東坂元秋常遺跡SD01と近似した規模を有する。底面の標高は8.9～9.3mにあり、標高差から北に流下していたとされる。埋土は概ね3層に大別され、下層を中心に遺物が出土している。埋土に、複数の改修の痕跡がみられる点、顕著な水流下堆積の可能性を示す土層の堆積に乏しい点も、SD01と共通する。報告書では、出土遺物から8世紀後半ないしは9世紀前半代の開削、13世紀代の埋没の可能性が示されているが、開削時期はより遡る可能性が考えられる。水路からは、漆に関わる漆皿や木屑などが出土しており、周辺に漆や木製品製作の工房が存在した可能性が想定される。また、出土した須恵器の一部に、墨書土器が含まれている点も注目される。墨書土器には、4点の杯や皿にそれぞれ「井南」・「久」・「人」・「下」が墨書される。近接する川津東山田遺跡Ⅱ区の井戸からも「井上」と記された墨書土器が出土している。

東坂元三の池遺跡は、飯野山東麓に所在し、段丘I面から飯野山裾部の緩斜面地上に展開する集落遺跡である。調査区南部段丘I面において、ほぼ等高線に平行して配された幹線水路SD30が検出されている。正式報告書未刊のため、詳細は不明ながら、流路方向N 43° Eの流路主軸を



第70図 用水路と周辺遺跡分布

もち、ほぼ直線状に配された幹線水路とされる。調査区内で延長約13mを確認し、検出面幅2.4m、残存深0.9m、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は、複数層に細分されているが、掲載された土層図から数度の改修痕跡が確認される。出土遺物より、弥生時代後期前半の開削、古代以降の埋没の可能性が指摘されているが、溝の規模や性格からそうした理解は困難であり、古代以降の開削の可能性が考えられる。

以上の検討から、各水路は8世紀後半には埋没が進行し、灌漑水路としての機能が低下しつつあった様相が窺える。開削時期については、明確な資料は得られていないものの、8世紀中葉以前に遡り、その廃絶時期は11世紀を中心とする時期であることも共通する。

さて、東坂元秋常遺跡SD01を含めた3条の水路の位置関係を地図上に表示したのが第70図である。この図より、各水路は、飯野山東麓の段丘縁辺に開削されていることがわかる。また、東坂元三ノ池遺跡SD30についてはまだ検討すべき点を残すものの、これら3条の水路は規模や埋土の堆積状況などが近似し、また機能時の多くの時間を共有している。これらの事実より、やや大胆に結論を示せば、これら3条の水路は、本来一連の水路であった可能性が予想される。3遺跡は、互いに3~5km離れているため、未調査部分については今後の検証が必要であろうが、このように理解した場合に、各水路の底面の標高値が矛盾なく説明可能な点もその可能性を傍証するものとなる。

また、東坂元秋常遺跡SD01と東坂元三ノ池遺跡SD30に近接して、現在上井用水が流下している。これら水路と上井用水との関係については後に検討するが、結論を示せば、これら水路の機能が上井用水に継続されたと考えている。したがって以下では、川津川西遺跡SD135を含めた3遺跡の幹線水路を古上井用水と仮称しておきたい。

これら3遺跡の水路を一連の灌漑水路であったと仮定した場合、その給水域はどこに求められるだろうか。遺跡が所在する飯野山東麓は可耕地に乏しく、大規模水路の敷設に見合うだけの収量が期待されるわけではない。やはりそれは大東川下流西岸の川津地区に求めるのが妥当と考えられる。

ここで大東川下流域に視点をひろげてみる。大東川下流西岸域においては、調査が広汎におこなわれ、川津東山田遺跡Ⅰ区SD01、川津中塚遺跡SDⅡ38、川津元結木遺跡SD10などで大型水路が確認されている。これら水路の機能については、その詳細は個別に異なるであろうが、頻繁な改修の痕跡が認められ、比較的長期に亘り継続使用された可能性が窺える点で共通し、周辺地域の幹線水路として機能していたことが考えられる。また、これら水路の開削時期については、やはり明確な確証は得られていないものの出土遺物より、9世紀頃までには開削され、11世紀頃には水路としての機能が衰退していた可能性が想定される。こうした調査例より灌漑水路網が、遅くとも9世紀までには川津地区の一定地域において整備されていた可能性が考えられ、旧上井用水は、川津地区の開発を目的として開削された可能性が想定される。

3 現状水路との関係

さて、既述したように、東坂元秋常遺跡SD01と東坂元三ノ池遺跡SD30に隣接して上井用水が、川津川西遺跡SD135に近接して西又用水が、それぞれ現在流下している。各遺跡での調査成果から、現行用水路との関係について、検証可能な資料は得られていない。しかし、3地点で現行水路と古代の水路が近接して検出された事実は、これら古代に開削された水路の機能が、現在まで維持されたことを否定するものではない。調査成果からこの点に接近することは不可能なため、以下では文献史料などに拠る

つ、現行水路との関係について検討しよう。

上井用水は、飯山町南部の洪積台地の崖端侵食谷を利用して築かれた、谷頭溜池である大窪池を主要な取水源とする用水路である。大窪池は、その築造時期については不明ながら、堤防にある記念碑には高松藩士矢延平六が正保年間（1644～1648）に増築したことを記しており、17世紀前葉以前に規模は不明ながら築池されていた可能性が考えられる。また宝暦5年（1755）に高松藩が水利施設の調査を実施し、その鶴足郡内の結果をまとめた「鶴足郡村々池帳」には、大窪池の水掛り高は3,011石で、名上所免をはじめ、上法軍寺村以下東坂元秋常遺跡周辺の東坂本村などへ通水されていたことが記されており（飯山町編1988）、このなかに上井用水の通水域を含んでいると理解される。上井用水は現在、東坂元秋常遺跡南部で用水の大部分を大東川へ落とし、一部が東坂元秋常遺跡東辺を北流して、東坂元三ノ池遺跡東部で西又用水へ流入している。

西又用水は、大東川本流より直接取水する用水路で、西又横井（横井とは、用水施設のうち頭首工あるいは井堰のことを指す）より取水し、川津地区の灌漑に利用されている。西又横井の構築時期については不明である。大東川に設置された他の横井についてその構築時期を示せば、天保7年（1836）久米通賢が築造した坂本横井が、もっとも古い例のようだ（飯山町1988）。横井の技術的な問題からも、その築造時期は江戸中期以降とみたい。このように考えるなら西又用水は、江戸前半期までに上井用水の延長部として整備されていたが、西又横井の構築により再整備された可能性が考えられる。

やや推測が大きな比重を占める検討となったが、上井用水の開削時期は17世紀前葉以前に遡り、飯野山南部の大東川西岸平地部を主要な灌漑域とする用水路であったと理解される。また近世の史料には記されていないためさらなる検討は必要なもの、その一部は川津地区へ給水されていた可能性を想定した。つまり、大窪池を含めた広域的な灌漑用水路網の整備が、17世紀前葉以前に遡る可能性とともに、溜池の拡大や横井の構築といった近世の開発は、新たな土木技術の導入や労働編成による、その量的拡大であったと評価される。

ここで示した17世紀前葉以前の様相は、前節で検討した古上井用水の開発の状況と齟齬しない内容を示している。中世段階での上井用水の様相は不明ながら、前節までに検討した内容と近世以降の状況を踏まえるなら、古上井用水の機能は11世紀段階の埋没・機能停止を契機として、中世段階には上井用水へと継続されたと考えたい。

では古上井用水の取水源は、どこに求められるだろうか。この点で重視されるのが、法勲寺である。法勲寺は、大窪池が所在する開折谷の開口部付近の微高地上に位置し、旧鶴足郡内で確認されている唯一の白鳳期寺院で、その創建には郡領氏族の関与が想定される。また大窪池より取水する用水路は現在、法勲寺の西辺を北流して上井用水へ接続する。さらに大窪池の北西部の台地上に立地する東原遺跡からは、7世紀中葉～奈良時代の大形掘立柱建物群が検出され、有力集団の居宅と評価されている（香川県教育委員会編1999）。また谷部東方の台地上に立地する遠田遺跡からも、奈良時代の大形掘立柱建物が検出されており、法勲寺を中心とした地域が、古代において広域的に開発されたことが推測される。

つまり、7世紀中葉から8世紀代にかけて、大窪池周辺では郡司層による大規模な開発がなされたことが考えられる。その一環として大窪池築池と灌漑用水路網の整備がなされた可能性を想定したい。7世紀末から8世紀初頭、郡家の成立とともに手工業生産や農業経営など、律令国家の政策のもと郡司層を核とした多様な開発が進捗したことが明らかにされつつある（坂井2005）。東坂元秋常遺跡での1条の用水路の検出は、大東川流域におけるそうした郡司層の動向に接近する貴重な資料と評価される。

引用・参考文献

- 荻野繁春 1997「中国・四国にみる瀬戸焼の世界」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯
- 香川県教育委員会編 1999『香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度』
- 香川県教育委員会編 2004『埋蔵文化財試掘調査報告XVII 香川県内遺跡発掘調査』
- 香川県教育委員会編 2005『埋蔵文化財試掘調査報告XVIII 香川県内遺跡発掘調査』
- 香川県土木部河川課編 1980『香川の河川』
- 木下晴一 1995 a「大東川流域の段丘崖」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊 川津二代取道跡』香川県教育委員会ほか
- 木下晴一 1995 b「空中写真判読を中心とする中世平地城館址の分布調査 -香川県丸亀平野の事例(第一報)-」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』III
- 坂井秀弥 2005「国府と郡家-地方官衙遺跡からみた実像」『列島の古代史3 社会集団と政治組織』岩波書店
- 佐藤竜馬 2006「高松城・城下の屋敷地と区画施設」『第7回四国城下町研究会 近世の屋敷境とその周辺』[発表要旨・資料集]
- 瀬戸市文化振興財団 2006「中世瀬戸焼全国出土遺跡地名表2 -中国・四国・九州編-」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第13輯別冊
- 高桑胤 1974「丸亀回廊の地形区分」『研究報告』第1部第37号、香川大学教育学部
- 高橋学 1995「臨海平野における地形環境の変容と土地開発」『古代の環境と考古学』古今書院
- 高松市歴史資料館編 1996『讃岐の古瓦展』
- 飯山町編 1988『飯山町誌』
- 飯山町教育委員会編 1992『城山古墳群発掘調査報告書』
- 藤澤良祐 2000「西日本における瀬戸・美濃大甕製品の受容」『列島に華開く大甕製品 西日本の様相』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 松本和彦 2002「香川県」『第12回九州近世陶磁学会資料 国内出土の肥前磁器』九州近世陶磁学会

觀 察 表

| 番号 | 種別名 | 部位 | 用途 | 口径 | 重量 | 長さ | 断面 | 加工 | 材質 | 製造 | 備考 |
|-----|-----|---------|------|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 302 | 砲筒 | 上部土座・砲体 | 42.4 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 321 | 砲筒 | 砲口 | 13.4 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 324 | 砲筒 | 砲口 | 13.0 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 328 | 砲筒 | 砲口 | 7.0 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 329 | 砲筒 | 砲口 | 8.4 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 327 | 砲筒 | 砲口 | 25.2 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 329 | 砲筒 | 砲口 | 25.8 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 328 | 砲筒 | 砲口 | 25.8 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 341 | 砲筒 | 砲口 | 27.4 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |

土器観察表 (9)

| 番号 | 種別名 | 部位 | 用途 | 口径 | 重量 | 長さ | 断面 | 加工 | 材質 | 製造 | 備考 |
|-----|-----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 174 | 砲筒 | 砲口 | 1.1 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 175 | 砲筒 | 砲口 | 1.0 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 176 | 砲筒 | 砲口 | 0.9 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 177 | 砲筒 | 砲口 | 0.9 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 178 | 砲筒 | 砲口 | 1.1 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |
| 179 | 砲筒 | 砲口 | 1.2 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 | 砲口 |

埴輪観察表

| 番号 | 種別名 | 部位 | 用途 | 口径 | 重量 | 長さ | 断面 | 加工 | 材質 | 製造 | 備考 |
|-----|-----|----|------|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 32 | 土器 | 土器 | 13.0 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 |
| 313 | 土器 | 土器 | 6.0 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 |
| 314 | 土器 | 土器 | 6.5 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 |
| 315 | 土器 | 土器 | 6.8 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 | 土器 |

丸瓦観察表

| 番号 | 種別名 | 部位 | 用途 | 口径 | 重量 | 長さ | 断面 | 加工 | 材質 | 製造 | 備考 |
|-----|-----|----|------|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 32 | 丸瓦 | 丸瓦 | 13.0 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 |
| 313 | 丸瓦 | 丸瓦 | 6.0 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 |
| 314 | 丸瓦 | 丸瓦 | 6.5 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 |
| 315 | 丸瓦 | 丸瓦 | 6.8 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 | 丸瓦 |

| 番号 | 遺物名 | 層位 | 時期 | 現存長さ (cm) | 土質 | 色調 | 形成 | 凸面調整 | 凹面調整 | 断面調整 | 保存率 | 備考 |
|-----|------|----|------|-----------|---------------|------------------|-----|--------|------|------|-----|----|
| 123 | S308 | 平瓦 | 7.1 | 1.8 | 中・石炭層・炭石層・黒煤層 | 凸面：NS/凹面：少 | 良好 | コビキ状平瓦 | 平瓦 | 平瓦 | 破片 | 瓦質 |
| 342 | 包帯層 | 平瓦 | 11.7 | 1.7 | 中・石炭層・炭石層・黒煤層 | 凸面：107PM/5輪 凹面：同 | やや軟 | 平瓦 | 平瓦 | 平瓦 | 破片 | 瓦質 |

平瓦観察表

| 番号 | 遺物名 | 層位 | 現存長さ (cm) | 現存幅 (cm) | 現存厚 (cm) | 重量 (g) | 石材 | 形状 | 備考 |
|-----|-------|----|-----------|----------|----------|---------|-------|------|-----------------|
| 1 | 風文包帯層 | | | | | | | | |
| 2 | SD17 | 上層 | 45 | 87 | 13 | 256.66 | サヌカイト | 一部破損 | |
| 3 | | 上層 | 22 | 10 | 2 | 0.29 | サヌカイト | 欠損 | 皿蓋式 |
| 67 | SP01 | 上層 | 74 | 69 | 30 | 202.49 | 砂岩 | ほぼ完存 | |
| 63 | SP051 | 上層 | 27 | 20 | 4 | 1.77 | サヌカイト | 一部破損 | 夾製品 |
| 124 | SD08 | 上層 | 26 | 17 | 3 | 0.91 | サヌカイト | 破片 | 皿蓋 |
| 125 | SD08 | 上層 | 26 | 28 | 10 | 9.75 | 凝灰岩 | 破片 | 底面3面 |
| 142 | SD07 | 上層 | 136 | 66 | 27 | 523.09 | 安山岩 | 破片 | 一部に二次的割断痕、底面1面 |
| 143 | SD01 | 下層 | 33 | 20 | 3 | 0.73 | サヌカイト | 一部破損 | |
| 184 | SD01 | 上層 | 33 | 17 | 3 | 2.22 | サヌカイト | 一部破損 | 皿蓋式 |
| 186 | SD01 | 下層 | 41 | 15 | 5 | 2.98 | サヌカイト | 一部破損 | 皿蓋式 |
| 186 | SD01 | 下層 | 47 | 18 | 6 | 3.94 | サヌカイト | 完存 | 皿蓋式 |
| 187 | SD01 | 上層 | 53 | 79 | 20 | 124.53 | 砂岩? | 破片 | 底面2面、凹正面と側面に割断痕 |
| 199 | SD03 | 上層 | 76 | 49 | 18 | 66.87 | サヌカイト | 完存 | |
| 215 | SP359 | 上層 | 316 | 209 | 75 | 6100 | 安山岩 | 一部破損 | 底面1面、側面底面や頂蓋 |
| 220 | SK18 | 上層 | 15 | 8 | 7 | 0.48 | チャート | 完存 | |
| 253 | SK54 | 上層 | 15 | 13 | 4 | 0.69 | チャート | 完存 | |
| 270 | SK42 | 上層 | 237 | 126 | 95 | 3006.02 | 角礫凝灰岩 | 破片 | 覆元径30cm |
| 271 | SK42 | 上層 | 240 | 181 | 91 | | 角礫凝灰岩 | 破片 | |
| 332 | SK10 | 上層 | 52 | 12 | 10 | 8.33 | 安山岩? | 破片 | 底面2面 |
| 345 | 包帯層 | 上層 | 89 | 67 | 11 | 101.08 | 凝灰岩? | 破片 | 底面2面、側面3面に割断痕 |

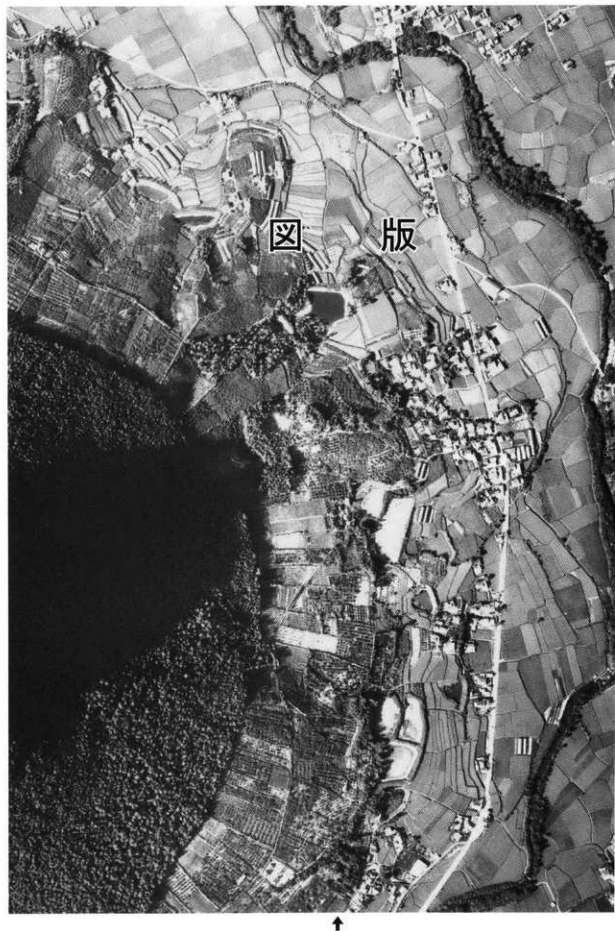
石器・石製品観察表

| 番号 | 遺物名 | 層位 | 現存長さ (cm) | 現存幅 (cm) | 現存厚 (cm) | 重量 (g) | 材質 | 備考 |
|-----|------|----|-----------|----------|----------|--------|----|----|
| 54 | SD01 | 上層 | 98 | 4 | 4 | | 灰岩 | 角釘 |
| 65 | S001 | 上層 | 84 | 5 | 5 | | 砂岩 | 角釘 |
| 69 | SD04 | 上層 | 27 | 1.4 | 2 | | 砂岩 | 角釘 |
| 126 | SD08 | 上層 | 54 | 23 | 3 | | 砂岩 | |
| 127 | SD08 | 上層 | 50 | 4 | 4 | | 砂岩 | 角釘 |
| 128 | SD08 | 上層 | 37 | 32 | 13 | 26.2 | 砂岩 | |
| 129 | SD08 | 上層 | 14 | 14 | 13 | 3.09 | 砂岩 | |
| 143 | SD07 | 上層 | 20 | 23 | 4 | | 砂岩 | |
| 144 | SD07 | 上層 | 40 | 46 | 29 | 36.31 | 砂岩 | 角釘 |
| 181 | SD01 | 上層 | 25 | 5 | 6 | | 砂岩 | 角釘 |
| 182 | SD01 | 下層 | 19 | 23 | 4 | | 砂岩 | |
| 200 | SD03 | 上層 | 39 | 5 | 5 | | 砂岩 | 角釘 |

金属器観察表 (1)

| 番号 | 遺構名 | 層位 | 図種 | 保存長 (mm) | 保存幅 (mm) | 保存厚 (mm) | 重量 (g) | 材質 | 備考 |
|-----|-------|----|-------|----------|----------|----------|--------|----|-----------------|
| 201 | SX03 | 上層 | 鉄釘 | 58 | 6 | 3 | | 鉄 | |
| 202 | SX03 | 上層 | 不明 | 25 | 27 | 6 | | 鉄 | 方形板状 |
| 213 | SF262 | | 鉄棒 | 22 | 16 | 13 | 3.60 | | |
| 214 | SF262 | | 鉄釘 | 28 | 3 | 3 | | 鉄 | 角釘 |
| 221 | SK10 | 上層 | 鉄釘 | 50 | 3 | 3 | | 鉄 | 角釘 |
| 222 | SK10 | 下層 | 鉄釘 | 49 | 4 | 4 | | 鉄 | 角釘 |
| 232 | SK18 | | 鐵管 | 58 | 15 | 9 | 5.50 | 鋼 | |
| 234 | SK18 | | 鐵管 | 26 | 6 | 5 | 2.45 | 鋼 | 傷口、土圧により変形 |
| 235 | SK10 | 下層 | 鉄棒 | 77 | 61 | 43 | 173.01 | | |
| 236 | SK10 | 下層 | 鉄棒 | 85 | 50 | 33 | 140.96 | | |
| 247 | SK21 | 上層 | 鉄板 | 24 | 24 | 1 | 4.33 | 鉄? | 鉄部不劣 |
| 248 | SK30 | 上層 | 鉄板? | 26 | 26 | 1 | 2.36 | 鉄? | 鉄部不劣 |
| 249 | SK78 | 中層 | 鋼板 | 23 | 23 | 1 | 3.07 | 鋼 | 鉄部不劣 |
| 250 | SK21 | 上層 | 刀子 | 59 | 18 | 3 | | 鉄 | |
| 251 | SK76 | | 鉄釘 | 30 | 4 | 3 | | 鉄 | 角釘 |
| 252 | SK76 | | 鉄釘 | 34 | 3 | 3 | | 鉄 | 角釘 |
| 305 | SD05 | 上層 | 鉄釘 | 35 | 3 | 3 | | 鉄 | 角釘 |
| 317 | SD06 | 上層 | 鋼線 | 21 | 21 | 1 | 1.52 | 鋼 | 角釘 |
| 318 | SD06 | 下層 | 鋼線 | 41 | 36 | 20 | | | 保存調査? 初時 1008 年 |
| 319 | SD06 | 中層 | 鋼? | 47 | 13 | 10 | 35.87 | 鉄 | |
| 320 | SD06 | 下層 | 鉄製金具? | 54 | 3 | 7 | | 鉄 | |
| 330 | SD07 | 上層 | 鉄釘 | 57 | 4 | 4 | | 鉄 | 角釘 |
| 333 | SK10 | 上層 | 鉄釘 | 18 | 18 | 1 | 0.55 | 鉄 | 鉄部不劣 |
| 343 | SK10 | | 鉄釘 | 53 | 4 | 4 | | 鉄 | 角釘 |
| 344 | SK10 | | 鉄釘 | 22 | 23 | 1 | 1.76 | 鋼 | 角釘 |
| 344 | SK10 | | 鉄釘 | 21 | 22 | 1 | 0.88 | 鉄? | 鉄部不劣 |

金属器観察表 (2)



遺跡付近空中写真（上が北、縮尺約 1/5,000、国土地理院 1962 年撮影）



A-1・2区全景（南より）



A-3区全景（南西より）



B-1区全景（南より）



B-1区全景（北より）



B-2区全景（北西より）



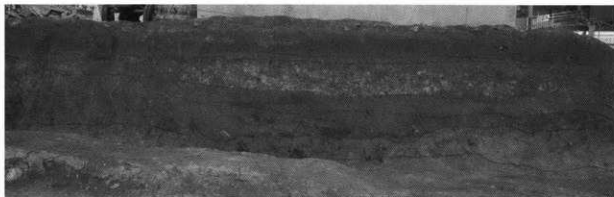
C-1区全景（西より）



C-2区全景（西より）



A-1区西壁深掘トレンチ土層断面（東より）



A-2 区西壁土層断面 (南東より)



B-1 区東壁土層断面 (西より)



B-1 区北壁土層断面 (南より)



C-1 区東壁土層断面 (西より)



C-2 区北壁土層断面 (南より)



A-1 区黄褐色粘土層サヌカイト出土状況 (東より)



B-1 区 SD17 全景 (南東より)



B-1 区 SD01・17 全景 (西より)



B-1 区 SD17 B 土層断面 (西より)



B-1 区 SD17 A 土層断面 (北より)



A-1・2 区 SD01 全景 (北より)



A-1・2区 SD01・04 全景（北より）



A-1・2区 SD01 と上井用水（北より）



A-2区 SD01・02・04 全景（南より）



A-3区 SD01 全景（北より）



B-1 区 SD01 全景 (東より)



A-1 区 SD01 F 土層断面 (北より)



A-1 区 SD01 A 土層断面 (西より)



A-1 区 SD01 C 土層断面 (南より)



A-1 区 SD01 D 土層断面 (北より)

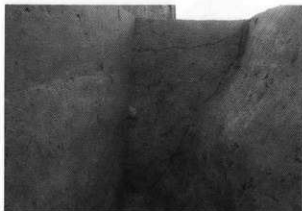
図版 14



A-2 区 SD01 E 土層断面 (北より)



B-1 区 SD01 A 土層断面 (西より)



B-1 区 SD01 B 土層断面 (東より)



A-2 区 SD04 E 土層断面 (北より)



B-1 区 SD03 A 土層断面 (北より)



B-1 区 SD03 D 土層断面 (南より)



A-1 区 SD04 A 土層断面 (南より)



A-1 区 SD04 D 土層断面 (北より)



A-1 区 SD01 上層遺物 (50) 出土状況 (東より)



A-1 区 SD01 上層遺物 (50) 出土状況 (南より)